

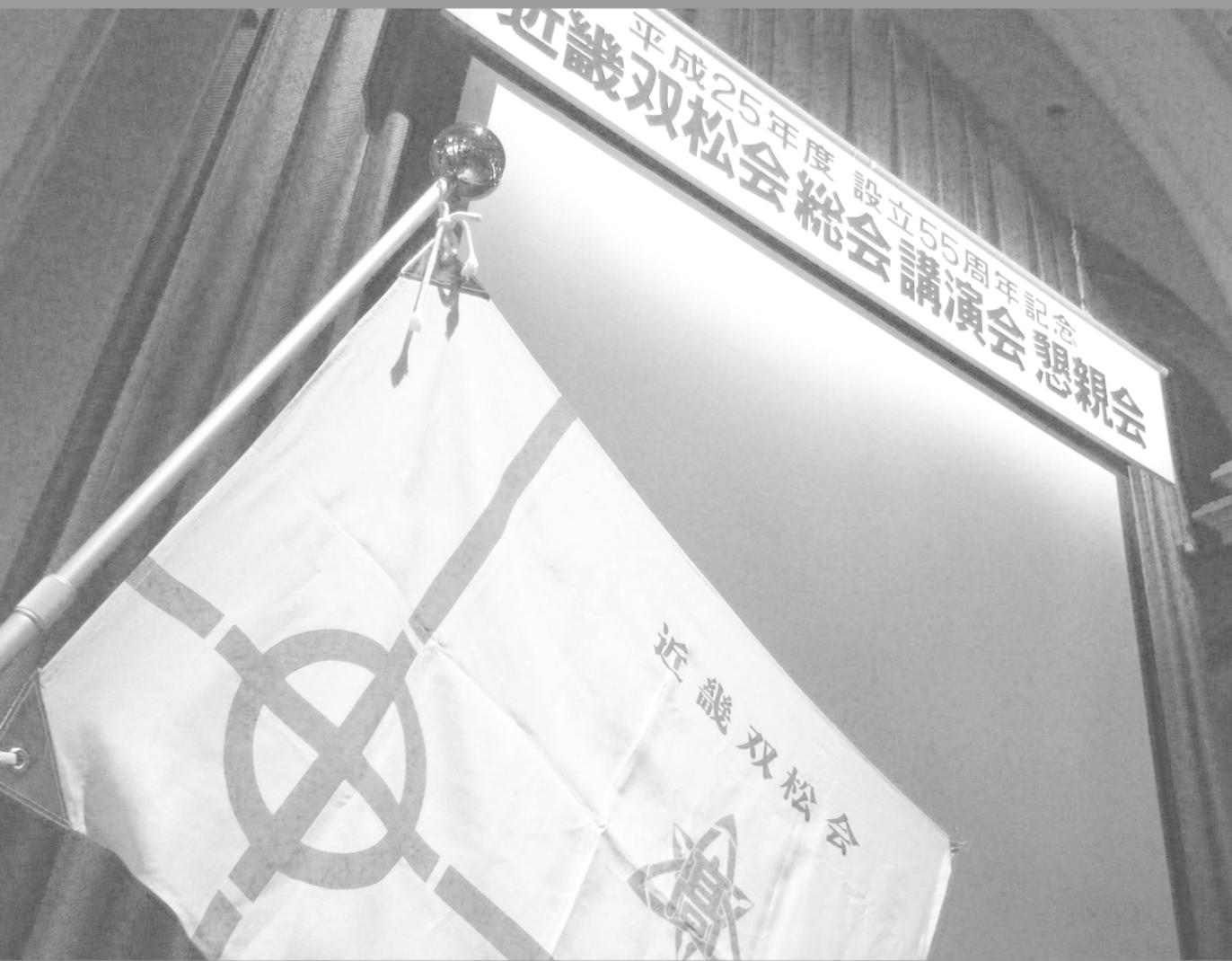
# 2013

## 設立55周年記念 近畿双松会報

— 2013(平成25)年度 —

島根県立松江中学校  
島根県立松江高等学校  
島根県立松江北高等学校





# あさひたださす (赤山健児の歌)

西村房太郎 作詞

岩佐万次郎 作曲

あーさひ たださす そうしょう の  
てんらい おーねに ひかりあ り  
なーみに くだくる みかづき の  
かーげに こゆうの しんをみ る  
てんちの せいをーみにしみて  
せいきを のーぶる いちひやくね ん

一、

朝暎<sup>あさひ</sup>直刺す双松の 天籟胸に光あり  
浪に砕くる三日月の 影に古雄の真をみる  
天地の精を身にしめて 正気を舒ぶる壹百年

二、

瘴煙<sup>ちやうえん</sup>罩むる椰子の下 月に嘯く夕あり  
氷雪鎖す丘の上 北斗に吟ずる晨あり  
万里の風に浪搏ちて 大鵬の翼揮へよや

三、

嗚呼剛健と質実と 心の楯に執り持てば  
悪魔<sup>アクマン</sup>の征矢も身にたたず 高く攀<sup>つか</sup>ぐる我旗の  
靈光迷路<sup>レイカウメイズ</sup>の闇を射て 理想の郷をてらすなり

四、

稜威輝く日の本の 国の礎さし固め  
東洋平和を保つべき 使命を負へる我等なり  
責務は重く身は軽し 起てや赤山健男児

# さんみやくうかびて (松江高・松江北高等学校校歌)

土岐善麿 作詞

高田三郎 作曲

さわやかに ♩ = 100

*mf*

さん みやくうか-び てはん とうみどりに さ

ざなみかが- やくみず のみやこよ

*mp*

しんりのひか り を もとめゆくとき

*mf*

ちせいのそ らはた かくひろく あ

おげばた- だ し いずもふ じ

一、

山脈浮かびて 半島みどりに  
 さざなみかがやく 水の都よ  
 真理のひかりを 求めゆくとき  
 知性の空は 高くひろく  
 仰げば正し 出雲富士

二、

郷土の歴史を 深くもたたへて  
 川風すがしく 渡す大橋  
 千鳥の城あと 街はさかえて  
 希望も新た かくて常に  
 自由の道を 進むべし

三、

健康ひとしく いそしみはげみて  
 世界の人たる 誇りにたたん  
 友情かわらず 胸をひらきて  
 こぞれりわれら 若く強く  
 松江北高 ここにあり



# 2013(平成25)年度 設立55周年記念 近畿双松会報

## 目次

あさひたださす (赤山健児の歌) .....	2
さんみゃくうかびて (松江高等学校・松江北高等学校校歌) .....	3
2013(平成25)年度 設立55周年記念近畿双松会「総会 記念講演会 謝恩懇親会」次第 .....	6
2013(平成25)年度 設立55周年記念「総会 記念講演会 謝恩懇親会」報告 .....	7
第三部:「謝恩懇親会」 .....	10
「謝恩大福引き大会」 .....	12
総会・講演会・謝恩懇親会 出席者名簿 .....	15
会長ご挨拶 近畿双松会会長 押田 良樹(高11・昭35卒) .....	19
来賓ご挨拶 双松会 会長 庄 司 肇(高11・昭35卒) .....	21
松江北高校校長 河原 一朗(高23・昭47卒) .....	22
2013(平成25)年度 松江北高10大ニュース(日付順) .....	24
記念写真 記念集合写真 .....	26
期別テーブル写真 .....	29
懇親会スナップ写真 .....	32
近畿双松会設立55周年「記念講演」 .....	34
演題:「企業の社会貢献活動 ～私の経営理念～」	
講師:古 瀬 誠(高16・昭40卒)	
総会議事(1) 2013(平成25)年度 近畿双松会 活動事業報告 .....	41
総会議事(2) 近畿双松会 会計報告・監査報告書 .....	42
総会議事(3) 2013(平成25)年度 役員一覧 .....	44
近畿双松会 会則 .....	45
2013(平成25)年度 運営費支援者ご芳名 .....	48
2013(平成25)年度 諸行事報告	
■第6回落語鑑賞会(亀屋寄席) .....	50
■第33回ゴルフコンペ .....	51
■第97回日本陸上競技選手権大会(女子3000m障害)応援 .....	52
■第8回「文楽」鑑賞会 .....	54
■第8回 歴史ウォーキング「新島八重の足跡」 .....	55
●「歴史ウォーキング」に参加して 森藤 哲章(高16) .....	56

同期会便り

◆高1期(昭和25年卒業)「隠居広場」	58
◆高2期(昭和26年卒業)「三日月会(高2期)」千秋楽の集いの報告	58
◆高9期(昭和33年卒業)	60
◆高16期(昭和40年卒業)	60
◆高22期(昭和46年卒業)	61
2014(平成26)年度 事務局会議新年会(兼)総会実行委員会慰労会	62
2014(平成26)年度 近畿双松会「新年役員懇親会」	63
近況報告	64
追悼 物故会員	71

自由投稿

『 <sup>ミミズ</sup> 蚯蚓』	和田 亮介(高1・昭25卒)	72
『松江の競技施設2題』～昭和グラウンドそして松江球場～	千葉 新一(高2・昭26卒)	74
『クラブ活動の思い出』	森岡 敏真(高6・昭30卒)	76
『平家物語の平敦盛と平重衡』－その遺跡を尋ね歩いて－	坂本 隆男(高9・昭33卒)	78
『ライセンス契約書と共に』	山岡 裕明(高9・昭33卒)	81
『国立民族学博物館と実家』	佐和田 丸(高10・昭34卒)	83
『松江城とその絵』についての思い	村尾 俊治(高11・昭35卒)	86
『近畿双松会に寄せる思い』	小泉 勝是(高14)	88
『松江の春は、、、』	池田 喜美代(高19・昭43卒)	90
『私の歩んできた道』	三好 資子(高20・昭44卒)	91
『55周年総会懇親会に参加して』	浜見 良樹(高20・昭44卒)	92
『運命の許す限りに 美しい花を咲かせば 私満足』	山崎 麻里子(高20・昭44卒)	93
『近畿双松会への思い』	村田 貢(高22・昭46卒)	94
『校歌・山脈浮かびて』	達山 暢(高29・昭53卒)	96
『演劇部の思い出』	廣瀬 弘美(高29・昭53卒)	97
『大阪市中央公会堂のこと』	宍道 弘志(高31・昭55卒)	98
『「そうしょう」とのご縁－』	安達 宏昭(高43・平4卒)	100

特別寄稿

『知られざる偉大な先人の面影を尋ねて』	押田 良樹(高11・昭35卒)	101
『私が走る理由』	荒井 悦加(高51・平12卒)	110

HPギャラリー逸品紹介

第27回産経国際書展文部科学大臣賞	田村 廸子(高11・昭35卒)	116
組写真『夏の日』平成25年10月吹田市展・教育委員会賞	三吉 孜(高16・昭40卒)	117

近畿双松会 55年の足跡～母校(双松会)と近畿双松会の歩み	118
近畿双松会 2002～2013年の活動報告	120
協賛広告	125
編集後記	127

# 2013(平成25)年度 設立55周年記念 近畿双松会「総会 記念講演会 謝恩懇親会」次第

2013年12月8日(日) 午前11時～午後4時(受付開始10時30分)  
於：大阪市中央公会堂 3F 中集会室

---

## ◆ 第一部「平成25年度総会」(11時～11時30分) 司会 三好 資子 常任幹事(高20)

---

1. 開会の辞：
2. 物故者黙祷：
3. 議長の選任：
4. 議事：(1) 活動報告 松本耕司 事務局長(高16)  
(2) 会計報告・監査報告 松本事務局長 梅木隆志監事(高16)  
(3) 役員を選任：松本事務局長  
(4) 設立55周年を記念し双松会本部に寄付：松本事務局長
5. 閉会の辞

---

## ◆ 第二部「記念講演会」(11時30分～12時30分) 司会 松本事務局長(高16)

---

- 【演題】：「企業の社会貢献活動～私の経営理念～」 【講師】：古瀬 誠氏(高16)  
講師の紹介：慶應義塾大学卒・双松会副会長・(株)山陰合同銀行会長  
島根県商工会議所連合会会頭、松江商工会議所会頭、島根県経営者協会会長、山陰インド  
協会名誉会長など  
<休憩 10分>

---

## ◆ 第三部「謝恩懇親会」(12時40分～16時) 司会 松本 潤 副会長(高23)

---

1. 開会の辞：
2. ご来賓紹介：  
庄 司 肇 様(双松会会長) 金 平 憲 様(双松会幹事長)  
河原 一 朗 様(松江北高校校長) 内 藤 永 嗣 様(松江北高校教諭・双松会校内幹事)  
古 瀬 誠 様(講師・(株)山陰合同銀行会長) 田 中 稔 様(東京双松会・代表表敬)  
糸 原 直 彦 様(島根県大阪事務所長) 竹 谷 獎 様(近畿松江会事務局長)
3. ご挨拶： 近畿双松会 押田良樹会長(高11)
4. ご来賓ご挨拶： 双松会 庄司肇会長(高11)  
島根県立松江北高等学校 河原一朗校長(高23)
5. 乾杯：【音頭】双松会 金平 憲 幹事長(高16)
6. 会食・懇親・スピーチ：
7. 記念写真撮影：【撮影】土田和男常任幹事(高16)
8. 謝恩大福引き大会：【進行】梅木監事(高16) 渡辺 悟副会長(高20)
9. 飛び入り余興：
10. 校歌斉唱：『赤山健児の歌』『山脈浮かびて(全曲)』
11. 万歳三唱：【音頭】和田亮介様(高1)
12. 閉会の辞：

<終了(解散)：16時>

# 2013 (平成25)年度 設立55周年記念「総会 記念講演会 謝恩懇親会」報告

事務局長 松本耕司 (高16)

## 1. 2013 (平成25)年度 新年役員懇親会(年間活動方針)

恒例の新年役員懇親会は、平成25年1月24日(金)に17名の役員が出席して中央電気倶楽部で開催され、下記のような運営骨子を了解いただきました。

### [平成25年度 運営の基本]

本年度は設立55周年の記念すべき年であり、また会則改訂初年度であることを念頭に、下記の取り組みをおこなう。

- ① 設立55周年記念総会懇親会を盛大におこなう。
- ② 記念総会懇親会は150名以上の参加をめざし、各期活動の活発化を図る。
- ③ 55周年記念事業をおこなう。(最終的に郷土産品の福引き大会と記念会報の発行に決定)
- ④ 「会則改訂」の周知とスムーズな移行措置を図る。
- ⑤ その他の諸行事も例年どおり開催。

### [出席の役員]

<会長>押田良樹(高11) <副会長>松本耕司(高16)・渡辺悟(高20)・松本潤(高23)  
<監事>梅木隆志(高16) <常任幹事>山田稔(高5)・廣政俣彦(高7)・金坂喜好(高15)・土田和男(高16)・岩田一志(高19)・三好資子(高20)・富岡幸子(高35) <幹事>田村稔久(高6)・山崎昶(高8)・清水良子(高9)・萩野貫悟(高12)・池田喜美代(高19) 以上17名

## 2. 2013 (平成25)年度設立55周年記念 「総会 記念講演会 謝恩懇親会」

平成25年12月8日(日)午前11時～午後4時 於：大阪市中央公会堂3F 中集会室

55周年記念総会は、何としても大阪の伝統と文化の華の象徴的存在である大阪市中央公会堂で開催したいと念願していましたが、一年前のくじ引きで宍道弘志常任幹事(高31)の強運が見事に引き当て、平成22年に続いて二度目の開催をすることができました。実に幸先のいいスタートでした。

参加のお申し込みも締め切り前にはグングン伸び、150名を超えて大安心。当日は快晴に恵まれ大盛會を予感させる中、役員の皆様は朝9時に集合して福引きの郷土産品を開梱、陳列し準備にあたりました。

開会前には、松本事務局長より以下のご説明をして、いよいよ第一部の開会となりました。

- ① 50周年の周年事業以降、今後は5年ごとの周年事業の際には皆様には無理をお願いして集まっただけ、間の4年間は粛々と貯金をしながら巡航運転でいきたいとお約束したが、今回が目標であったその55周年であること。
- ② しかも、昨年の総会で卒業生全員が生涯会員であることを基本とする「新会則」をご承認いただいてから、今回が初めての総会で、二重の意義があること。
- ③ 55周年事業として何をおこなうかについては、昨年の総会では皆さんからアンケートをいただき、新年から役員会で論議を重ねてきたが、最終的には支えていただいている会員皆様への謝恩の意味を込めて、郷土産品の福引き大会をおこなうことになったこと。

④ 従って、本日は長丁場ではあるが最後に予定している「大福引き大会」をヤマに考えており、そのため、例年とは異なり、特に第一部の総会は必要最小限の議事にとどめて次に進行したいと考えているので、ご理解、ご協力をいただきたいこと。

### 3. 第一部：「2013(平成25)年度総会」

第一部は三好資子常任幹事(高20)の司会で開会し、まず、この1年間で事務局にご連絡のあった物故者の方々(後掲)に黙祷を捧げました。本年は旧制松江中学で教鞭をとられた特別会員の八木幸治先生、また昭63～平8まで当会の第四代会長をつとめられた児玉治利常任顧問(中61)の訃報もあり、ご両氏ともに当会の発展に特別のご貢献をいただいた方でその記憶もまだ新しいだけに、特別な感慨をいだかれた方も多数いらっしゃったことと思います。

続いて、押田会長を議長にして総会議事に入り、松本耕司事務局長(高16)から、議事(1)「活動報告」(別掲)、(2)「会計報告」(別掲)、ならびに梅木隆志監事(高16)から「監査報告」がなされ、満場一致で承認されました。

「活動報告」は土田和男常任幹事(高16)の制作によるスライドで紹介されました。その中で6月におこなわれた日本陸上競技選手権・女子3000m障害で荒井悦加会員(高51)が見事に連覇を果たしたことが紹介されましたが、従来からOB・OGでの陸上競技の日本選手権獲得者は昭和36年の棒高跳びの山田寧さん(高9)と平成24年の荒井さんの2名であると紹介していた件につき、以下の訂正がありました。

即ち、昭和4年から6年にかけて津田晴一郎さん(中45・大14卒)が1,500mから10,000mで5回にわたり優勝していること、津田さんはオリンピックのマラソンで、昭和3年のアムステルダムは6位、昭和7年のロサンゼルスは5位の名選手であったこと、従って、荒井さんは旧制・新制を通算すると双松会としては3人目のチャンピオンであったことの訂正報告がなされました。⇒(荒井さんのレースの記事は別掲)

続いて、議事(3)「役員を選任」(別掲)の報告があり、本年度は任期中間年であることから異動のあった方のみについて紹介し、拍手をもって承認されました。

◆新しく役員になられた方：久保田幸雄幹事(高2)、四方田 司幹事(高13)、糸原直彦幹事(高24)

◆役員でご逝去された方：児玉治利常任顧問(中61)、須藤信幸幹事(高4)



最後に、議事(4)「設立55周年を記念し双松会本部に寄付」する件につき、松本事務局長から「10万円」を寄付したいとの提案がなされ、満場拍手のうちに承認されて総会議事は滞りなく終了しました。



#### 4. 第二部：「記念講演会」

第二部は、(株)山陰合同銀行会長の古瀬 誠様(高16・昭40卒)をお迎えし、同期の松本事務局長の司会により、「企業の社会貢献活動～私の経営理念～」の演題でご講演をいただきました。

松江・島根・山陰の地で、さまざまな社会の課題に対して発信をしていらっしゃるお話には、参加者全員が感銘を受け、55周年記念にふさわしい元気の出る記念講演会となりました。古瀬様には深く感謝を申し上げる次第です。

→ご講演の内容につきましては、当日の内容をできるだけ忠実に別掲しましたので、ご覧ください。

#### 5. 第三部：「謝恩懇親会」 司会・報告 松本 潤副会長(高23・昭47卒)＝別掲

#### 6. 「謝恩大福引き大会」 司会・報告 梅木隆志監事(高16・昭40卒)＝別掲

#### 7. 総会・記念講演会・謝恩懇親会を支えていただいた皆様のご紹介

以上、総会・講演会・懇親会は多くの役員・有志の皆様のご協力により、無事盛況裡に開催、終了することができました。下記にお名前を紹介し、心より御礼を申し上げます。

■実行委員長 押田良樹(高11) ■総括 松本耕司(高16)、総括補佐 千葉秀二(高19) ■第一部司会 三好資子(高20) ■第二部司会 松本耕司 ■第三部司会 松本潤(高23)、補佐 橘千里(高23)、廣瀬弘美(高29) ■中央公会堂担当 宍道弘志(高31) ■受付・会計 池田喜美代(高19)、物種慶子(高20)、橘千里、木田京子(高27)、富岡幸子(高35) ■誘導案内：安達宏昭(高43)、井原和彦(高55) ■会場設営・案内 三成宏二(高16)、岩田一志(高19) ■来賓担当 押田良樹、松本耕司、梅木隆志(高16)、三成宏二、渡辺悟(高20)、松本潤、橘千里 ■スライド制作：押田良樹、土田和男(高16)、松本耕司 ■映像音響・録音・照明 宍道弘志、廣瀬弘美 ■カメラ 土田和男、村田 貢(高22)、達山暢(高29)、千葉潮(高30)、富岡幸子、安達宏昭 ■福引大会関係 総括・司会 梅木隆志、補佐 岩田一志、渡辺悟、商品担当 加藤巡一(高14)、三好資子、商品お渡し役 山寄麻里子(高20)、村田貢、22期14名の皆さん

### 第三部：「謝恩懇親会」

司会・報告 松本 潤副会長(高23・昭47卒)

第三部の謝恩懇親会は、まず、ご来賓の方々の紹介から始まりました。松江から双松会の庄司肇会長(高11)、金平憲幹事長(高16)、母校松江北高からは河原一郎校長(高23)、内藤永嗣教諭(高34・双松会校内幹事)、講演をお願いした(株)山陰合同銀行の古瀬誠会長(高16)、東京双松会から代表表敬にお見えいただいた田中稔さん(高16)、島根県大阪事務所の糸原直彦所長(高24)、近畿松江会の竹谷奨事務局長の8名のご来賓に盛大な歓迎の拍手が送られました。

続いて、当会押田会長がご挨拶をされ、双松会庄司会長、松江北高河原校長から双松会、在校生の近況を交えてご祝辞をいただきました。また、壇上で55周年を記念しての双松会本部への寄付を押田会長から庄司会長にお渡しいたしました。(ご挨拶・ご祝辞内容は別掲)

続いて双松会金平幹事長のご発声で、全員で声高らかに「乾杯」し、謝恩懇親会がスタートしました。例年を大きく上回る153名の参加で、会場は熱気に溢れ、あちこちで歓談の輪が広がっていきました。

歓談の途中で、今春、近畿地区の大学に入学された学生さん6名を紹介し、内藤先生から激励の言葉をいただきました。そして、一人ひとりに3年時の担任の先生からの励ましのメッセージを手渡していただきました。学生の皆さんの明るく初々しい笑顔が印象的でした。

しばしの歓談の後、恒例の記念撮影。各カメラマン土田常任幹事の撮影により、卒業年次ごとに5組に分かれて全員がカメラにおさまりました。



記念撮影が速やかに終了すると、お待ちかね、今回のメインイベント「55周年大福引大会」の始まりです。(大福引大会顛末記は後掲)



大いに盛り上がった大福引大会の熱気も冷めやらぬ中、双松会の若手?エンターティナー達の登場で余興が始まり、自慢のノドを皆さんに披露いたしました。トップバッターは、遙々九州から駆け付けてくれました、福本秀一さん(高29)の安来節。同期の熱い声援をバックに、三味も太鼓もいらない声一本の荒技、正調安来節。まさに名人芸でありました。

続いて今回、14人と最も参加者の多い22

期のまとめ役、村田貢さんのオンステージ。22期全員をバックにウクレレを奏でながら「島根っ子の宝」(BEGINの「島人の宝」の替え歌)を故郷への思いを込めて披露。とても暖かい風が会場を吹き抜けていきました。大トリは、三好資子さん(高20)・千葉潮さん(高30)のデュエットによる不朽の名曲「学生時代」で、ステージには学生の皆さんも加わり、若きあの頃を思い出しながら会場の皆さんと一緒に合唱。爽やかな空気が会場を包み、そのままエンディングの校歌大合唱へと移っていきました。

「赤山健児の歌」、そして、「山脈浮かびて」…。たくさんの皆さんがステージに集まり、まさに熱のこもった大合唱でした。



最後は、和田亮介さん(高1・第五代会長)に「万歳三唱」のご発声をいただきました。和田先輩からは、55周年記念にふさわしい、今までに感じたことのない感動を受け、近畿双松会が将来に向けて大きく発展していくことを確信した、そして先輩と後輩が一体となった心に残る良い記念の会だった、と過分な評価をいただき、そのお話が参加者の心にしみ込む真に印象に残るご挨拶をいただきました。

「万歳！ 万歳！！ 万歳！！！」153人全員で力強く万歳を三唱し盛会のうちに来年の再会を誓ってお開きとなりました。



万歳三唱の発声を前に挨拶する和田元会長

## 「謝恩大福引き大会」

司会・報告 梅木隆志監事(高16・昭40卒)

昨年12月8日(日)の55周年総会にご出席の皆さん、福引大会はいかがだったでしょうか？

前回の総会でのアンケート、新年役員会での意見交換で55周年行事について検討をしましたが、ご要望の一番多かった「福引大会」を行うことに決し、昨年の7月から毎月1回のペースで準備を開始しました。

福引の景品については、「ふるさと納税」を意識し、地元貢献する意味で、故郷の品物にすることに決定。

打ち合わせで品目を一応決定し、幹事の数名は、「夏休みの宿題」と称してお盆休みに帰郷した際、故郷にふさわしい品物と発注先を選別すべく、真夏の暑い中、情報収集で松江市内を歩き回りました。

ご協力、ご苦労いただいた役員の皆さんは次の方々です。(加藤巡一さん(高14)、渡辺悟さん(高20)、三好資子さん(同))

その情報、及び11月末時点の出席予定人数により、別掲のと通りの景品・個数を決定しました。

なお、別紙の景品の中で、「恵曇・泉屋商店の魚の干物」の二種類は、山本雅昭常任顧問(高7)からご寄付いただいたものです。泉屋商店は、創業天保年間、「こだわりの一夜干し」がキャッチフレーズとのこと。この紙面をお借りして、山本常任顧問様には厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。



福引の景品は、それぞれ地元自慢の逸品ですが、一部を改めて紹介いたします。

### ◎焼酎漬け朝鮮人参

大根島では、朝鮮人参そのものの生産が減っており、入手は普通のルートでは大変困難です。そこで来賓としてご参加いただいた近畿松江会の事務局長で、大根島出身の竹谷奨さんにご無理を言い、竹谷さんがまた、地元のご友人にご無理を言っていただいて、特別に手に入れることが出来たもので、この秋採れたばかりの朝鮮人参による最高級品です。長野県辺りでは3年で収穫するそうですが、大根島では、じっくりと6年かけて育成するそうで、本当に貴重な品物です。

飲み方ですが、人参のエキスが十分出るまで1年間置いておき、その後、半分を飲んで、またホワイトリカーを注いでピンを一杯にし、毎年同様にし、6年かけて朝鮮人参のエキスが出切るまで飲むというのが飲み方のコツということです。



### ◎仁多米

東日本の横綱コシヒカリ、西日本の横綱と言われる「仁多米」。奥出雲に発注したものです。「仁多米」は、昨年の11月末から2週に亘ってNHKの「鶴瓶の家族に乾杯」という番組でも紹介されました全国的に有名な「米」です。

### 近畿双松会 55 周年記念大福引大会景品

	景 品	個 数
特別賞 1	【焼酎漬け朝鮮人参】	1
特別賞 2	「水郷松江・神国出雲」観光地図 2 枚	10
1 等	【仁多米 15 キロ】	5
2 等	【故郷の日本酒】 大吟醸（豊の秋・李白・月山・隠岐誉）吟醸（王禄の丈径）	5
3 等	①恵曇・泉屋商店「特選・魚の干物」	5
	②楽山窯 1 2 代空郷作「湯のみ」	5
4 等	①長岡屋茂助「あご野焼セット」	5
	②東出雲の西条柿の「干し柿」	5
5 等	①恵曇・泉屋商店「魚の干物」	5
	②中村茶舗「缶入り銘茶」(山吹・八重垣・八雲ほまれ)	5
6 等	①本庄の「津田かぶの樽漬け」	10
	②松江地ビール「へるん」 6 缶	10
7 等	①彩雲堂「若草&伯耆坊」	20
	②穴道湖シジミ真空パック 4 袋	25
	③十六島海苔佃煮 2 本	15
	④美保関町北浦の「板ワカメ」 3 袋	15
	⑤頓原の出雲そば「琴弾の里」	20

## 「謝恩大福引き大会」

### ◎地元の「日本酒」

我々卒業生の出身地区を考慮し、選定したものです。松江地区を代表し「豊の秋」・「李白」、安来・広瀬地区を代表し「月山」、隠岐地区を代表し「隠岐誉」の大吟醸、東出雲地区を代表し、「王禄」の吟醸「丈径」（タケミチ）です。

なお、王禄の大吟醸は、年間1,500本しか作らないとのことで手に入れることが出来ませんでした。大吟醸並み、あるいは大吟醸以上とも噂される吟醸「タケミチ」を準備しました。

### ◎楽山窯12代空郷さん作「湯のみ」

楽山窯は、330年続く松江藩の藩窯で、「不味公」お好みの窯だったそうです。また、西川津校舎時代の「宍道湖一周マラソン」の前の訓練、「楽山一周」に忘れられない思い出がある方は沢山いらっしゃると思います。そこで数ある窯元の中から、楽山窯の最高級品「湯のみ」に決定しました。

### ◎西条柿の「干し柿」

皇室にも献上された、甘さ日本一と言われる東出雲町名産の品です。

### ◎松江地ビール「ヘルン」

国際ビール大賞の金賞・銀賞を受賞した地ビールのセットです。

### ◎十六島(ウップルイ)海苔佃煮

一般的な海苔の佃煮は、アオサを原料としていますが、十六島海苔佃煮は十六島の岩海苔を原料とした高級品です。

以上、当日の景品の一部を紹介しました。

大福引き大会は、「空くじなし」という熱気の中で大盛況の中で終了し、皆様の大歓声や拍手に、企画、準備、買い付け、搬入と半年近く続いた苦労も報われた思いがいたしました。景品渡しにご協力いただきました22期の各位には厚く御礼申し上げます。

会員の皆様には、5年後の60周年記念福引大会を是非ご期待いただきたいと思います。



## 総会・講演会・謝恩懇親会 出席者名簿

### ご来賓

	卒業期	卒業年	氏名	
1	高 11	S 35	庄 司 肇	双松会会長
2	高 16	S 40	金 平 憲	双松会幹事長（母衣小・附属中）
3	高 23	S 47	河原 一朗	松江北高校長（バスケット）
4	高 34	S 58	内藤 永嗣	松江北高教諭・双松会校内幹事
5	講師・高16	S 40	古 瀬 誠	（株）山陰合同銀行会長・双松会副会長（附属小・附属中）
6	高 16	S 40	田 中 稔	東京双松会代表（常任幹事）（北堀小・附属中）
7	高 24	S 48	糸原 直彦	島根県大阪事務所長
8			竹 谷 奨	近畿松江会事務局長（八束小・八束中・松江高専）

### 会員

	卒業期	卒業年	氏名	旧姓	出身（小）	出身（中）	クラブ
9	中 68	S 23	青戸 元也		島根師範付属	旧松中	剣道・テニス
10	中 68	S 23	荒銀 昌治		広瀬町	旧松中	
11	高 1	S 25	伊藤 雅義		来待	旧松中	生物
12	高 1	S 25	宇藤 二男丸			旧松中	
13	高 1	S 25	荻田 運三郎		雑賀・乃木	旧松中	映画研究会
14	高 1	S 25	喜多川 治美				
15	高 1	S 25	林原 信光				
16	高 1	S 25	和田 亮介	木幡	宍道	旧松中	剣道・バレー
17	高 2	S 26	久保田 幸雄		川津	旧松中	バレーボール
18	高 2	S 26	竹森 英二	國田	北堀	旧松中	野球
19	高 5	S 29	春日 敏邦		朝日	松江三	美術
20	高 5	S 29	寺本 尚由		朝日	松江三	陸上部
21	高 6	S 30	田村 稔久		北堀	松江一	
22	高 6	S 30	原 卓司		朝日	松江三	
23	高 6	S 30	引野 光夫		揖屋	揖屋・松江四	バドミントン
24	高 6	S 30	森岡 敏真		母衣・西郷（隠岐）・雑賀（引揚げ時、大連）	松江二	ユネスコ・写真・英研
25	高 6	S 30	今井 廸子	入江	附属	附属	
26	高 7	S 31	青戸 俊夫		生馬	生馬	新聞
27	高 7	S 31	寺本 好弘	岩田	北堀	松江一	バスケット
28	高 7	S 31	廣政 俣彦		雑賀	松江三	
29	高 8	S 32	長谷川 忠雄		白潟	松江三	
30	高 8	S 32	山崎 杲		久利（大田）	松江二	
31	高 8	S 32	福間 笙子	坪内			
32	高 9	S 33	澄川 光成	伊藤	雑賀	松江四	
33	高 9	S 33	田中 英明	小立	乃木	松江三	柔道
34	高 9	S 33	片岡 芙美子	竹内	北堀	松江一	
35	高 9	S 33	木村 八重子	木山	母衣	附属	ソフトボール
36	高 9	S 33	佐々木 悦子	岡部	徳島市立津田小	松江一	
37	高 9	S 33	佐藤 早智子	松村	雑賀	附属	花道・手芸部

総会・講演会・謝恩懇親会 出席者名簿

会員

	卒業期	卒業年	氏名	旧姓	出身(小)	出身(中)	クラブ
38	高9	S 33	篠田 いづみ		附属	附属	
39	高9	S 33	清水 良子	松尾	北堀	松江一	化学分析
40	高10	S 34	佐藤 菁治		大野	大野	
41	高10	S 34	佐和田 丸		頓原(飯石)	頓原(飯石)	
42	高11	S 35	押田 良樹		雑賀	松江四	軟式テニス・図書
43	高11	S 35	小久江 良雄			松江四	
44	高11	S 35	神門 英明		朝日	松江三	
45	高11	S 35	田中 一男		白潟	松江三	宍道湖一周、2・3年連続学年1位
46	高11	S 35	畑田 稔		附属	附属	卓球
47	高11	S 35	村尾 俊治		雑賀	松江四	絵画
48	高11	S 35	吉野 勝美		玉湯	玉湯	
49	高11	S 35	北村 雅子	矢野	津田	松江四	音楽部
50	高11	S 35	田村 廸子	森広			
51	高11	S 35	中尾 長子	高橋	附属	附属	
52	高12	S 36	斎尾 秀城		雑賀	松江四	生物・吹奏楽・弓道
53	高12	S 36	萩野 貫悟	筒井	揖屋	東出雲(揖屋)	
54	高13	S 37	岩橋 慶和		附属	附属	
55	高13	S 37	榎瀬 毓夫		朝日	松江三	陸上部
56	高13	S 37	持田 勲		津田	松江四	バレー
57	高13	S 37	四方田 司		附属	附属	サッカー
58	高13	S 37	渡部 日吉				ボート部
59	高13	S 37	藤田 トク子	小笹	白潟	松江三	ソフト
60	高13	S 37	山下 俱子	今井	乃木	松江三	美術
61	高14	S 38	加藤 巡一		附属	松江一	化学分析
62	高14	S 38	小泉 勝是		北堀	松江一	
63	高14	S 38	木幡 晃正		宍道	附属	陸上部
64	高14	S 38	宮原 琢郎		温泉津	温泉津	考古学
65	高15	S 39	金坂 喜好		大野	大野	
66	高15	S 39	佐藤 修介		内中原	松江一	新聞
67	高16	S 40	井上 伸久		川津	松江二	
68	高16	S 40	梅木 隆志		森山(下字部尾分)	美保関北	陸上部
69	高16	S 40	下寺 睦朗		浜原	川本	
70	高16	S 40	土田 和男		内中原	松江一	バドミントン
71	高16	S 40	松本 耕司		本庄	本庄	陸上部
72	高16	S 40	三成 宏二		附属	附属	
73	高16	S 40	森藤 哲章		広瀬	広瀬	
74	高16	S 40	都田 艶子		片江	美保関北	
75	高16	S 40	森川 葉子	石川	片江	美保関北	
76	高16	S 40	山田 敬子	矢壁	松原(浜田)・川本・益田	益田東・浜田二・浜田高校	美術
77	高17	S 41	岡 久夫		法吉	松江一	陸上部
78	高17	S 41	松本 芳樹		本庄	本庄	
79	高17	S 41	木島 光子	中村	本庄	本庄	陸上部

## 会員

	卒業期	卒業年	氏名	旧姓	出身(小)	出身(中)	クラブ
80	高17	S41	島本 妃早美	米田	母衣	松江二	
81	高17	S41	宮本 由美子	永田	本庄	本庄	陸上部
82	高18	S42	小田 一美		内中原	松江一	天文気象
83	高19	S43	岩田 一志		荒島(安来)	安来三	バレー・文芸
84	高19	S43	江角 健一		本庄	本庄	陸上部
85	高19	S43	千葉 秀二		附属	附属	
86	高19	S43	新見 泰朗		附属	附属	
87	高19	S43	万波 迪義		附属	附属	陸上部
88	高19	S43	元 栄 徹	成相	飯梨(安来)	安来三	
89	高19	S43	池田 喜美代	川原	北堀	松江一	考古学
90	高20	S44	浜見 良樹		松原(浜田)	浜田二	野球部
91	高20	S44	渡 辺 悟		附属	附属	ボート部
92	高20	S44	佐野 和子		富田(高槻)	附属	バドミントン部
93	高20	S44	三好 資子	恩田	北堀	松江一	(帰宅部)
94	高20	S44	物種 慶子	北脇	本庄	附属	
95	高20	S44	山崎 麻里子	木村	益田・松原小(浜田)	浜田二・松江一	双曲(お琴)
96	高22	S46	石川 章		大芦	島根	
97	高22	S46	石橋 善和		母衣	附属	
98	高22	S46	太田 朗夫		北堀	松江一	
99	高22	S46	実重 祐二		安来	安来一	
100	高22	S46	内藤 清志				
101	高22	S46	永瀬 光一郎		母衣	松江二	
102	高22	S46	村 田 貢		西郷	西郷	バンド活動 早弁クラブ
103	高22	S46	大浦 綾子	大浦	北堀	松江一	機械体操
104	高22	S46	大浜 緑	宮本	本庄	本庄	華道
105	高22	S46	木山 洋子	平田	三成・上山佐・広瀬小	広瀬・西郷中	
106	高22	S46	鈴木 厚子	原田	本庄	本庄	
107	高22	S46	鶴羽 孝子	石橋	持田	松江二	
108	高22	S46	西村 紀子	松本	附属	附属	茶道部
109	高22	S46	松下 和子	川見	内中原	松江一	
110	高23	S47	朝比奈 博則		吉田(安来)	安来二	野球
111	高23	S47	松本 潤		安来	安来一	
112	高23	S47	森脇 泰雄				
113	高23	S47	橘 千里	小倉	広瀬	広瀬	
114	高23	S47	松本 幸子		母衣	松江二	バドミントン
115	高27	S51	木田 京子	能海	本庄	本庄	(帰宅部)
116	高27	S51	新宮 富美子	新川	母衣	松江二	
117	高27	S51	松田 稚子	永島	意東	東出雲	硬式テニス
118	高29	S53	太田 春樹		美保関	美保関南	サッカー
119	高29(松江)	S53	達 山 暢		北堀(城北)	附属	写真・映画研究
120	高29	S53	金田 康嗣		附属	附属	陸上部
121	高29(福岡)	S53	福本 秀一		内中原	松江一	硬式テニス

総会・講演会・謝恩懇親会 出席者名簿

会員

	卒業期	卒業年	氏名	旧姓	出身(小)	出身(中)	クラブ
122	高29	S 53	山本 修司		恵曇	鹿島	バレー
123	高29	S 53	須藤 聖子	須藤	大宅(京都)	松江二	剣道
124	高29	S 53	田中 年恵	森広	母衣	松江二	体操部
125	高29	S 53	野津 さとみ		安来	安来一	
126	高29	S 53	浜野 則子	田中	城北(法吉)	松江二	J R C
127	高29	S 53	廣瀬 弘美	藤原	北堀(城北)	松江一	演劇
128	高29	S 53	蓑田 久美子	野津	内中原	松江二	剣道
129	高30	S 54	千葉 潮		安来	安来一	考古学
130	高30	S 54	阿部 能子	米田	附属	附属	
131	高31(松江)	S 55	糸川 孝一		大津(出雲)	益田東	合唱部
132	高31	S 55	穴道 弘志		内中原	松江一	弓道
133	高32	S 56	木村 滋樹				
134	高32	S 56	田黒 公司				
135	高32	S 56	中島 誠				
136	高32	S 56	藤本 斉子	藤原			
137	高34	S 58	山岡 雅仁		西郷	西郷	バレーボール
138	高34	S 58	山岡 祐子	山岡	福井(隠岐海士)	平田	合唱
139	高35	S 59	吉岡 浩司				
140	高35	S 59	富岡 幸子	三和	七類	美保関北	
141	高36	S 60	関谷 知之				
142	高38	S 62	長谷川 浩之		白瀨小	松江三	野球部
143	高39	S 63	西村 潔				
144	高43	H 4	安達 宏昭		内中原	松江一	バドミントン
145	高49	H 10	新宮 洋和				
146	高55	H 16	井原 和彦		附属	附属	硬式テニス

学生ゲスト

	卒業期	卒業年	氏名	旧姓	出身(小)	出身(中)	クラブ
147	高59	H 20	築山 健一		附属	附属	バレーボール
148	高64	H 25	宇田川 幹生		内中原	松江一	水泳
149	高64	H 25	藤本 晃輔				
150	高64	H 25	牧野 淳一		生馬	松江一	サッカー
151	高64	H 25	吉岡 祥平		法吉	附属	登山
152	高64	H 25	戸田 香菜子		赤江	安来三	弓道部
153	高64	H 25	福光 理美子		古江	湖北	弦楽同好会

### 近畿双松会 会長 押田良樹(高11・昭35卒)



押田 良樹(高11)  
近畿双松会会長

今日はこのように沢山の会員の皆様にお集まりいただき、大阪のシンボルの一つで、伝統のある中之島中央公会堂で55周年の記念の会を開催できましたことを本当に嬉しく思っております。真に有り難うございました。

ご来賓の皆様には遠路お越しを賜り有り難うございました。また古瀬会長様にはご多用の中、記念講演をお引き受けいただき、合銀さんの力強い地域社会への貢献活動の大変有益なお話をお聞かせいただき、郷土の為に心強く思いました。有り難うございました。

さて55周年ということで近畿双松会の歩みを少し振り返ってみたいと思います。この会の元々の創立時期は明確な記録が残っておりませんが先輩方の回顧録などを拝見しますと大正の終わりか昭和の初めころ近畿在住の松江中学卒業者によって結成されております。その後戦争をはさんでかなり長い中断があった後、昭和33年に復活、再開され、それから今年で55周年目になるということです。

一方、戦後、昭和23年の学制改革で旧制松江中学は新制の松江高校（最初の1年は松江第一高校）へ、そして後継の松江北高へと移った次第ですが、この新制高校の同窓会として近畿では昭和42年に近畿松高北高同窓会が発足し、今日もご出席の和田亮介先輩（高1）が初代の会長を務められました。そして、近畿においても暫くはこの近畿双松会と近畿松高北高同窓会の新旧二つの同窓会が並存していました。それは本部においても同様でしたが、昭和51年に母校が創立100周年を迎え、その2年後の昭和53年に校舎が川津から赤山へと移転がおこなわれたことなどを契機として、昭和54年に新旧二つの同窓会が、名称も「双松会」に一本化され、合体しました。これを受けて近畿においても徐々に一本化がすすみ、平成3年に名実ともに近畿双松会として新旧大合同したというのが近畿双松会の歴史でございます。

こういった歴史を振り返りますと、それぞれの時期におけるいろいろな先輩諸氏たちの母校愛、同窓愛には、あらためて尊敬と感謝の念を強く覚えるのであります。その中で、先ほども物故者への黙祷を捧げましたが、昨年、特別会員の戦中戦後の混乱期に教鞭をとられた八木幸治先生、また、今年になって、新旧合同の際の会長でいらっしゃった児玉治利常任顧問がお亡くなりになりました。お二人とも近畿双松会の歴史の中では特筆すべきご貢献をいただいた方でございます。時の流れを強く感じるとともに、大変残念な思いをいたしました。心からの感謝と追悼の念を捧げさせていただきたいと思っております。

昨年、週刊エコノミストで「名門高校の校風と人脈」という記事に母校が取りあげられ30

数名の同窓の先輩方が取りあげられ、さすが137年の歴史であると嬉しく、誇りを感じましたが、そこに掲載された方々以外にも多くの優れた方々がいらっしゃる事に気づきます。私はそういう方々の事績に触れたいと常に心がけていますが、掲載された方々以外にも、「サクラ読本」で有名な井上赴さん（中29・明42卒）、「収容所からきた手紙」で知られる隠岐出身の山本幡男さん（中46・大15卒）、プロ野球の公式記録員第一号として「野球の殿堂」入りされた山内以九士さん（中40・大9卒）などがそうです。

また、最近、知りましたがノーベル賞作家の川端康成が旧制茨木中学のときに恩師として心から尊敬し慕った英語教師が倉崎仁一郎さん（中7・明19卒）という我々の先輩であることがわかりました。生徒に慕われる素晴らしい人格者であり、後の川端文学の形成に大きな影響を与えたということで、今、ある研究者の方が調査を続けられており、できる範囲での協力をしているところです。全貌が明らかになることを心待ちにしながら、求められれば同窓の後輩としてさらにその調査にも協力したいと考えています。

双松会員の中で素晴らしい方がいらっしゃることを知るには大変嬉しいことですが、そういう意味で若い方々の中で今年の総会で紹介した安達宏昭さん（高43・平4卒）は大阪大学で結晶化技術の研究をされ、昨年は「市村賞」を受賞された科学者として脚光を浴びる一方、大学発ベンチャー企業「創晶」の社長としても頑張っておられます。今日は学年幹事の一人としてこの会の進行運営のために汗を流していただいているところです（拍手）。また、同じく近畿双松会と縁の深い荒井（辰巳）悦加さん（高51・平12卒）は今年もめでたく女子3,000m障害で二連覇を果たされました。お二人には今後益々のご活躍を期待したいと思います。お二人以外にも沢山いらっしゃると思いますが、この場でのご紹介はここまでとさせていただきます。

最後になりましたが、今年は55周年を祝うということで、いろいろ考えましたがわかりやすく郷土の物産の「大福引き大会」をおこなうことにいたしました。係の皆さんは「買い付けプロジェクト」をつくって夏休みには松江に調査に出かけ、おなじみで選りすぐりの産品を準備いただきました。どうぞ、ご期待ください。

また、この会にご出席の大先輩から今年の卒業の方まで、実に64歳の年齢差があるという実にユニークな会ですが、世代を超えて有意義に交流いただくことをお願いいたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

## 双松会 会長 庄司 肇(高11・昭35卒)



庄司 肇(高11)  
双松会 会長

55周年、おめでとうございます。しかも150名を超える会員の方がお集まりいただき、益々盛大になっていくことを心からお慶び申し上げます。この間、会の運営に携わってこられました先輩皆様のご努力に心から敬意を表させていただきます。

また、児玉元会長のご逝去を先ほど知りましたが、私も北高に奉職しておりました時にこの会でお会いしたことを思い出しておりました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

更に、先ほどは双松会にご寄付をいただきまして有難うございました。心より厚く御礼申し上げます。

それに関連いたしまして、先般から双松会報発行のために全国の卒業生にご寄付をお願いしましたところ、1,600名の方から500万円のご寄付をいただきました。有効に使わせていただきたいと思います。有り難うございました。

ご承知のように、双松会は生徒が卒業した時の会費でまかっていますが、私たちが卒業した時の生徒数650名に比べ、今は320名と半減しているという少なさです。従ってメインの事業である「会報発行」にも苦勞をしており、3～4年に一度ぐらい寄付を仰がなければならないという次第です。これで3～4年は大丈夫になり安心している次第です。

双松の「松」につきましては、二世の松を植えていましたが、夏の猛暑と冬の厳寒のために一本が枯れてしまいました。ただいま、その植え替えの準備をしているところです。校舎周辺に植えて準備をしている松がありますので、根回しをして近々台上に移し替えたいと思っておりますのでご報告申し上げます。

それから、川津校舎でご卒業なさった方も沢山いらっしゃいますが、赤山へ移転の際に北高川津校舎の記念碑を昔の県立プールのところに建てておりました。松江市の管轄なのですが、市の方で公園緑地にしたいので移転をして欲しいと言ってきました。いろいろ調整をした結果、同じ跡地内の少し別な場所に動かすということで話がまとまりました。4～5年にかかるかもしれませんが、長さ4m、高さ1m50ぐらいの立派な記念碑ですので、松江にお帰りの際は、また見に行ってくださいと思います。

先ほどから押田会長、また古瀬合銀会長のお話の中で、卒業生に関するお話が出ました。2020年に東京でオリンピックが開催されることが決まりましたが、私は我々の大先輩の

中に岸清一さん（中4期・明治16年卒）というオリンピックに貢献された方がいらっしゃることをご紹介したいと思います。

県庁の前に銅像が建っておりますが、先般、没後80年の行事がありました。雑賀町出身の弁護士ですが、日本体育協会第二代会長で日本漕艇協会の初代会長をされています。我々が知っている東京オリンピックは昭和39年ですが、その前に東京に誘致をすることが決まっております。結局、戦争のために開催されませんでした。その「幻のオリンピック」誘致の立役者が岸先生であったということです。こういう立派な先輩がいらっしゃったことを忘れてはいけないと思い、皆様にご報告する次第です。

本日はこのめでたい55周年の会にお招きをいただきまして、有り難うございました。



河原 一郎（高23）  
松江北高校校長

### 松江北高校 校長 河原 一郎（高23・昭47卒）

皆さんこんにちは。55周年、おめでとうございます。

私の方からは北高の近況を報告してご挨拶に替えたいと思います。進学実績などの詳細はお手元の資料をご覧くださいと思いますが、昨年は部活動で日本一が三つありました。弓道女子団体がその一つですが、その時の優勝メンバーの一人の戸田香菜子さん（高64・平25卒）が、今日ここに来てくれていますので紹介します。（会場から戸田さんに拍手）

私はお手元の資料とは別のことをお話させていただきたいと思います。「校歌」の中に「世界の人たる誇りに立たん」という言葉がありますが、私はそのことをしょっちゅう生徒に話しています。この「世界」とは、海外だけではなく、日本であり、島根であり、松江であり、住んでいる地域のことを指していると思います。そこで役に立つ人になれるということであると考えていますが、そういうことで、つい先日も生徒たちに世界を舞台に活躍しておられる東京双松会会長で商船三井会長の芦田昭充さん（高13・昭37卒）に講演をいただいたりして、生徒に意識付けを考えています。

また、来年三月には本校では初めてのことで、生徒数名をアメリカに10日間派遣して海外の大学や企業を見学させたいと考えています。その生徒たちが帰ってきてからほかの生徒たちにいい刺激を与えてくれると思っています。

それ以外にも、東日本大震災に関連し、今年の12月には生徒たちを引き連れて岩手の南三陸町にボランティアに行ってきました。社会福祉協議会の協力を得て企画しましたが生徒に募集をかけましたところ、25名の生徒が手を挙げてくれました。私も同行し、片道20時間のバスの旅は大変でしたが、生徒たちは帰校してからその経験を全校生徒に報告してくれ、非常にいい大きな影響を与えてくれたと思います。この夏には本校が非常にいい取り組みをしたということでこの活動が全県下に広がり、48名の県下高校生がボランティアに出かけました。この12月にも本校生徒を含めて本県生徒30名がボランティアに出かけますが、いろいろな取り組みを通じて「世界の人たれ」となるよう生徒の指導にあたっています。

最後になりましたが、県知事から「人権の詩」に本校二年生が最優秀で選ばれたという連絡がありました。本校卒業生で歌手の山根万里奈さん(高59・平20卒)が作曲をして丁度今日発表されると聞いています。その詩をご紹介します私の挨拶に替えたいと思います。

#### 「あなたとわたしのうた」

いのち いのちとは あなたが生まれた時 あなたを見た瞳の優さしさ  
いのち いのちとは あなたが死にゆく時 あなたを想い 流れる涙  
あなたは いのちの中に生きている  
あなたとおなじ あなたもおなじ みんな あなたとおなじ  
誰かに愛され 誰かを愛するいのち

こころ こころとは だれかを想った時 あなたへ自然に芽生えるもの  
あなたは こころと共に生きている  
あなたとおなじ あなたもおなじ みんな あなたとおなじ  
誰かを想って誰かと重ねるこころ

愛を知るいのち 痛みを知るこころ 生まれた時から共に生きている  
わたしは あなたは みんなおなじ 誰かに愛され 誰かを愛するいのち  
わたしは あなたは みんなおなじ 誰かを想って 誰かと重ねるこころ  
あなたとわたし いのちといのち みんな あなたとおなじ  
あなたとわたし こころとこころ みんな あなたとおなじいのち

私はこの詩を見た瞬間に非常に感動いたしましたのでご紹介させていただきました。  
本日はおめでとうございます。

## 2013 (平成25)年度 松江北高10大ニュース (日付順)

(注)この記事は足立芳樹教頭(高28)に特別制作のご協力をいただきました。

◆平成25年3月31日

### 国公立大学(現浪計) 197名合格

東京大学5名、京都大学4名、国公立大学医学科12名を含む197名の生徒が国公立大学に合格した。また、私立大学の合格者数は、延べ285名であった。



放課後の自習

◆5月24日～6月1日

### 第51回島根県高等学校総合体育大会

「4年連続14度目の男子総合優勝」

男子総合の部において、14度目の優勝を飾った。男女総合の部は、惜しくも優勝出来ず3位であった。(今年までの男女総合優勝の回数は、51年間の県総体の歴史において、昭和の時代に6回、平成の時代に17回、合計23回である)



県総体結団式

◆7月21～25日、7月29日～8月2日、12月21～25日

### 東日本大震災「島根県災害ボランティア隊」参加

島根県社会福祉協議会が主催する東日本大震災の被災地の復興支援ボランティアに、夏・冬合わせて11名の生徒が参加し、宮城県南三陸町においてボランティア活動を行った。



◆8月2日、8月22日、平成26年2月7日

### 文化系活動において全国大会入賞3名

- ①全国高等学校総合文化祭小倉百人一首かるた読手部門で、岡田優(3年)が、第2位を受賞した。
- ②全国高校生英語弁論大会で、安樂万智子(2年)が国際交流基金理事長賞(第4位)を受賞した。
- ③青少年読書感想文全国コンクールにおいて、木島翔子(2年)が、全国学校図書館協議会長賞を受賞した。



全国高校生英語弁論大会

◆11月22日

### 教室棟の耐震化工事・リフレッシュ工事終了

教室棟の耐震化工事・リフレッシュ工事が終了した。この工事のため、一部の教室が使えず、第1グラウンド内の南側にプレハブ教室5部屋を設置し、モザイク教室として活用した。



## ◆12月3日 世界の人たれ講演会

本校卒業生の中で、様々な分野の第一線で活躍されている方に依頼し、1・2年生に対して、講演会を開催している。

本年は、東京双松会会長である株式会社商船三井の芦田昭充代表取締役会長に、「人生はチャレンジの連続」という演題で講演を行っていただいた。



## ◆12月6日 島根県高校生「人権の詩」において最優秀賞・優秀賞

島根県が、全県の高校生を対象として、人権に関する詩の募集を行い、最優秀賞には、貴谷眞名(2年)の「あなたとわたしのうた」が選ばれた。また、荒川奏愛(2年)が優秀賞を受賞した。そして、この最優秀賞の詩をもとに、北高出身のシンガーソングライター山根万理奈が曲を付け、CD化された。



県知事室において、知事より表彰

## ◆12月21～23日 全国高等学校弓道選抜大会 女子団体5位

弓道部は、昨年に続き、島根県弓道選抜大会で女子が団体優勝し、さらに、全国高等学校弓道選抜大会において、5位入賞を果たした。



## ◆平成26年1月31日 西川津校舎跡地の記念碑の移動

西川津校舎跡地には、記念碑が、昭和54年に建立されている。記念碑には、兼折博元北高校長による「若かりし日のわが夢ぞそこに狭霧ふ」と記してある。この跡地は、旧県立プール跡地のため、松江市の整備計画に伴い、旧県立プールが解体され、跡地を新体育館建設の工事ヤード及び臨時駐車場として利用される計画である。そのため、記念碑を旧県立プール跡地内の南東部へ仮移動させることが決定され、12月に移動が完了した。現在は、周囲の道路から見る事が出来る。



なお、松江市によれば、平成28年に多目的広場整備計画を決定し、平成29年工事を着工する予定とのことである。

## ◆平成26年3月1～7日 北高第1回国際研修in U. S. A

グローバル社会において、国際感覚と広い視野をもって、考え、行動できる人材の育成のために、今年度はじめて企画した事業である。

参加希望の1・2年生6名が、1週間、米国ロサンゼルスを訪れ、ホームスティ、英語研修、現地高校生との交流、カリフォルニア州立大学訪問などの研修を行う。



## 記念集合写真



中 68期～高9期の皆さん



高 10期～15期の皆さん

平成25年度 設立55周年記念  
近畿双松会総会講演会懇親会



高 16 期～ 20 期の皆さん

平成25年度 設立55周年記念  
近畿双松会総会講演会懇親会



高 22 期～ 29 期の皆さん



高30期～学生ゲストの皆さん

## 期別テーブル写真



ご来賓の皆さん



ご来賓の皆さん



ご来賓の皆さん



中 68 期～高 2 期の皆さん



高 5、6、8 期の皆さん



高 7、10、14 期の皆さん

## 期別テーブル写真



高11期の皆さん



高9、12期の皆さん



高13、15期の皆さん



高16期の皆さん



高17、18期の皆さん



高19期の皆さん



高20、32期の皆さん



高22期の皆さん (最多の14名)



高 23 期の皆さん



高 29 期の皆さん



高 30 期のお二人



高 31 期のお二人



高 34,35,36,38,39,43,49,55 期の皆さん



学生ゲストの皆さん

# 懇親会スナップ写真





懇親会后、古瀬誠氏=後列右から3人目=を囲んで（居酒屋「へそ」にて）

## 演題：「企業の社会貢献活動 ～私の経営理念～」

講師：古瀬 誠氏(高16・昭40卒)

(株山陰合同銀行会長・島根県商工会議所連合会会頭、松江商工会議所会頭、島根県経営者協会会長、双松会副会長など)

【司会によるご紹介】(松本耕司副会長／高16・昭40卒)

古瀬さんとは同期ということで私からご紹介をさせていただきます。

北高に入学したばかりの1学期の中間試験の頃だったと思いますが、グラウンドで陸上部の練習をしていた男子生徒が砲丸が頭に当たって大手術をするという大きな事故がありました。それが古瀬さんでした。生死の境をさまわれ、半年近く休まれたと思います。

その大変なアクシデントを見事に乗り越え、今や島根、山陰の経済界のみならず社会全体をリードするまでになられたことを、同期として本当に誇らしく思っております。

今回は近畿55周年での記念講演をお願いしましたところ、ご快諾いただき本当にありがとうございます。皆様とともに、経済人として到達された古瀬さんの現在の境地をお聞かせいただけることを大変楽しみにし、また、勉強をさせていただきたいと思っております。



### 【講演】

55周年という大切な節目の会にお招き頂き、ありがとうございました。

銀行経営に携わって14年。ここ2年ほどは商工会議所会頭、経営者協会会長のほか中国経済連合会、日商、経団連の仕事もやっておりますが、ここではタイトルの通り、地元が何を考え、どんな行動をしているかを中心にお話したいと思っております。

冒頭のご紹介であった砲丸の事故ですが、5年前まで後遺症が続き、最後に残ったのが大量輸血に伴うC型肝炎でした。1年間厳しい副作用に耐えてインターフェロン治療を行った結果、晴れて高校1年以来の後遺症がなくなりました。一生を通した戦いでした。

### ●創造的ベストバンクへ

山陰合同銀行は総資産4兆2,000億円。64ある地方銀行の30番目くらいに位置しています。その銀行が社会貢献活動になぜ取り組むのか、その背景を説明いたします。

企業にとって何よりも大事なものは経営理念です。ホンダ創業者、本田宗一郎さんは、「理念なき行動は凶器である。行動なき理念は無価値である」と述べています。理念のない行動とは、銀行ならば、従業員に対して、「何でもいい、とにかく1000万円の定期取ってこい」と。これはよくない。経営上も、地域のお客様にとってもよくない。つまり、何をするのか、きちんと持ってなくてはなりません。

私が頭取になって打ち出した経営理念は、「地域の夢、お客様の夢をかなえる創造的なベストバンク」でした。つまり、知恵と情熱で地域のお役にたつということです。

それを支える経営方針として3つ掲げました。「質の高い金融サービスを提供する」「地域の活力を引き出す」「地域版のCSR（Corporate Social Responsibility＝企業の社会的責任）＝社会貢献活動に本気で取り組む」です。

島根、鳥取両県の人口は合わせて130万人。日本の1％です。鉱工業生産額も県民所得も2県で約1％。人口過疎であり、効率性は劣る。そうはいつでも店舗やATMの展開は広島、岡山より落とすわけにはいかない。銀行従業員一人当たりの効率も大幅に劣る中で、しかし最先端のサービスを行わなければなりません。

そうしたハンディキャップコストがどれだけになるのか、13年前計算したところ、40億から50億円という数字がでました。つまり、その金額を他行がやらない別の方法で稼ぐこと、これが経営の命題である。簡単ではありませんが、これを克服しないと、自分だけが儲ける、つまらん銀行になってしまう。効率性をどう乗り切るか、そして地域の活力をどう引き出すか。新しい仕事をやる時、地域にとってプラスになるかどうかが一番大事なポイントになるわけです。

たとえばカード業務。カードは関連会社が担当し、新規分のみ本店が扱うのが普通ですが、これだとマーケティングがうまく行かない。うちはすべてのカードを本店が発行することで、旅行のあっせん、イベント企画、趣味の会などを一元的に扱うようになっています。お客様の満足を高めればカードの使用頻度が高まり、我々は利用料収入がプラスになる。始めて4年になりますが、カード利用収入は年間10億円にまでなりました。おそらくすぐに50億円になると考えています。

お客様の文化的で豊かな暮らしとビジネスが一致する新たな業務を、地域と一緒に打ち出していく——これこそが経営理念なのです。

地域のCSRをどう展開するか。山陰は大企業が少なく、我々自身がリーディングカンパニーとして行動しなければなりません。つまり、我々ができないことは他の民間企業は出来



ないという思いがまず必要です。そして、地域貢献活動を全国に発信し、日本的課題の解決につながるような、地域に希望を与えるものでなければなりません。

### ●キーワードは「独自性」「つながる」「地域を愛する」

これらを実現するために何が必要かを考えました。一つ目は独自性です。独自性がなければ、地域としての効率性が悪いからうまく行くはずがない。職員たちにはずっと、自分たちで考えろと言いつけてきました。他行がやっていることを持って来たら、たとえそれがうまく行きそうな企画でも、みんなはねつけました。

二つ目は、つながる。ネットワークです。自分だけではどうしようもない。頭取時代、横浜銀行、広島銀行、伊予銀行と一緒に、JAXA（宇宙航空研究開発機構）と提携し、宇宙技術を、銀行を介して中小企業の技術とインテグレートする仕事に取り組みました。つまり、他者、地行を巻き込みながらどう業務を展開するか、という視点です。

三つ目、これが一番大事なのですが、地域を本気で愛すること。これがなければ理念もへったくれもありません。ですから、日々の決裁の条件に二つだけフィルターを持とうと部下に言いました。一つは、財務的に安全性がなければならない。もう一つは、地域の多くの人にプラスになるかどうか。これらをきちんと検証することを求めたわけです。

### ●CSRその1 森を守る

本題のCSRに入ります。従来、銀行の社会貢献とは労働奉仕とか寄付くらいなものでした。それも大事ですが、もっと主体性をもって、日本的課題の解決に挑戦しようと考えたのです。5年ほど前、副頭取時代でした。当時、洞爺湖サミットが開かれるなど、環境が主要なテーマでしたから、森林保全活動に焦点を当てることにしたのです。

まず取り組んだのが、従業員と家族、その知り合いが山に入ろう、どれだけ荒れてひどいかを見て、きれいにしようという活動です。県に森の用意をお願いし、森林組合に間伐や下草刈り、鎌の使い方などを指導してもらい、我々が入るという仕組みです。島根と鳥取で4つの山を借りました。県が制度化してくれて、この5年で島根で10社、鳥取で16社がこの活動に参加するようになりました。

もう一つのアプローチは、森を守るためのNPO法人約40団体のネットワーク化です。旅費はうちで持ってすべてのNPOを本店に来てもらい、こちらの思いを伝えました。多くの団体が自分の活動に精一杯で、情報交換とか、森を守るための全国大会といったことに興味を示してもらえませんでした。最終的に18団体の賛同を得、「森林を守ろう！山陰ネットワーク会議」が発足しました。

そこで2億円の予算を付け、地元新聞2紙に1年間、22回にわたって全面広告を出したのです。上半分は森林に関する記事。これは新聞記者に勉強してもらうため。下半分は参加

18団体を写真入りで紹介したのです。これによって1年以内に40団体に増え、現在は54になっています。

森林保護はまさに全国に発信すべき日本的課題です。森の原点は京都の紵の森にあるという私の思いもあり、まず京都銀行の頭取に呼びかけ、2行のトップが発起人になって「日本の森を守る地方銀行有志の会」をつくりました。そうしたところ、翌2009年7月までに地銀64行すべてが参加しました。5年たった今、30行余がうちと同じような活動をしています。今年は全国大会を仙台でやりました。会長は持ち回りですが、事務局はうちがずっとやっています。

## ●CSRその2 格差のセーフティネットを作る

環境の次に深刻な問題が格差問題でした。格差の本質は、働きたくても働けない人をどうするか。これを究極の格差対策ととらえました。

身体障がい者の受け入れ態勢はかなり出来てきたのですが、統合失調症や知的障がいは究極のハンディキャップを持っていると言えます。島根の施設でパンを焼いたりして働いている人たちの平均賃金は月1万2000円。全国平均は1万5000円くらいでした。もちろん、自立できる金額ではありません。

自立支援法を熟読して考えました。法律は最終的には親が面倒を見ることを求めています。国の施策として仕方ないと言えば仕方ないかもしれません。しかし、社会としてどうするか、どうセーフティネットをつくるかが問われていると考えたのです。

知的障がい者の自立支援は大変でした。副頭取時代、県内の施設5カ所を回って何が出来るか考えました。皆さんは障害基礎年金として1級と2級を平均すると月7万5000円支給されていました。これに労賃1万2000円を加えて月8万7000円が全収入です。保護者の方々に話を聞くと、この収入では自分が死ぬときに子どもを置いてはいけないという不安ばかりでした。ではいくらならいいのか。結局、15万円なら公営アパート借りたりして何とか暮らしていけるということでした。

ということは、7万5000円の労働価値を生まなければ15万円にならない。実に難しいことです。学校に何回か通っているうちに分かったことは、音楽をすごく楽しんでいること。そして絵に一心不乱に取り組み、健常者よりはるかに熱心で、ほっとさせる配色とか引きつけるものがあるということでした。

よし、絵をやろうと思いました。指導者を探して、芸術性を磨き、それを銀行のノベルテ



## 近畿双松会設立55周年「記念講演」

ィグッズに使おうと考えたのです。とりあえず20人くらいの働き口を作ろうと、松江市北堀町の旧出張所を改修して事業所を開きました。年間人件費は2000万円と設定し、銀行のノベルティグッズ予算を2000万円カットして充てることにしました。エコバッグやはがきに絵を描いたり、間伐材で通帳ケースを作ったりするわけですが、果たしてお客様に喜んでもらえるか、心配だったので、事情を手紙に書いて付けました。

始めてみると、ノベルティグッズのタオルはいらないから絵をもっとほしいとか、女性、お母さんからの反応がすごかった。森林保護でもそうですが、女性の関心の強さに今更ながら驚きました。我々の活動は女性に支えられてきたのです。

この事業所に勤め出したことで初めて生命保険に入れたケースがありました。ことほど知的障がい者を取り巻く環境は厳しい。しかも雇えるのは20人だけです。同じ取り組みを鹿児島銀行と大垣共立銀行が始めましたが、広がりはまだそこまでです。なかなか普及しない。そこで考えたのが、仲間が仲間を助ける仕組みでした。うちの20人が磨いた技術を商品として売って、売り上げを県に寄付する。それがNPOを通して、パンを焼いて月1万2000円を得ている仲間へ届く。ベストではないが、やるしかないということです。

彼らの作品を3,000アイテム用意し、パソコンから自由に使ってもらう代わりに年間60万円の使用料をもらうことにして、私が社長にアポイントを取ってトップセールスを行いました。住友生命の社長にお話しし、すぐに入ってもらいました。

伊藤園はお茶のボトルに、イオンリテールはギフトカードに、カゴメはトマトの絵を採用してくれました。日本水産、日本通運、三井生命ファイナンシャル&リースなども含めて10社に参加してもらいましたから年間600万円。10人分です。これが50社になれば、島根の重度障がい者ほぼ全員分をまかなえることになります。

### ● CSR その3 未来のリーダーを育てる

地域版CSRの三つ目は、独創性を取り戻すための教育です。最近の子どもたちに一番欠けているのは、外で遊ばないことです。知識を吸収する前に大事なものは五感を養うことです。外で遊んだり、森の中で何かを感じたりといった自分の感性を養う機会がほとんどない。これは子どもたちが悪いのではなく、社会が変わっているのに子どもたちを教える構造が変わってないことに原因があるのです。

そこで、2012年9月、松江市内に私塾をつくりました。考えてから実現するまでに6、7年。のっぴきならないところに自分を追い込みながら、知事をお願いし、県教育長を通して有馬毅一郎・島根大名誉教授と、もう亡くなられたのですが、藤木 敦・元北高校長を紹介していただき、学校づくりを進めました。校名は「尚風館」。高い志をもって風を起こせる人を育てようという思いが込められています。学校づくりの連絡事務を専任で当たらせてうちの30歳の女子社員が考えたものです。

学校は「小学校4～6年」「中学、高校」「大学から社会人になる前」までの3つのかたまりになっており、定員はそれぞれ最大20人。3年ずつ計9年学ぶことになっています。年間の費用は森の事業とほぼ同じ200万円。小学校と中学校の元校長の二人が常勤の教師を務め、土曜日に教えてもらっています。素晴らしい授業です。

何をするのかというと、自然の中で五感を鍛えること。そして、論語の素読です。「過ちを改めざる、これを過ちという」といった具合に音読するわけです。松江歴史館の物販に使っていた長屋を使わせてもらって授業していますが、子どもたちの音読が塩見縄手に聞こえるほどです。最初は全然聞こえなかったのですが。

もう一つの柱は郷土の偉人伝。最初の1年間は永井隆博士（中45・大14卒）を取り上げました。こんな人がいたのかと大変感銘を受けたようです。永井博士に続いて今は小泉八雲をやっています。その他、しめ縄を作ったり、小笠原流の先生に礼儀作法を覚えてもらったり。授業を休む子はいません。最初はもじもじしていたのが今は自由奔放、異なる学年でも平気で遊んでいる。子どもは玉、どう磨くかだなあとつくづく感じます。

これからの課題は独創力をつく出す訓練です。独創力は才能ではありません。それを許す環境づくりと訓練にあると思います。そのためにはディベートが一番いい。本を1週間読ませて題材にするとか、社会事象を取り上げるとか。20人を3班に分けて、1日中繰り返し繰り返しディベートをする。それと、留学です。外の世界を知らないと小さく固まってしまう。半年でも3カ月でもいいのです。そのためには資金捻出が大きな問題です。

こうして育てた人材を社会に送り出したい。うちに就職しなくていい。都会で働いても結構。最終的に島根のリーダーになり得る人材の層を厚くしたいということなのです。

最初の3年間のカリキュラムと教材を松江市に提供することで市長と合意しています。幸い松江市の公民館は全市を網羅して展開していますのでそこで同じような塾を展開してもらおう。これは鳥取市でもやることになっています。教材など実費はもらいますが授業料はゼロです。

スタート前、果たして子どもたちが集まるか心配でした。4年になると部活もありますし。集まらなければ従業員の子弟をとすら考えてましたが、銀行の窓口パンフレットを置いただけなのに、定員の3倍くらい集まり、抽選で決めました。男女半々、学年もうまくバラけました。

## ●インドへ——伸び行く地域貢献の道

地域貢献活動の一環として、インドに注目し、山陰インド協会をつくりました。松江出身でインド哲学の世界的権威、中村元さんの記念館を2012年10月に作り、審議会長をやっていますが、インドの人たちの中村さんに対する尊敬、信用は実に大きいものがあり、駐日インド大使には2度も来てもらいました。

## 近畿双松会設立55周年「記念講演」

そのご縁もあって山陰インド協会に加盟する180社のうち20社でインドを訪問し、商工省など関係機関を回って、山陰の企業がその気になればいつでも自由に出て行ける基盤を整えることができました。そして現地で3つの商談がまとまり、同行した島根大学の学長がバンガロールのインド科学大学と提携を結ぶなど、大きな成果を収めました。

12億の人口を擁するインドはその半分以上が20歳以下というこれから大きな発展が期待される国です。日本企業の進出はまだ少なく、1000社にも達していません。そうした中で山陰は富山と並んでインドビジネスの最先端に立っています。地域貢献活動はまさに経済活動そのものなのです。

いただいた時間がまいりましたので、残念ですがここまでとさせていただきます。

以上ご紹介した私どもの活動に対して、これからも応援よろしくようお願い申し上げ、記念講演を終わります。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

### 【司会】

皆様、息もつげぬ思いの1時間でしたね。松江、島根をふるさととする私たちに希望や夢を感じさせていただきました。私自身は山陰から日本の課題に立ち向かうという視点に深い感銘を受けましたが、皆様、それぞれにお受け止めがあったことと存じます。

古瀬さんには本当に「元気の出る」すばらしいお話をいただきました。今後益々のご活躍を願ひ、盛大な拍手をもって御礼に替えたいと思います。古瀬さん、有り難うございました。(拍手)

ふるせ まこと  
●古瀬 誠 氏

1969年慶応義塾大学経済学部卒、同年山陰合同銀行入行。2000年取締役総合企画部長、01年常務取締役総合企画部長、02年専務取締役総合企画部長、05年副頭取、07年頭取、11年会長

●山陰合同銀行(松江市魚町10)

1941年設立、資本金207億円。従業員2015名。預金残高は地方銀行64行中28位、貸出残高は同33位。従業員1人当たり経常収益同8位。店舗数同18位。また単体自己資本比率(国内基準)は地銀55行中1位(2014年9月末現在)

# 総会議事(1) 2013(平成25)年度 近畿双松会 活動事業報告

## ◆ 2012(平成24)年度

10月	1日	(月)	会計年度開始
	4日	(木)	臨時役員会開催(会則改訂案審議) (委任状含む出席37名、於・中央電気倶楽部)
	21日	(日)	第2回里山歩くぞハイキング”柳生の巻”(参加13名)
11月	5日	(月)	平成24年度会計決算書監査 事務局会議開催(平成24年度総会・懇親会準備会合)
	10日	(土)	平成24年度近畿双松会総会・懇親会(於:中央電気倶楽部)(参加者114名学生ゲスト含む) (会則改訂を承認) (公演)本間恵美子さん(高19)鳥根県立八雲立つ風土記の丘所長
12月	2日	(日)	(再挑戦)第6回歴史ウォーキング”清盛 in 神戸”(参加13名) 年次会報の編集開始
1月	11日	(金)	事務局会議・新年会開催(新年度役員懇親会準備・参加16名)
	24日	(木)	平成25年度新年役員懇親会(於・中央電気倶楽部) (新年度基本活動方針、55周年行事の骨格審議、出席17名)
3月	20日	(水)	事務局会議開催(平成25年度事業計画 最終確認)
	30日	(土)	事務局会議開催(平成25年度事業計画発送準備)
	末日		平成24年度「会報」の発行
	末日		つなぎ会計年度終了

## ◆ 2013(平成25)年度

4月	1日	(月)	平成25年度事業・会計開始・新会則の施行
	7日	(日)	平成25年度事業計画ならびに平成24年度「会報」の発送
	21日	(日)	第6回落語鑑賞会(高槻亀屋寄席・参加19名)
5月	29日	(水)	第33回ゴルフ懇親会(参加16名、於:武庫ノ台CC)
6月	9日	(日)	会員の荒井悦加さん(高51)第97回日本陸上競技選手権女子3000m障害で二連覇を達成
7月	7日	(日)	事務局会議開催(55周年行事・福引き大会対象産品調査検討)
	21日	(日)	第8回文楽鑑賞会(参加20名、於:国立文楽劇場)
9月	7日	(土)	事務局会議開催(55周年行事・福引き大会対象産品調査報告)
	29日	(日)	第8回歴史ウォーキング”新嶋八重の足跡 in 京都”(参加32名)
10月	4日	(金)	平成25年度設立55周年記念総会の案内を発送
	20日	(日)	(台風のため中止)第3回里山歩くぞハイキング”能勢の棚田”
	31日	(木)	事務局会議開催(55周年行事 大福引き大会最終調整)
11月	8日	(金)	大阪市中央公会堂との打ち合わせ
12月	1日	(日)	会計決算書監査(平成24年10月~平成25年9月) 事務局会議開催(55周年総会・講演会・懇親会の最終打ち合わせ)
	8日	(日)	平成25年度設立55周年記念総会・講演会・謝恩懇親会 (於:大阪市中央公会堂、参加者は学生ゲストを含め153名) (記念講演は古瀬誠氏(高16)山陰合同銀行会長) (謝恩懇親会では郷土の産品の福引き大会を実施) 55周年記念会報の編集開始
1月	17日	(金)	事務局会議開催(新年度役員懇親会準備)
	31日	(金)	平成26年度新年役員懇親会(55周年事業の総括、新年度(新しい5年へ)の方針審議)
3月	未定		事務局会議開催(新年度事業計画検討)
	末日		平成25年度設立55周年「記念会報」の発行
	末日		平成25年会計年度終了

## ◆ 2014(平成26)年度

4月	1日	(火)	平成26年度事業・会計開始
	上~中旬		平成26年度事業計画、設立55周年「記念会報」の発送

## 総会議事(2) 近畿双松会 会計報告・監査報告書(その①)

2012年(平成24年10月1日)～2013年(平成25年3月31日)

(単位：円)

収入の部	支出の部
◎ 前期繰越金 <span style="float: right;">2,266,908</span>	◎ 支出計 <span style="float: right;">1,155,177</span>
◎ 収入計 <span style="float: right;">1,031,800</span>	・ 通信費 <span style="float: right;">8,310</span>
・ 平成24年度(後半)年会費収入 <span style="float: right;">72,000</span>	・ 印刷費 <span style="float: right;">0</span>
・ 同、寄付・広告等賛助金収入 <span style="float: right;">14,000</span>	・ 事務費 <span style="float: right;">85,171</span>
・ 平成24年度総会会費収入 <span style="float: right;">774,000</span>	・ 郵便、銀行手数料等 <span style="float: right;">2,655</span>
・ 平成25年度新年役員会会費収入 <span style="float: right;">68,000</span>	・ 平成24年度総会費 <span style="float: right;">716,512</span>
・ 平成25年度諸行事参加費収入 <span style="float: right;">74,000</span>	・ 平成25年度総会費 <span style="float: right;">85,400</span>
・ 雑収入 <span style="float: right;">29,800</span>	・ 平成25年度新年役員会費 <span style="float: right;">88,495</span>
	・ 平成24年度諸行事支払い <span style="float: right;">168,634</span>
	◎ 次期繰越金 <span style="float: right;">2,143,531</span>
	・ 内訳
	(郵便貯金振替残) <span style="float: right;">1,761,795</span>
	(郵便貯金) <span style="float: right;">220,617</span>
	(現金) <span style="float: right;">161,119</span>
◎ 総合計 <span style="float: right;">3,298,708</span>	◎ 総合計 <span style="float: right;">3,298,708</span>

上記のとおり報告いたします。

事務局長(副会長) 松本 耕司 ㊟

監査の結果、正確に処理・記帳されていることを認めます。

平成25年12月1日

監事 梅木 隆志 ㊟

監事 物種 慶子 ㊟

## 総会議事(2) 近畿双松会 会計報告・監査報告書(その②)

2013年(平成25年4月1日)～2013年(平成25年9月30日)

(単位：円)

収入の部	支出の部
◎ 前期繰越金 2,143,531	◎ 支出計 793,690
◎ 収入計 1,061,900	・ 通信費 149,410
・ 平成25年度運営費支援助入 558,000	・ 印刷費 123,585
・ 同、55周年記念事業寄付・広告収入 277,500	・ 事務費 48,150
・ 平成25年度諸行事参加費収入 224,400	・ 郵便、銀行手数料等 20,295
・ 雑収入 2,000	・ 平成25年度総会福引き費 19,640
	・ 平成24年度会報費 289,630
	・ 平成25年度諸行事支払い 142,980
	◎ 次期繰越金 2,411,741
	・ 内訳
	(郵便貯金振替残) 2,274,285
	(郵便貯金) 50,630
	(現金) 86,826
◎ 総合計 3,205,431	◎ 総合計 3,205,431

上記のとおり報告いたします。

事務局長(副会長) 松本 耕司 ㊟

監査の結果、正確に処理・記帳されていることを認めます。

平成25年12月1日

監事 梅木 隆志 ㊟

監事 物種 慶子 ㊟

## 総会議事(3) 2013(平成25)年度 役員一覧

役	期	氏名	役	期	氏名
常任顧問	高7	山本 雅昭	幹事	高17	山根 律郎
			常任幹事	高19	岩田 一志
会長	高11	押田 良樹	幹事	高19	池田 喜美代
副会長・事務局長	高16	松本 耕司	常任幹事	高20	三好 資子
副会長	高20	渡辺 悟	常任幹事	高22	村田 貢
副会長	高23	松本 潤	幹事	高23	橘 千里
			幹事	高24	岩間 令道
監事	高16	梅木 隆志	(新)幹事	高24	糸原 直彦
監事	高20	物種 慶子	幹事	高26	福間 則博
			幹事	高27	木田 京子
常任幹事	中68	荒銀 昌治	幹事	高29	石橋 敏幸
幹事	中68	青戸 元也	常任幹事	高29	廣瀬 弘美
幹事	高1	荻田 運三郎	幹事	高30	千葉 潮
(新)幹事	高2	久保田 幸雄	常任幹事	高31	穴道 弘志
幹事	高3	緒形 公士	幹事	高31	小林 満
常任幹事	高5	山田 稔	幹事	高31	西村 英明
幹事	高6	田村 稔久	幹事	高32	藤本 斉子
常任幹事	高7	廣政 俣彦	幹事	高32	浅沼 吉正
幹事	高8	山崎 杲	幹事	高32	木村 滋樹
幹事	高9	清水 良子	幹事	高33	柳井 利明
常任幹事	高10	佐和田 丸	幹事	高34	細田 昌幸
幹事	高11	田中 一男	常任幹事	高35	富岡 幸子
幹事	高12	萩野 貫悟	幹事	高36	森口 次郎
(新)幹事	高13	四方田 司	幹事	高43	安達 宏昭
常任幹事	高14	加藤 巡一			以上50名
常任幹事	高15	金坂 喜好			
幹事	高15	安達 和彦			
常任幹事	高16	土田 和男			
幹事	高16	三成 宏二			

## 近畿双松会 会則

### 【現行会則（平成24年11月10日改訂・平成25年4月1日適用）の趣旨・骨子】

入会、会費、退会などのクローズな（手続き）概念を払拭し、新たな発想で将来への継続、発展をめざす。

骨子①：すべての卒業生は双松会員であり、本部会則に準じてあらためて近畿での入会手続きを必要としないことを明示。

いつからでも、何歳からでも自然に参加でき、退会の概念も払拭。

骨子②：「会費」については名称を「運営費」に切り替え、徴収ではなく協力をいただく形にし、有志の皆様の協力を仰ぐ。

「口数」の仕組みも導入し、協力をいただきやすくする。

骨子③：会則内容を現在の運営実態に合わせ、現行会則の不備な項目を全面的に整備。

将来世代へ継続しやすい、「読めばわかる」形をめざす。

### 【名称】

（下線は主な改訂点）

第1条 本会は近畿双松会と称する。

### 【会員】

第2条 本会は次の会員により組織する。

1. 近畿地区に在住する旧制島根県立松江中学校、新制島根県立松江高等学校及び松江北高等学校の卒業生及び之に準ずる者。
2. 近畿地区在住者以外の双松会員で入会を希望する者。
3. 教職員であった者で近畿地区に在住する者。

### 【目的】

第3条 会員相互の交誼、親睦を図り、母校の発展に寄与することを目的とする。

### 【事業】

第4条 本会は前条の目的を達成するため次のことを行う。

1. 年次総会と懇親会の開催。
2. 年次会報の発行、ホームページの運営などの会員への情報提供。
3. 周年記念事業、各種親睦行事、講演会等の開催。
4. 会員名簿の管理。
5. その他本会の目的達成に必要な事業。

### 【役員】

第5条 本会に次の役員を置き、任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

1. 会長 1名
2. 常任顧問及び顧問 若干名
3. 副会長 若干名
4. 事務局長 1名
5. 常任幹事 若干名
6. 幹事 各期1名以上
7. 監事 2名

## 近畿双松会 会則

### 【役員を選任】

第6条 役員は次の通り選出する。

1. 会長は、正副会長及び常任顧問、顧問の合議により会員の中から推薦し、役員会及び総会に報告し承認を受ける。
2. 常任顧問、顧問は会長が推薦し、役員会及び総会に報告し承認を受ける。
3. 副会長、監事は会長が会員の中から委嘱し、総会の承認を受ける。
4. 事務局長は会長が副会長の中から委嘱する。
5. 常任幹事は幹事の中から会長が委嘱する。
6. 幹事は会員の中から会長が委嘱する。

### 【役員職務】

第7条 役員職務は次の通りとする。

1. 会長は本会を代表し、会務を総理する。
2. 常任顧問、顧問は会長ならびに役員会の諮問に応じ、会務について意見を具申する。
3. 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはこれを代行する。
4. 事務局長は会長の指示をうけ、会務の運営・執行にあたる。
5. 常任幹事は会務の運営・執行を分担する。
6. 幹事は各期を代表し、会員との連絡にあたる。
7. 監事は本会の会計を監査し、総会にその結果を報告する。

### 【役員会】

第8条 役員会は、第5条の役員をもって構成し、次の通り開催する。

1. 会長が、毎年1月を基本として召集する。
2. 役員会は、役員を選出、事業報告と決算（見込み）、事業計画と予算、会則の改訂、その他会の運営に関わる重要事項を審議する。
3. 会長は、必要あるときは臨時に役員会を召集し、または書面での持ち回りで審議をすることができる。

### 【総会】

第9条 総会は次の通り開催する。

1. 通常総会は原則として毎年11月に開催する。
2. 総会には役員を選出、予算、決算、会則の改訂、その他の会務を報告し承認を受ける。
3. 総会と同時に懇親会、講演会等を開催する。
4. 会長は、必要あるときは役員会の承認を得て臨時総会を召集することができる。

### 【事務局】

第10条 本会に、第4条に定める事業を推進するため、事務局を置く。

1. 事務局は第7条の常任幹事を核とする役員有志をもって構成し、事務局長が統括する。
2. 事務局長は、適時「事務局会議」を開催し、会務が円滑に運営・執行されるよう努める。

## 【会計】

第11条 本会の会計に関する諸事項は次の通りとする。

1. 本会は、第4条に定める事業を推進するため、運営費、寄附金、広告その他の協力を会員に仰ぐ。
2. 運営費等の詳細については、つど役員会に報告し、承認を受ける。
3. 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

## 【会則の改訂】

第12条 この会則の改訂は、第8条の2、第9条の2で定める通り、役員会の審議を経て、総会の承認を受けなければならない。

## 【附則】

1. 本会則は平成24年11月10日に改訂し平成25年4月1日より適用する。
2. 事務局は会則改訂に関連して、移行措置が必要となった場合は適切な対策を講じ、重要な事項は適宜役員会に報告するものとする。
3. 改訂記録(判明分のみ)  
昭和58年11月24日改訂・昭和61年11月14日改訂・昭和63年11月18日改訂・平成4年11月28日改定・平成9年11月9日改訂・平成12年11月20日改訂・平成24年11月10日改訂（平成25年4月1日適用）

以上

## 【運営覚書】

1. 設立年月日：設立(戦後の再開)総会のおこなわれた昭和33年10月25日とする。
2. 所在地：事務局は当分の間、大阪市西区江戸堀1-21-35(榎トヨーコーポレーション内に置く。
3. 第2条1の「近畿地区」：滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山の二府四県を称す。
4. 同、「準ずる者」：在籍はしたが転校などにより卒業はしなかった者などを称す。
5. 同条関連：卒業後6年以内の者を「学生世代会員」として遇する。
6. 第4条3の「周年記念事業」：5年単位を基本として行うことを目標とする。
7. 同条4の「会員名簿の管理」：
  - ① 双松会名簿「双松」を基本とし、近畿地区在住会員の管理に不断に努める。
  - ② 居所不明、あるいは会員自身(ご家族含む)からのご連絡があった場合は各案内を差し止める。
8. 第8条関連：総会・懇親会には「学生世代会員」を招待するよう努める。
9. 第11条2の「運営費」：
  - ① 主として日常の会員との諸連絡等の事務費、および年次会報発行費に充当する。
  - ② 運営費は、当分の間、一口1,000円とし、年三口を標準に会員に協力を仰ぐ。
  - ③ 運営費、ならびに寄付・広告等でご協力をいただいた会員には年次会報を贈呈し、お名前を各資料に掲載して感謝の意を表する。
  - ④ 「学生世代会員」には、運営費、及び寄附を求めない。
10. その他：懇親会、各種行事等の諸経費は、つどの参加者負担を原則として運営する。

平成25年度「運営費支援、55周年記念事業寄付・広告」  
ご協力者ご芳名 (順不同・敬称略)

(平成26年2月20日現在)

中学 60 期	景山 章	庄司 勉	渡部 優
中学 61 期	菊田 光男	寺本 尚由	佐々木 悦子
中学 62 期	吉田 祝雄	仁宮 龍聖	木村 八重子
中学 63 期	肥塚 隆正	松吉 孝明	清水 良子
中学 64 期	鐘築 光紀	山田 稔	佐藤 早智子
中学 65 期	諏訪 秀富	山根 徹	安部 裕子
中学 66 期	中西 利昭	山本 達郎	片岡 芙美子
中学 68 期	伊藤 隆允	橋本 式而	天野 正彦
	水野 堯之	荻野 克彦	石倉 末広
	青戸 元也	田村 稔久	面白 紘
	荒銀 昌治	森岡 敏真	須山 耕
	吉岡 孝夫	永江 秀一	佐藤 菁治
中学 69 期	杵築 武彦	荒木 夕三	佐和田 丸
高校 1 期	飯塚 満男	小室 ナオミ	清水 義男
	伊藤 雅義	青戸 俊夫	清水 小枝子
	宇藤 二男丸	犬山 智保三	安永 玲子
	蒯田 運三郎	後藤 治久	新谷 勇人
	喜多川 治美	高井 和彦	太田 厚
	竹内 一郎	廣政 俣彦	押田 良樹
	和田 亮介	山本 雅昭	神門 英明
高校 2 期	林原 信光	小川 一基	木村 浩
	金津 俊太郎	寺本 好弘	小久江 良雄
	金坂 喜夫	泉 桂子	後藤 武久
	竹森 英二	田淵 美喜子	田中 一男
	久保田 幸雄	平尾 美淑	野津 丞
	作野 宏	黒田 牧夫	畑田 稔
	千葉 新一	清水 一夫	村尾 俊治
	長崎 弘	長谷川 忠雄	米澤 伸夫
	成合 茂博	山崎 杲	中尾 長子
	枅谷 崇	三上 祥恵	鈴木 洋子
	兼清 久子	福間 笙子	西脇 文子
	渡辺 尚子	熱田 光信	田村 廸子
高校 3 期	神田 田鶴子	澄川 光成	北村 雅子
	緒形 公士	岩成 哲男	高砂 亓
	佐藤 藤芳	田中 英明	森 倫也
高校 4 期	小川 伸江	影山 武男	萩野 貫悟
	泉 寛治	坂本 隆男	森山 悦宏
	田淵 宗明	宗 智海	大和 建雄
	藤原 小夜子	伴 稔也	平塚 善明
高校 5 期	春日 敏邦	真野 透	井上 俊雄
	勝田 守勇	山岡 裕明	神田 周平

	永江幹雄	高校 18 期	太田善博		松村聡
	安部正毅		小田一美	高校 27 期	三浦清
	深澤千栄子		堀内富美子		竹内博子
	藤田トク子	高校 19 期	岩田一志		新宮富美子
	森脇順子		江角健一		松田稚子
高校 14 期	山下俱子		佐々木勇		木田京子
	内田一三夫		万波迪義		菅尾恵子
	片山伸雄		元栄徹	高校 28 期	三木真理
	加藤巡一		新見泰朗		今藤美富
	木幡晃正		池田喜美代	高校 29 期	向山仁恵
	富永寿郎		大久保章子		太田春樹
	古川幸孝	高校 20 期	仁井尋子		山本修司
	宮原琢郎		小数賀健二		達山暢
	三好洋二		原田康二		野津さとみ
	小泉勝是		渡辺悟		浜野則子
高校 15 期	新名貴久子		三好資子		廣瀬弘美
	安達和彦		物種慶子		田中年恵
	金坂喜好	高校 21 期	山寄麻里子		須藤聖子
	佐藤修介		野津一雄		蓑田久美子
	真庭功	高校 22 期	竹添則子	高校 31 期	小林満志
	寄神道子		内藤清		穴道弘志
高校 16 期	二階堂孝子		村田貢		糸川孝一
	井上伸久		作野国夫		鶴久森恵美子
	梅木隆志		鶴羽孝子	高校 32 期	矢倉和恵
	土田和男		木山洋子	高校 34 期	藤本斉子
	坪倉司郎		大浦綾子		細田昌幸
	長野米一	高校 23 期	西村紀子		山岡雅仁
	松本耕司		朝比奈博		山岡祐子
	三成宏二		黒田洋	高校 35 期	富岡幸子
	三吉孜		近藤文雄	高校 36 期	本山浩子
	森藤哲章		松本潤	高校 43 期	安達宏昭
	清原正義		森脇泰雄	高校 51 期	荒井悦加
	森川葉子		和田邦孝		
	西村幸子		越野玲子		
	田中由美子		小松久美子		
	中安節子		橘千里		
高校 17 期	石川菖子		内藤みよ子		
	後藤研三		松本幸子		
	松本芳樹	高校 24 期	山口紀子		
	山口悦子		岩間令道		
	六鹿寿美		水野順子		
	木島光子		西田悦子		
	原田博子	高校 25 期	富村誠		
	島本妃早美	高校 26 期	伊藤博之		
	西野やよい		福間則博		

以上、246 名（匿名含む）

（ご不審の点は事務局までご確認ください）

## ■第6回落語鑑賞会(亀屋寄席)

日時／平成25年4月21日(日)

場所／高槻・割烹旅館「亀屋」

亀屋寄席も今回で3回目となり、貸し切りの別室で寄席弁当をいただきながらの歓談の後の、高座のすぐ近くでの落語鑑賞は当会の春の楽しみな行事として定着してきました。

今回は桂福團治師匠の「百年目」、桂福車師匠の「辞世の句」の熱演を楽しみ、参加者はゲスト3名を加えて19名でした。



### ◆参加会員は以下の方々です (敬称略)

廣政倅彦(高7)、清水良子(高9)、後藤武久・押田良樹(高11)、斎尾秀城・萩野貫悟(高12)、富永寿郎・古川幸孝(高14)、土田和男・松本耕司・西村幸子(高16)、渋谷秀(高17)、堀内富美子(高18)、渡辺悟・三好資子(高20)、鶴羽孝子(高22)



## ■第33回ゴルフコンペ

### 廣政倅彦さん(高7)が初優勝！

日時／平成25年5月29日(水)

場所／武庫ノ台ゴルフコース

第33回目を迎えたゴルフコンペはゲストを含め16名が参加して例年通りの武庫ノ台ゴルフコースで行われました。折悪しく前日に平年より10日も早い「梅雨入り宣言」が発表され、当日はかなりの降水の予報となったため、前日に世話人が手分けして参加予定者に無理をされないように案内するほどでした。

しかし、「多少の雨など何ほどのことか」というゴルフ好きのメンバーが多く、ほとんどの人が当日コースに集結されました。

そして、世話人や参加者の願いが天に通じたのか、なんと覚悟した雨に降られることもなく、曇り空で暑くもない絶好のコンディションで終日プレイする幸運に恵まれました。

熱戦の結果、高7期の廣政倅彦さんがグロス99、ハンディ(ダブルペリア)28.8、ネット70.2で堂々の初優勝、2位には世話人のハンディをはね返して松本耕司さん(高16)がグロス101、ハンディ30、ネット71が入賞、3位は井上伸久さん(高16)でグロス95、ハンディ22.8、ネット72.2でした。この上位3人は奇しくも同じ組でした。

一方、これと好対照に優勝の廣政さんと往復同マイカーコンビの押田良樹さん(高11)は、グロスが5打違うだけでしたがハンディが上位者より厳しく出て最下位16位に沈み、失意のうちに(?)優勝者と同乗、帰途につかれました。

#### ◆廣政さん(高7)優勝談話

昨年のコンペではグロス90という自分では最高のスコアが出ましたが、なぜかハンディが12と出て16位になってしまいました。今回は28.8という大きなハンディになり思いがけなくも優勝することができました。ダブルペリア方式というのは意外な結果を生むので面白いものです。

#### ◆参加者は以下の方々です(敬称略)

前列左から 寺本尚由・客野伸・仁宮竜聖(高5)、武田貞雄(ゲスト)、畑田稔(高11)、松本耕司(高16)

中列左から 佐野和子・三好資子(高20)

後列左から 大野賢造(ゲスト)、廣政倅彦(高7)、井上隆吉(ゲスト)、三吉孜・井上伸久(高16)、三好文章(ゲスト)、押田良樹(高11)、伊藤征治(ゲスト)



## ■第97回日本陸上競技選手権大会 (女子3000m障害) 応援

### 会員の荒井悦加さん“日本選手権を連覇”!

日時／平成25年6月9日(日)

場所／東京都調布市の味の素スタジアム

報告者／松本耕司 (高16・昭40卒)

当会の会員である荒井 (旧姓辰巳) 悦加さん (高51・平12卒、エディオン所属、境港市在住) が、東京調布市の味の素スタジアムでおこなわれた標記大会に出場した。

報告者は荒井さんが陸上部の後輩であることから応援に駆けつけたが、女子3000m障害での見事な連覇をこの目で見る事ができたので、その快挙を以下に報告する。

昨年の大会はこの種目の女王、早狩実紀 (京都光華AC) さんの7連覇を阻んでの初優勝で、母校陸上部OB会 (三柳会) にとっても日本チャンピオンに輝いたのは、1961 (昭36) 年の男子棒高跳の山田寧先輩 (当時日体大、高9・昭33卒) 以来、51年ぶりの快挙であった。

更に遡れば、旧制松中45期 (大14卒) の津田晴一郎さんが昭和4年から6年にかけて1,500mから10,000mで5回にわたり優勝しており (津田さんはマラソンで昭和3年のアムステルダム、昭和7年のロサンゼルスオリンピックに出場をした名ランナー)、荒井さんは双松会の歴史の中では3人目のチャンピオンである。

荒井さんは昨年の優勝後、年後半に右足かかとを痛め、直前の3～4月は完全休養を強いられるなどの苦境を乗り越えての見事な連覇であった。全日本チャンピオンになること自体が大変なことであり、連覇はさらに難しいと言われる中での偉業を達成した荒井さんを心から祝福したい。

荒井さんと近畿双松会の関係は、2007年の世界陸上大阪大会に日本代表として出場して以来のものであるが、その紹介は今回はこまにとどめたい。荒井さんからは、大会前に「右足かかとの痛みをこらえて、なんとか練習を積んできたが、正直、どの程度走れるかはわからないが、当日までしっかり調整したい」という連絡をもらっていた中での応援だった。

当日は快晴の中、15時15分スタート。私は、水濠横のスタンドで荒井さんの北高時代の監督の玉野二三男先生と二人での声を枯らしての応援となった。

そして1回目の水濠への着水・・・、なんと、そこで私は苦痛に顔をゆがめる荒井さんを見ることになり、あらためてこの間の彼女の苦闘、このレースにかける強い思いを知るようになった。

それから後は、無事にレースを終えてくれることのみを願っていた。しかし、水濠着水ごとに4～5m離されるものの、一周走ってくる間に見事なハードリングで盛り返してくるあきらめない姿を2～3回見るうちに、あるいはこれはと思うようになっていったが、なんと、事実もその通りになった。7回の水濠着水の痛みを耐えて、最後のハードルを越えてからの見事なスパート



9'58"22 二連覇 2013年6月9日味の素スタジアム

で他の選手を振り切るという見事なレース運びで、願いはかなえられた。

今シーズンの痛みとの闘いの中で、「早狩さんにかわる新女王として恥ずかしい走りはできない」との思いと意地を見せた見事なレースであった。

山陰に生活や練習の本拠をおいて、日本チャンピオンになること自体が生半可な話ではない。「北高～島根大学～実業団」とスポーツの世界では華かとは言えないキャリアの中で10年かけて花を咲かせている荒井さんを、陸上部の先輩として、双松会員として、心から誇らしく思う。

レース後の彼女からの連絡や、マスコミ、専門誌等の記事によれば、昨年の初優勝時以上の喜びを味わっているとのことである。それはそうであろうと心底思う。

こうなれば、もう一度体調、故障を万全に戻して、彼女にとっては初めてとなる「9分40秒台の記録を出しての三連覇」をめざして、頑張って欲しい・・・と、勝手ながら先輩としては強く願っている。

荒井さん、本当におめでとう。万歳！



水濑で離されて



水濑以外で巻き返して

#### ◆追記(2014年2月)

荒井さんは本年1月末にエディオンを退社したと聞く。即ち、駅伝をメインにおきチームとしての練習が主となる実業団選手としてのキャリアを終えたことになる。

主婦でもある荒井さんの今後の陸上競技人生がどうなっていくかは誰にもわからないが、陸上部の先輩としては、故障を直して、今度は一市民ランナーとして日本選手権三連覇をめざして欲しいという、かなり無茶な要請をしているところである。案外、かなえてくれるのではないかと、「何かを持っている」荒井さんには密かに期待しているところである。

なお、荒井さんにはこの55周年記念会報に「特別寄稿」(別掲)をいただいております、皆様には是非ご一読をお願いする次第である。

## ■第8回「文楽」鑑賞会

日時／平成25年7月21日(日)  
会場／国立文楽劇場  
報告者／押田良樹(高11・昭35卒)

8回目を迎えた文楽鑑賞会、今回はゲストを含め20名と第1回目の36名に次ぐたくさんの方が参加がありました。



今回は夏休み文楽特別公演の第2部名作劇場「妹背山婦女庭訓」を鑑賞しました。演目は全五段のうち四段目の「井戸替の段」、「杉酒屋の段」、「道行恋苧環」、「鱧七上使の段」、姫戻りの段、「金殿の段」で休憩を入れて3時間半の長丁場でした。

蘇我入鹿など大化の改新前後の人物を題材にした物語ですが、史実とはかなりかけ離れた筋で真面目な歴史好きの人には戸惑いがあったかもしれません。またヒロインである造り酒屋の町娘お三輪の哀れな最期などは、いつもながら文楽作品として、自己犠牲が尊いものとされる時代の価値観を理解していないとじっくり共感で

きないところもありました。

それはそれとして、太夫、三味線、人形遣いの三位一体のいつもながらの熟演には暑さを忘れさせるものがあり、十分見ごたえがありました。

### ◆参加者は以下の方々です(敬称略)

佐藤早智子・清水良子ご夫妻・佐々木悦子(高9)、押田良樹・石倉昭子(松江)・佐藤裕子(松江)・田村廸子・中尾長子(高11)、加藤巡一・小泉勝是(高14)、土田和男・松本耕司(高16)、山寄麻里子(高20)、内藤みよ子(高23)、楠本範子・宮地登美子・橋本充男ご夫妻・松岡茂(ゲスト)



## ◆第8回 歴史ウォーキング「新島八重の足跡」

日時／平成 25 年 9 月 29 日(日)

報告者／押田良樹(高 11) 松本耕司(高 16)

### ◆コース：

地下鉄蹴上駅 → 南禅寺水路閣 → 若王子神社 → 同志社墓地／新島襄・八重、山本覚馬の墓 → 哲学の道 → 黒谷西雲院(会津藩墓地) → 「河道屋養老」で昼食 → 疎水夷川ダム～鴨川畔遊歩道 → 女紅場址碑(同志社女学校の前身) → 新島旧邸(同志社創立の地) → 京都市歴史資料館 → 京都御苑散策 → 建礼門 → 蛤御門(禁門の変銃弾跡) → 出水の小川 → 九条池/巖島神社 (行程 約22,000歩・押田万歩計)

※「女紅」とは「女性の手芸・裁縫・算術・簡単な英会話のたしなみ」などのこと。

今回は今年のNHK大河ドラマに因み「新島八重の足跡」をテーマに、京都の八重さんゆかりの地を訪ね歩きました。参加者は32名と過去最多となり、好天の中、ボランティアガイドさん2名の親切な説明を受けて歩きました。

京都在住の役員、村田貢さん(高22)、廣瀬弘美さん(高29)のお二人が世話人として下見までして準備をしてくださった成果は完璧で、ウォーキングコースに満足した以外にも、名代の「河道屋養老」ではおいしいお蕎麦をいただき、九条池では廣瀬さん準備のパンを鯉とアヒルに与えて功德を施すなど、おおいに楽しんだ一日となりました。従軍カメラマンの土田和男さん(高16)には今回もご苦労をおかけしました。

また、今回の参加者からの感想文は、明治維新を研究中の森藤哲章さん(高16)にお願いしました。有り難うございました。

小泉勝是(高14)、安達和彦(高15)、梅木隆志・松本耕司・土田和男・三成宏二・森藤哲章ご夫妻・田中由美子(高16)、千葉秀二ご夫妻(高19)、三好資子ご夫妻・山崎麻里子(高20)、村田貢・鶴羽孝子・木山洋子・大浜緑・鈴木厚子(高22)、近藤文雄ご夫妻(高23)、廣瀬弘美(高29)、楠本範子(ゲスト)



### ◆参加者は以下の方々です(敬称略)

木村八重子・佐藤早智子・清水良子・佐々木悦子(高9)、押田良樹・田中一男・後藤武久(高11)、萩野貫悟(高12)、古川幸孝・



## 「歴史ウォーキング」に参加して

森藤哲章(高16)



新島襄の墓前にて、筆者(右)と妻

9月29日は、故郷の安来市広瀬町において第6回戦国尼子フェスティバル(5年に1回開催)が幸盛祭とともに盛大に開催される日でした。私は両方に参加したかったのですが、最近、明治維新の出来事に興味を持つようになっていましたので、今回は、NHK大河ドラマ「八重の桜」の主人公である新島八重の足跡をたどる「歴史ウォーキング」に参加させて頂きました。

高校卒業後、関西で生活していますが興味が無かったため、京都御所近辺は車でたまに通る程度でしたので、秋晴れの下、新しい発見続きのウォーキングでした。

午前9時30分頃、京都の地下鉄「蹴上駅」を出て南禅寺に向う途中にある琵琶湖疎水インクライン下のトンネルを潜った所で32名の参加者が集合しました。先日の大雨で土砂が流れ込みテレビのニュースにもなっていた臨済宗南禅寺派大本山「南禅寺」境内がきれいに整理整頓されていることに驚きながら歩くと、すぐに水路閣が見えました。境内を取り囲むように流れる琵琶湖疎水、その水路では、ブラックバスと思われる大きな魚が泳いでいました。



南禅寺境内を出て5分程歩くと若王子神社があり、そこから急な登り坂になりました。ハアハアと息を切らしながら登ると、新島八重と襄の墓が山の中腹にありました。同じ墓地に八重の兄の山本覚馬の墓もありました。上り坂のためはじめてから登らずに下で待たれた方もおられました。

墓地から下山し、哲学の道をしばらく歩きました。右側に川が流れていましたが琵琶湖疎水で作られた小川のようなようです。春の桜並木でも有名です。

金戒光明寺は幕末の京都守護職を務めた会津藩主・松平容保が本陣を構えた寺で、京都守護職本陣や京都御苑は幕府の警護を司る役人達が守りを固めていた場所です。鳥羽・伏見の戦いで犠牲になった会津藩士を祀っているとともに、会津小鉄こと上坂仙吉の墓もありました。

松平容保に不逞浪士の取り締まりと市中警備を任せられた壬生浪士組は、堺町御門の変(1863年8月18日)での働きを評価され、隊名「新選組」を拝命しています。池田屋事件(1864年6月5日)で尊王攘夷派志士を斬殺・捕縛し、その名を天下に轟かせました。

昼食は「河道屋養老」で少しのビールを飲みながら蕎麦を食べました。

新島旧邸宅はアメリカから帰国した新島襄が、明治8年(1875)にこの地を賃貸して同志

社英学校を開校した場所です。半年後、学校は現在の同志社大学がある場所(旧薩摩藩邸跡)に移して、穰はこの地を購入し自ら設計して完成させた和洋折衷の木造2階建です。この場所で同志社英学校を創始したため、同志社発祥の地とされています。明治9年(1876)に穰は山本八重と結婚し、穰と八重夫妻の自宅として使われました。明治23年(1890年)に穰の没後は八重が一人でこの邸に住み、昭和7年(1932年)に八重も没しました。平成2年(1990年)全面改修の後、平成4年(1992年)より一般公開。現在、同志社大学が所有し、建物だけでなく調度品や家具を含めて、昭和60年に京都市指定有形文化財に指定されています。



京都市歴史資料館は新島旧邸宅から100m程北に行った所にあります。特別展「岩倉具視の幕末維新」が開催され、明治元年(1868年)1月に新政府の副総裁に就任した岩倉具視の関係資料(脇差・短刀・火縄式銃砲等を含め重要文化財等)が沢山展示されていました。

京都御苑にも初めて入りました。広大な広さのため東から西まで疲れた足で歩くのは結構大変でした。明治維新まで天皇が住まれた京都御所は、御苑の中にありますが、壁で囲ってあるため、建礼門から垣間見る程度でした。



御苑にも壁があり、東西南北に門が合計9個あるようです。御苑の西側の門である蛤御門には蛤御門の変(1864年7月19日)で出来た鉄砲の弾痕が残っていました。火縄銃の弾痕なのか? 幕末は海外では小銃の技術革新の時期であり、日本にも輸入されてきたミニエー銃(1849年にフランスで開発)やエンフィールド銃(ミニエー銃の改良型)なのか? または八重も使ったスペンサー銃(1860年にアメリカで開発)の弾痕なのか? と、当時の

出来事を偲びながら、全員の記念写真を撮影しました。

御苑の南西側の門である堺町御門の近くには九条池があり中島には巖島神社がありました。皆で鯉にパンをやりました。たくさんの鯉が先を競って食べていました。パンは幹事さんがウォーキングの途中から持ち歩いておられましたが、私は幹事さんがご自分の夕飯に持って帰られる物だと勘違いしていました。

そして、楽しかった一日も、ほどよい疲れとパン投げとともに終了し、参加者は再会を約束して三々五々、家路をたどりましたが、私が幹事・同期の皆さんとの打ち上げ会に参加し、疲れを癒したことは言うまでもありません。

お世話をいただきました皆さん、本当に有り難うございました。

### 高1期（昭和25年卒業）「隠居広場」

日時：平成25年4月18日（木）

会場：松江北高内会議室

報告者：荊田運三郎

高1期は、一昨年の松江大会を最後に、全国規模の同期会（一双会）を閉じました。以後は首都圏、近畿圏、松江圏の地域の会合に収れんしました。昨年は「隠居広場」座談会と称して母校に11人が集まり開催しましたが、その模様は本部発「双松会報」

に詳しく掲載されましたのでご覧いただいたことと思います。

なお、近畿圏は恒例の忘年会を止めて、12月8日の55周年記念総会に集合することとしました。



### 高2期（昭和26年卒業）「三日月会（高2期）」千秋楽の集いの報告

日時：平成25年11月18日（月）

会場：「梅の花・心齋橋店」

報告者：久保田幸雄

高2期は80歳を超えて幹事役も大変な年齢になってきたことから、全員揃っての定例同期会を開催することにはひと区切りをつけることとし、「千秋楽の集い」と称して全員に招集をかけ、現会員18名中12名が参加して開催しました。（6名は病欠）

集いは、記念写真撮影後開会、同期物故者への黙祷、堀江君リードの赤山愛唱歌、千葉幹事代表挨拶、高橋君の「生徒時代の文芸活動を中心に・・・」と題したスピーチ、

高内君による乾杯、歓談、全員のショートスピーチ、竹森君の万歳三唱、堀江君の三本締めでお開きとなり、これからの人生の思い出に残るなごやかな会にしたいという目的を十二分に達成して、無事散会しました。

これからは、個別の集まりや、近畿双松会総会時のミニ同期会へと移っていくこととなりますが、“中・高同期の桜”いつまでも元気に励まし合って頑張っていきたいと

思います。

◆参加者は以下の方々です

前列左から、金坂喜夫、安達学而、千葉新一、高橋正立、堀江眞三人  
後列左から、鳥谷芳男、竹森英二、永井達也、田中昭夫、高内松夫、作野宏、久保田幸雄



なお、会の解散にあたり、下記、これまでの三日月会の活動骨子を近畿双松会報に投稿し、永遠に記録に留めるとともに、後進の皆様のご参考になればと考えます。

1. 設立：昭和30年年末（大学卒者が社会人1年目の年）

2. 契機：松江、東京の同期会設立情報を受け、大阪在住有志も決起、発足。

3. 名称：有松将君の提案により「三日月会」と決定。赤山健児の歌一番の「三日月」から、また郷土の武将山中鹿介の三日月に祈る故事に因んで命名。

4. 役員：

初代（昭30～43）：会長 葛尾信弘、幹事 有松将

二代（～昭60）：会長 高内松夫、幹事 有松将

三代（昭60～平2）：会長 千葉新一

以降、幹事合議制：向高博、竹森英二 ⇒ 千葉新一、竹森英二、高内松夫 ⇒ 千葉新一、竹森英二、久保田幸雄

5. 規定・経費等：規定は特に定めず、都度協議。経費は毎年の会費の範囲内。

6. 会合：

① 青壮年期：毎年1～2回の懇親会開催。主は、現況報告、思い出、励まし合い。

② 50～60歳代：兼折博先生、袖本重幸先生はじめ7人の恩師を招待。在学中の感謝、ご健康を祈念。

③ 70歳代：老化情報交換「元気にやろうぜ！」（毎年1回開催、80歳代まで続く）

・平成23年11月18日、松江東急インにて「2期傘寿全国同窓会」に参加。

・平成24年12月、「東京2期会最終回総会懇親会」（連絡）

④ 千秋楽の会：上記のとおり。

7. 文集発行：平成13年9月、卒業50周年記念文集「みかづき」発行

～私たちの二十世紀、そして今～

（B5版40頁、編集責任者 栞谷 崇）

以上



## 高9期（昭和33年卒業）

日時：平成25年12月12日（木）  
会場：神戸メリケンパークオリエンタルホテル  
報告者：清水良子

本年度の近畿同窓会は近畿地区から25名、近畿外から28名の総勢53名の参加で開催し、宴会では詩吟、日舞、ギター演奏が披露され、心温まる時をすごしました。

宴会後はグループに分かれルミナリエの観賞をしましたが、初めての私は、すばらしい「光の彫刻に」感動の連続でした。



## 高16期（昭和40年卒業）

日時：平成25年4月14日（日）  
会場：曾根崎「がんこ寿司」本店  
報告者：梅木隆志

近畿地区58名に案内を送付しているが参加者は10名であった。4月は行事が何かと多いとの返信もあり、次年度は開催時期を5月下旬に決定し、多くの参加を期待。

◆参加者（前列左から）森藤哲章・松本耕司・山田敬子・三成宏二・森光雄（後列左から）車野巧悦・梅木隆志・土田和男・井上伸久・坪倉司郎



## 高22期(昭和46年卒業)

日時：平成25年7月13日(土)  
会場：梅田「ニュートーキョー第一生命ビル店」  
報告者：鶴羽孝子

2013年3月に初めての同期会を開催し、盛り上がった勢いは夏の会へとつながりました。

7月13日、梅雨明けとともに猛暑が続き、冷たいビールで涼をとりたい気分最高潮となるなか、梅田で「納涼会」を催しました。前回出席した10名に3名が新たに加わり、13名が出席しました。

初めて開催した前回は、みな緊張して堅苦しい雰囲気もありましたが、2回目の出席が多かったこともあり、今回はリラックスして、最初から和気あいあいで話がはずみました。そして、ジョッキを重ねるにつれ、松江弁やギャグが次々と飛び出し、宴席は笑いに包まれました。新たに加わった3名もすぐに溶け込み、とてもなごやかで楽しいひとときを過ごしました。

熱い「納涼会」は、あっという間にお開きとなりましたが、その後男性陣はカラオケへ、女性陣は甘党の喫茶店で二次会を楽しみ、友情を温めました。

今回出席できなかった方からも、「所用で

出席できずとても残念、次は参加したい」など関心を寄せていただいていることがうかがえるメッセージを多数いただきました。

この会が末永く続き、新しい仲間が気軽に加われる同期会となるよう、出席者全員が心をひとつにしました。

◆参加者(上段左から)石川章・内村昭・太田朗夫・石橋善和・内藤清志・永瀬光一郎・村田貢(中段)実重祐二(下段左から)鶴羽孝子・大浦綾子・鈴木厚子・木山洋子・大浜緑



## 2014 (平成26)年度 事務局会議新年会 (兼)総会実行委員会慰労会

日時／ 2014年1月17日(金)

場所／ 「がんこ曾根崎本店」

2013年12月8日の大盛況に終わった55周年記念総会・懇親会の開催に汗を流していただいた事務局会議の役員、ならびに有志の皆さんが集まり、新年会兼慰労会を開催した。皆が全力投球をした1年であっただけに、心からくつろぎ、次に向けての鋭気を養うひと時を過ごすことができた。

また、役員外では高14期の小泉勝是さん(松高1年で山口高校へ転校)、古川幸孝さん(山歩き担当)、高19期の千葉秀二さん(総会で総括補佐を担当)、高22期の山寄麻里子さん(福引き大会の縁の下で活躍)にご参加いただき、場を盛り上げていただいたことに感謝したい。

### ◆参加者は以下の方々です(敬称略)

押田良樹・田中一男(高11)、加藤巡一・小泉勝是・古川幸孝(高14)、梅木隆志・松本耕司(高16)、岩田一志・千葉秀二・池田喜美代(高19)、渡辺 悟・三好資子・山寄麻里子(高20)、村田 貢(高22)、松本潤(高23)、廣瀬弘美(高29)



## 2014 (平成26)年度 近畿双松会「新年役員懇親会」

日時／平成26年1月31日(金)  
場所／中央電気倶楽部

新年役員懇親会は、会則に従い押田会長以下16名が出席して開催され、昨年の55周年記念事業を総括するとともに、新年度の基本的な運営方針、行事予定などを話し合いながら新年の懇親を深めた。

松本事務局長(高16)からは、以下の5点の報告があり、特に異論なく了承された。

### ◆昨年度の総括：

- ①「設立55周年記念総会懇親会」を無事終えることができた。
- ②「会則」改訂はスムーズにスタートできた。
- ③残る「記念会報」発刊に力を注ぐ。

### ◆本年度の取り組みのポイント：

- ①60周年に向けた新たな5年の初年度であることを念頭に、粛々淡々と地力を蓄えながら歩をすすめていく。
- ②役員の変更年であることから、総会に向けてスムーズに体制の充実に努めていく。
- ③諸行事内容も基本は前年通りとして取り組む。

さらに、松本事務局長から1月現在の会計状況が報告され、5年ごとの周年記念事業に力を注ぎ会員への謝恩に徹することの目的は達成できたが、新たな5年に向けては貯蓄にも意を注ぎたいとの報告があり、了承された。

その後、ご欠席の青戸元也幹事(中68)差し入れの「李白」を楽しみながら懇親を深め、新年役員懇親会は有意義に終了した。

### ◆参加役員は以下の方々です(敬称略)

【会長】押田良樹(高11) 【副会長】事務局長松本耕司(高16)・渡辺悟(高20)・松本潤(高23) 【監事】梅木隆志(高16) 【常任幹事】山田稔(高5)・加藤巡一(高14)・金坂喜好(高15)・岩田一志(高19)・三好資子(高20)・宍道弘志(高31)・富岡幸子(高35) 【幹事】田村稔久(高6)・山崎杲(高8)・清水良子(高9)・萩野貫悟(高12)



## 近況報告

この近況報告は、昨年の総会の出欠回答時(10～12月)を中心として、昨年の会報発行以降に  
お寄せいただいた近況を加えて構成しました。

半年前後の時差がありますこと、ご承知おきください。

### 中60(昭15卒)景山 章

心不全になり入院いたしております。当日の  
ご盛会を願っております。

### 中61(昭16卒)菊田光男

老齡化!につき、失礼させていただきます。  
皆さんに宜しく。

### 中62(昭17卒)吉田祝雄

療養中にて総会は欠席いたします。

### 中63(昭18卒)泉田春樹(旧姓・浜田) 雅号: 秋硯

元気にはしておりますが、大変多忙です。(俳  
句結社「苑」を主宰)

しかも身体は衰えていきますので、無理はし  
ないようにしています。

京都、大津、大阪、芦屋、宝塚に教えに行き  
ます。執筆も多く大変です。

### 中63(昭18卒)肥塚隆正

残念ですが、丁度孫の結婚式と重なり、欠席  
させて戴きます。

私も米寿を迎えますが、今頃では珍しくない  
状況です。「ひ孫」の顔を見るまではと思います。

「万歳三唱」は、この「お葉書」で。

### 中67(昭21卒)片山 恂

近年、健康すぐれませず、大変ご無礼ですが  
失礼いたします。

### 中68(昭23卒)青戸元也

設立55周年記念会のご案内、有り難うござ  
いしました。

加齢を痛感するこの頃ですが、足腰が立ち、  
ボケない限り、何とか近畿双松会の会合には参  
加したいと思っております。

### 中68(昭23卒)荒銀昌治

最近、親しくしていた同級生2人を続けて亡

くしショックでしたが、私は年齢相応ながら一  
応元気に過ごしています。

週3～4回のスポーツクラブでの水泳と近く  
の図書館から借りてくる本(時代小説、経済小  
説など)を乱読しています。時々、同じ本をま  
た借りてくるような失敗もありますが。

### 中69(昭24卒)梁田伸信

病氣療養中で休会させて頂いております。よ  
ろしく。

### 高1(昭25卒)菊田運三郎

一双会(1期同期会)12名に参加要請しました。

### 高1(昭25卒)喜多川治美

恒例の同期忘年会の開催を取りやめて、近畿  
双松会55周年記念大会に参加することになり、  
久しぶりに出席します。

### 高1(昭25卒)竹内一郎

当日不在のため、残念。申し訳ありません。  
盛会をお祈りいたします。

中之島上流の大川沿いの住居から徒歩20分  
の散歩先が、淀川から市内中央部を流れる大川  
への水の取り入れ口である。有名な「毛馬の閘  
門」です。18世紀の俳人蕪村の生地、昔の毛馬  
村です。

「菜の花や月は東に日は西に」「春の海ひねも  
すのたりのたりかな」

今の淀川の広大な河川敷の辺りだったよう  
です。淀川の大堤防の上や、近くの公園には数々  
の碑文があります。

### 高1(昭25卒)平山武秀

ご案内、有り難うございました。私は近々京  
都へ転居いたします。その日は転居直後のゴタ  
ゴタで出席は不可能かと思います。申し訳あり  
ません。ご盛会をお祈りしております。

**高1 (昭25卒)田端要子**

ご案内頂き、嬉しゅうございます。運悪く当日都合がつかませず、欠席させて頂きます。お返事遅くなり失礼いたしました。

中央公会堂でのお集まり、ご盛況を祈っております。いつの日か、お目にかかるのを楽しみにしています。

私達、松操会(女学校同窓会)の近畿在住者10名ほど、毎年集まっています。

**高2 (昭26卒)久保田幸雄**

81歳、老化進捗顕著。記憶力特に退化。諸病あれど年齢相応に健康。

先輩の長寿に敬意を、後輩の諸君にはご活躍を祈念し、同期には一日一日をなんとか充実して生きたいものと願っています。

**高2 (昭26卒)竹森英二**

満80歳を迎えました。現在、番傘川柳本社の同人として川柳を趣味として(歴40年)余生を楽しんでいます。

「新婚の頃は軽々抱けたのに」(雀舎)

**高2 (昭26卒)鳥谷芳男**

80歳を過ぎて老化が進んでいますが、日常生活には支障ありません。今は九条を守る会と脱原発の運動に参加しています。

**高2 (昭26卒)栢谷 崇**

最近、足腰が弱ってまいり、医師からは遠距離旅行は控えるようにと注意を受けておりますのでご諒承ください。

松江という水明の地に生まれ、よき師、よき友にめぐり会えて、心から感謝いたしております。

**高3 (昭27卒)周藤マシロ**

ご案内ありがとうございます。松高を卒業以来、大阪に出て60年が経ちました。13年前に主人を見送り、今一人でどうにか過ごしております。

**高4 (昭28卒)田淵宗明**

**高7 (昭31卒)田淵美喜子**

元の勤務先系列グループ技術者OB会、居住地区自治会老人会及び同好会の会員として、ハ

イキング、グランドゴルフ、囲碁、小旅行に参加している。

夫婦では、興味ある美術展示会、寺社庭園の鑑賞に時々出掛けている。。

**高4 (昭28卒)藤原小夜子**

古い話ですが高校生の頃、楽しい仲間と廊下を歩いている時、会話に入って来られた生物の先生”ガンちゃん”が、「あの家の子だからとか、あの親の子だからとか考えない方がいい。だれであれ、人はまったく別々の個々の人格を持っているから」と。

私は今、ボランティアで懸命ですが、この言葉はとても大切に心の中に持ち続けています。おかげで、物事がすると流れてゆくこともあり嬉しいです。

楽しい会になりますよう。

**高5 (昭29卒)青木謙整**

当日、法要があり、残念ながら欠席いたします。皆々様に呉々も宜しく御伝声下さい。

**高5 (昭29卒)山田 稔**

5期は毎年一回、ゴルフを行っていますが、今年も10月8日に三木よかわCCで2組で実施しました。めずらしいことに私が優勝しました。

**高5 (昭29卒)酒井順子**

お世話をお掛けいたします。

**高5 (昭29卒)野津恵子**

皆様どうぞお元気で。

**高6 (昭30卒)荻野克彦**

市の国際交流協会(公益財団法人)の理事長を勤めており、忙しくしています。

今回はこちらの会合と重なり欠席させて頂きます。

**高6 (昭30卒)森岡敏真**

なかなか「中央公会堂」は順番があって取れないとよく聞いていましたが、今回で2回目、良い会場で良かったですね。大阪在住の有名な方々のお力と思っています。

## 近況報告

### 高7 (昭31卒) 廣政 倅彦

或る時期より7期常任幹事を致しておりますが、先輩・後輩も親切に接して頂けますので、元気である限り、双松会を応援したいと思いません。

何時まで続くものかと不安も持ちつつ・・・

### 高7 (昭31卒) 葎仲 ヒロ子

先日は同窓会の開催通知を頂きましたが、年を重ねてしまい、どう頑張っても出席出来そうにありません。お手数をおかけして申し訳ありません。

どうぞ、盛大な会になりますよう祈っております。

### 高8 (昭32卒) 山崎 晃

神戸家裁家事調停委員のためのテキスト2冊目を執筆中。

### 高9 (昭33卒) 有本 亮正

抗がん剤との闘いの日々です。一日一日を大切に過ごしています。

### 高9 (昭33卒) 坂本 隆男

「散る花を追わず、出る月を待つ」中根東里。桜は散り人生の良い時は短い、月は必ず出る。それを待つ時間を大切にしたい。

昨年の駄作を二句。「故郷の砂を吐き出す寒シジミ」「受取りし夕刊の温もり寒明ける」

### 高9 (昭33卒) 真野 透

元気で過ごしております。

今年の12月の前半は大学同期会、会社同期会、高校同期会(於神戸)の行事が続ぎ、残念ですが参加が難しい状況です。ご盛会をお祈り申し上げます。

### 高9 (昭33卒) 山岡 裕明

当日所用あり、欠席させて頂きます。ご盛会を祈ります。

### 高9 (昭33卒) 渡部 優

他家に嫁いだ3人の娘に7人の孫がいる。

次女は小学校6年生の時に英国に留学した。中学・高等学校をモイラハウス私立学校で過し、

ケンブリッジ進学コースを経て、ブライトン大学を卒業した。

6年前、観光事業をしているマーク君(母は国連勤務、妹はBBC勤務)と結婚し、一娘、孫のアキラ(1歳4ヶ月)と3人でタイ国ブーケット島に在住している。

10月23日、金髪、ブルーアイの可愛い孫を連れて帰郷する予定です。楽しみです。平成25年10月8日 ジジ馬鹿の戯言、優

### 高9 (昭33卒) 安部 裕子

いつも御案内ありがとうございます。地元でかかわっている行事が重なり、何とか出来ないかと調整してみましたが、期日が来てもどうにもなりません、今回も欠席させていただきます。

今のうちに皆様にお目にかからなければ、私の方が駄目になるかと思いながら書いています。

55周年、公会堂、よいチャンスを見送るのは本当に残念です。ご盛会を祈ります。

### 高9 (昭33卒) 片岡 扶美子

12/12、9期同窓会を神戸のオリエンタルホテルでいたします。

### 高10 (昭34卒) 面白 紘

4月に胃がんの告知を受け、5月に胃摘出の手術をし、療養中ですが、転移も見られず順調に推移しています。

### 高10 (昭34卒) 佐和田 丸

今年の正月は、子供3人がそれぞれふたりの孫をつれてきましたので、総勢14人の賑やかなものになりました。孫は、各自個性豊かで面白く、つい笑いをさそわれます。あそびの天才でもあります。健康に注意し、得手に帆をあげて生きていってくればとひそかに願っています。

健康のため、毎日サイクリングをしています。閉店・開店がやたらに目にとまり、商売の厳しさを教えられます。私の実家も、しょうゆ・みその製造・販売をやっておりましたので、よく理解できます。アベノミクス効果で、中小企業も安定した生活が送られるような日本・社会になって欲しいですね。

飯南町の墓を、兄弟が墓参しやすいよう、松

江・大阪・京都西大谷へ移しました。今、住んでいる枚方から、西大谷に、午前中墓参し、午後は京都見物をして帰るのが、新しい楽しみのひとつになっています。京都は散策するのによい町ですね。フラットですし、魅力あるところがたくさんあります。

枚方といえば、関西以外に在住の方にとっては、難解な地名といえるでしょう。先般、地元のシンポジウムにでましたら、市長が、「枚」は崖、「方」は上の意味ではないか、と説明していました。昔、枚方あたりまで湖になっていて、大阪湾から上ってくると、崖の上にある土地が見える。崖の上の土地ということで、枚方と名付けたいらしい。それもアイヌ語からきているようだ、とのことでした。真偽はわかりませんが、私は一市民として、興味深く聞きました。一説として紹介しておきます。

#### 高10 (昭34卒) 須山 耕

91歳の年寄りをかかえて、あまり外出が出来なくなりました。55周年記念総会の成功をお祈りいたします。

#### 高10 (昭34卒) 清水義男・小枝子

お蔭様で元気に暮らしています。大学の社会人向け講座や地域の熟年講座を受講したり、ささやかなボランティア活動に参加したり、年に1回程度の海外旅行を楽しんだり、孫の成長に驚いたり・・・、そんな穏やかな日々です。

55周年記念の近畿双松会のご盛會を祈り上げております。

#### 高11 (昭35卒) 太田 厚

毎度お世話になっております。余生の主役にしていた原始農業も加齢とともに身体に應えるようになり、今年は雨のない日が続き、池からの水汲みに腰を痛め体調不良です。

総会に出席する予定でしたが、今回欠席させていただきます。ご盛會を祈念します。

#### 高11 (昭35卒) 小久江良雄

毎日、元気でいそがしく過ごしています。

#### 高11 (昭35卒) 神門英明

今回、初出席する予定です。誰に会えるか楽

しみにしています。最近孫の世話等に追われています。

#### 高11 (昭35卒) 河野克彬

週3日、仕事を続けています。

#### 高11 (昭35卒) 高本紘史(松江市在住)

いつも案内を頂きありがとうございます。

4ヶ月毎に大阪へ出かけ、会社時代の旧友と交流していますので、なかなか参加できません。

今年のポートシーズンは終わりましたが、仲間と元気に漕ぎました。押田氏にはカメラ、反省会等々いつも応援してもらっています。

#### 高11 (昭35卒) 村尾俊治

今年の3月末に100点の水彩画を達成。7月17日には72歳の誕生を記念し、師と共に2人展を開催、95名の友人が参加、感謝感激しました。

#### 高12 (昭36卒) 山田美恵子

元気に自由な時間を楽しんでおります。総会のご盛會をお祈りします。

#### 高13 (昭37卒) 今井勝治

67歳で退職、毎日が日曜日、健康なのが幸い。将来は帰松(定住)するかも？

#### 高13 (昭37卒) 岩橋慶和

関東から京都に転居して約10年になります。地域のボランティア(小学生の下校時みまもり隊)、ウォーキング等で元気で過ごしています。

#### 高13 (昭37卒) 永江幹雄

ご無沙汰しております。次回から参加いたします。皆様によろしくお伝え下さい。

#### 高13 (昭37卒) 渡部成和

隠遁中です。

#### 高13 (昭37卒) 中尾祐子

親のみとりが終わりホッとしたら、だんだんと医者通いが始まりました。

## 近況報告

### 高13 (昭37卒) 藤田トク子

幹事の皆様、御苦勞様です。よろしくお願  
いします。

### 高13 (昭37卒) 八板洋子

孫9人の世話と99歳の義母の世話に追われる  
毎日です。元気しております。

### 高14 (1年時、山口高校へ転校) 小泉勝是

偶々描いた絵がきっかけでお誘いを頂き、昨  
年(2012)入会しました。

以来、総会、文楽鑑賞、歴史ウォーキングな  
どの行事に参加させて頂き、楽しんでおります。

### 高14 (昭38卒) 小松三樹

一緒に汗を流した野球部の皆さんとのつなが  
りがないのが淋しい限りです、2年先輩の石原  
さん、吉儀さん、山根さん、1年先輩の石川さん、  
成瀬さん、熊野さん、本郷さん、当時の監督は  
三島監督でした。

### 高14 (昭38卒) 木幡晃正

多少、体力の衰えは感じますが、元気に暮ら  
しております。幹事の皆様、ご苦勞さまです。

### 高14 (昭38卒) 富永寿郎

私、元気でやっていますが、当日はどうしても  
東京での会合があって欠席いたします。申し  
訳ありません。皆様のご多幸をお祈り申し上げ  
ます。

### 高14 (昭38卒) 佐谷絹子

奈良に落ち着いてから20年近くになり、松  
江の方からも連絡もいただき、驚き、嬉しくも  
あります。それほど遠く離れていたと思います。  
皆様の健康をひたすら願っています。

### 高15 (昭39卒) 安達和彦

どうにも都合がつかず、不本意ながら・・・。

### 高15 (昭39卒) 山根健一

私、西宮を引き上げ、松江にターンいたしま  
したのでお知らせします。貴会の益々のご発展  
をお祈りいたします。

### 高16 (昭40卒) 下寺睦朗

高槻市で小児科クリニックを開業しています。  
日曜日以外は毎日働いています。

### 高16 (昭40卒) 坪倉司郎

当日結婚式出席のため、上京中につき欠席と  
なります。同期の各位によりしくお伝え願います。

### 高16 (昭40卒) 長谷川賢治

相変わらず週一で畑とハンゲル教室に行っ  
てます。

### 高16 (昭40卒) 松本耕司

①電車の中で「お席を替わりましょうか？」  
と言われる回数が少しづつ増え、「俺のことか  
い？」とムツとしたりせずに、にっこり笑って  
「結構ですよ」とおことわりすることも上手に  
なってきました。しかし、はじめから声をかけ  
られないよう、まずは背筋を伸ばさなきゃ。

②松下幸之助は福島区の大開町で松下電器を  
創業しましたが、私は会社定年前に大開公園に  
その創業記念碑を建立する仕事に関わりまし  
たので、その後も時々立ち寄っていました。今  
度、JR東西線「海老江駅(阪神野田駅の真下)」  
の改札を入った正面の壁に記念碑の大写真パ  
ネルが掲示されたとか。若かりし時の仕事  
の記録・・・、有難い限りです。まずは行  
ってみなきゃ。

### 高16 (昭40卒) 三成宏二

元気で暮らしています。

### 高16 (昭40卒) 三吉 孜

近畿安来会(会長)のお世話は3年目です。今  
年の親睦行事は終わり、来年2月の総会では農  
業研修機構の理事長(私より4歳上の故郷の先  
輩)に講演を依頼しています。

趣味の写真は撮影であちこち行っています。  
年明けには厳冬の北海道に行く予定です。

誠に申し訳ないですが、所用があり今回は欠  
席します。

### 高16 (昭40卒) 名倉保子

いろいろとご準備をすすめて下さり、心から  
感謝申し上げます。

皆様のお変わりないご様子に、高校生の頃を思い出し、懐かしさで胸がいっぱいになりました。

どうぞ、これからも同期会の様子などをお聞かせいただけたら幸いです。

.....  
**高16 (昭40卒) 森川葉子**

今年はスイス10日間の旅に出かけました。4,000m級の山々を見ながらのハイキングも楽しいものです！

一日に春・夏・冬、3回の体験をするのもビックリです。自然のすばらしさに触れ、また色とりどりの花に癒されました。

秋の京都も展覧会が多く、紅葉と共に忙しくなってきました。

幹事の方ご苦勞様です。みんなに会える日を楽しみにしています。

.....  
**高17 (昭41卒) 岡 久夫**

今まで連絡を頂きながら、失礼ばかりで、少し敷居が高いところですが、今年は出席させて頂きます。

皆様にお会い出来る事を楽しみにします。

.....  
**高17 (昭41卒) 大石絹江**

介護福祉士として働きながら、今年2月に脳出血で倒れた夫の介護をしています。元気で頑張っています。

.....  
**高19 (昭43卒) 横原 隆**

欠席で申し訳ありません。年金生活ですが、旅行、テニス、ゴルフを楽しんでいます。

.....  
**高20 (昭44卒) 金見幸夫**

大阪府立支援学校長を退職後、地域の老人福祉センター長を拝命いただきましたが、体調不良(腰痛)により、職を辞しました。

日程調整したかったのですが、別用があり、申し訳ありません。欠席いたします。

.....  
**高20 (昭44卒) 山寄麻里子**

現在62歳。確たる根拠もないのに、何故か自分は100歳迄生きると信じております。(因みに、父95歳、母87歳で存命)

その為に、①エレベーター、エスカレーター

は使わず、階段。②早寝、早起き、目覚まし時計は使わない。③頭と身体を鍛える。④前向きに日々の生活をおくる等、心がけています。

100歳を目指して頑張ります！

.....  
**高21 (昭45卒) 野津一雄**

55周年記念総会の開催、おめでとうございます。残念ながら当日は法事の準備があり、出席できません。

当方は既に60歳を超えておりますが、勤務先の継続雇用制度により姫路で単身赴任で働いております。また、郷里の松江に毎月のように帰省しており、11月初旬に続き12月中旬にも帰省する予定です。

末筆ながら記念行事のご盛会をお祈り申し上げます。

.....  
**高22 (昭46卒) 石川 章**

第二の人生、マンション管理の仕事に週3.5日行っています。

.....  
**高22 (昭46卒) 実重祐二**

38年勤めた会社を3月末で定年退職し、別会社に再就職してフルタイムで働いています。こんなことで良いのか、と思いつつ・・・。

.....  
**高22 (昭46卒) 内藤清志**

第二の職場として、マンションディベロッパーの小会社で火災保険の仕事をしています。

休日は、全国の鉄道を乗りつぶし、お城巡り、岬巡り、温泉巡りを楽しんでいます。

.....  
**高22 (昭46卒) 永瀬光一郎**

大阪に出てから28年になりますが、相変わらず建設業で元気に働いています。

.....  
**高22 (昭46卒) 村田 貢**

昨年の総会をきっかけに発足した「22期関西同期会」も、この一年で形が何とか整い、春、夏と10～15名ぐらいの規模で集まることができるようになりました。

.....  
**高22 (昭46卒) 大浦綾子**

皆様とお会いできるのを楽しみにしております。

## 近況報告

### 高22 (昭46卒) 大浜 緑

9月29日、歴史ウォーキングに参加させていただき、とても楽しい一日になりました。これからも機会があれば、色々に参加させていただきたいと思っています。

### 高22 (昭46卒) 佐藤松子

平成25年3月31日、岸和田市立城内小学校を定年退職いたしました。

### 高22 (昭46卒) 鈴木厚子

3月に定年退職を迎え、今はゆったりした時間の中で過しています。

夕方1時間弱の河川敷でのウォーキングを日課にしています。故郷を思い出させてくれる虫の声、目を楽しませてくれる美しい草花、そしてビル街に沈む大きな夕日……。私にとって大切な時間です。

### 高23 (昭47卒) 松本幸子

お世話になります。

### 高23 (昭47卒) 山口紀子

大変残念ですが参加がかなわなくなりました。ご盛会お祈りしております。

### 高25 (昭49卒) 長田英夫

大阪市生野区にて、デザイン事務所を個人で営業しております。

### 高27 (昭51卒) 木田京子

障がい者支援の仕事で、日々忙しくしております。

### 高29 (昭53卒) 太田春樹

幹事の皆様、いつもお世話になっています。日々忙しく過ごしています。総会当日をとても楽しみにしています。

### 高29 (昭53卒) 金田康嗣

今年4月より大阪での単身赴任生活がスタートしました。

週末は中学硬式野球(ポニーリーグ)のクラブチーム運営に関わっているため、ほぼ埼玉の熊

谷に帰省しています。

### 高29 (昭53卒) 達山 暢

卒業30周年同窓会の熱狂も過ぎ、還暦同窓会までは雌伏のときでしょうか。

事務局の皆様、いつもありがとうございます。今年も楽しみにしております。

### 高64 (平25・北高新卒) 宇田川幹生

北高で耐えしのいた事をバネに、学生として学業に精進しています。

### 高64 (平25・北高新卒) 中西祥平

大阪大文学部でつつがなく過ごしております。

### 高64 (平25・北高新卒) 吉岡祥平

大阪大学薬学部薬科学科に入学しました。大学では空手部に所属しています。

### 高64 (平25・北高新卒) 吉持主税

9時間後に実施される基礎物理化学のテストに向け、夜を徹しております。

### 高64 (平25・北高新卒) 戸田香菜子

私は今、大阪大学医学部保健学科看護学専攻生として、将来看護界の指導者的立場に立てるよう、最先端の恵まれた環境で勉学に励んでいます。

今の私があるのは北高生活があってこそです。様々な方々と交流したいと思っています。

以上

## 追 悼

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(昨年総会以降、事務局にご連絡のあったすべてを掲載しました)

### 物故会員

(期)	(お名前)	(ご逝去年月日)
特別会員	八木 幸治 様 (堺市)	平成 24 年 8 月 5 日
中 56 期	廣 田 實 様 (横浜市)	平成 22 年 2 月 14 日
中 61 期	児玉 治利 様 (東大阪市)	平成 25 年 5 月 22 日
中 68 期	並河 和夫 様 (生駒市)	(不明)
高 4 期	須藤 信幸 様 (大阪市)	平成 25 年 8 月 18 日
高 9 期	福本 稀美子 様 (箕面市)	平成 21 年
高 9 期	安島 道子 様 (大阪市)	平成 24 年
高 10 期	井戸 資泰 様 (守山市)	平成 24 年 12 月 14 日
高 11 期	寺戸 秀明 様 (伊丹市)	平成 25 年 2 月 16 日
高 12 期	伊藤 勝也 様 (高槻市)	(不明)
高 12 期	南 久美子 様 (高槻市)	(不明)
高 13 期	酒井 正美 様 (吹田市)	(不明)
高 22 期	中島 浩子 様 (河内長野市)	平成 21 年 12 月
高 22 期	田中 由美子 様 (西宮市)	(不明)
高 22 期	横 泉 様 (八幡市)	(不明)

## <sup>ミミズ</sup>蚯蚓

和田亮介(高1・昭25卒)



「ありゃア…、本当に今思っても不思議だったなよなア」  
「ホント、たしかにアレでちゃんと元通りになおったんだから…」  
アレの話というのは外でもない。<sup>ミミズ</sup>蚯蚓とおチンチンの相関性にかかると話である。

手っ取り早く言うと、ミミズにおしっこをかけるとおチンチンが腫れあがり、それが、あるおまじないできれいに直るということである。

今仮に、ミミズにおしっこをひっかけたのが私の兄だとする。すると兄貴のおチンチンの先っちょが、やがて赤く腫れ上がって来るのだ。

それを見た私は、急いで「デンセのババ」のところへ注進に及ぶ。本名をマスという、この妙な呼び名のバアさんは、私達の生まれる前どころか、父が生まれる以前から既にわが家にいるという、他の女中達とは別格の「<sup>ぬし</sup>主」の様な人物だが、忠臣蔵六段目の「おかや」の様な、この白髪の老婆は、私の注進に応じて大急ぎで庭に下りる。そして庭の片隅の溝を掘ってミミズを見つけると、井戸の水でこれを洗うのである。

そのミミズ、必ずしも兄がおしっこをひっかけたミミズである必要はない。とにかくミミズを綺麗に洗ったあと、再びもとの土に帰してやるだけである。

すると、本当に不思議だった。あの腫れ上がった兄貴のおチンチンが、見る間に色を失い、再び元の状態にかえったものである。まさに面妖な現象に、私は自ら実証せずにはおられぬ、いわゆる「科学する心」の湧くのを覚え、兄貴がやると全く同じことをやってみた。

そして疑いもなくわがソレが、寸分変わらぬ現象を呈することに始まり、いささかも違わぬ結末を迎えることを、この眼で確かに見届けたのであった。

以来私は、科学では理解出来ない、不可思議な事象が、たしかにこの世に存在することを、固く信じはじめたのである。

大人になってからその部分の腫れという、一寸、人様の前で口にすることを憚るが、少年の頃の<sup>そけいぶ</sup>鼠蹊部のリンパ腺は、脚部のちょっとした傷でも大きく腫れた。それを「グリグリ」と呼んでいたが、私達の誰かがその「グリグリ」で悩まされた時も、やはりわが家の「主」の出番であった。

落つき払った彼女は、かまどの下の灰を十能にとり、それを綺麗にならした。

「この上に、腫れた方の足を置きなはい。もっとちゃんと型がつくように…」

そしてその土踏まずに当たる部分、つまり一段と高く盛り上がった灰に、思い切り大きな、アメ玉の様な灸を据えるのである。一条の白い煙が立ち、やがて燃え尽きる。ところが不思議なことに、さっきまでズキズキとうずく様に痛んでいたリンパ腺の腫れが、嘘の様に消え去っているのである。

彼女は独りつぶやく、

「も、けん…、手間のかかる坊さんだワ」

夢遊病という程のものではないが、子供の頃にはよくうなされて、夜中に起き上がって廊下を歩いたり、二階の雨戸を繰って屋根へ出ようとしたりしたものだ。

そんな時も、彼女は決して慌てない。わが家から一キロばかり離れた、小高い丘の上にある氏神様に行って、境内に植えられたサカキの葉を、数枚摘んで帰って来る。そして汲みたての井戸水で、その葉の裏についた、黒いスス垢を洗い落とす。しかし呪いの道具は、そのサカキの葉ではなく、実は薄黒く濁った水なのである。そしてそれを無理矢理飲まされるのだが、清潔好きな人だったら、多分聞いただけで胸を悪くするだろう。しかしこれが又、効果テキメンなのだ。“神の水”を飲み干したその夜から、少年はコトリともさせず、深く安らかな眠りにおち、さわやかな朝を迎えるのである。

古い家に住みついたこの老婆は、まだ第二次世界大戦の行方もわからぬ頃、ひっそりと逝ったが、われわれ兄弟が彼女から受けた、この様な非科学的呪術的感化は、大袈裟に言えば私達の人間形成に少なからぬ影響を及ぼしている。テレビのUFO番組を凝視する私を、家内は笑い、娘達からも嘲笑を受ける。しかし私の深層心理にある、現実を超えた“神”の存在と、その存在を畏怖しなければならぬという私の信念は、どうしても枉げることはできないのである。

(季刊 ほほづゑ 第78号)

## 『松江の競技施設 2 題』

### ～昭和グランドそして松江球場～

千葉新一(高2・昭26卒)



昭和二十年代によく通った運動施設の中で昭和グランドと松江球場の回想記を綴り、若い世代に語り伝えておきたい。敗戦後の混乱期の中で心を明るくし晴れやかにしてくれた当時のスポーツ界の一部を振り返ることにしたい。

#### ◇昭和グランドのこと

西川津町北公園あたり(当時は八束郡法吉村)に松江市営昭和運動場が完成したのは昭和4年9月、一周四百米八コースのトラック、二百米とれる直線走路もあり、そしてフィールドには走り幅跳び、三段跳び、走り高跳びの砂場、やり投げの助走路、中央にはバスケット、バレーボールコートがあった。オープン直後には第十六回全山陰陸上選手権大会が開催されている。南側に建設された野球場と併せて六万七千平方メートルもある大きな施設であり数多くの名選手が育って行った。この競技場も昭和52年くにびき国体の新しい競技場にバトンタッチして姿を消した。

終戦翌年の昭和21年11月京都西京極で開催された第一回国民体育大会(兼日本選手権)の陸上競技では曾田英治(玉湯町)が一般男子二百米で堂々の優勝(23秒1)、十種競技の佐藤不二男は三位(佐藤は昭和14年日本選手権兼明治神宮大会で優勝、世界十八位の記録も樹立)、八百米では坂根懋(江津市)が五位に入賞している。坂根は昭和23年7月山形での日本選手権四百米で優勝(51秒4)、全日本東西対抗(51秒1)、福岡国体(50秒8)と三つのタイトルを獲得している。昭和24年東京国体も四百米を連覇、又、当時人気種目のスエーデンリレー(百、二百、三百、四百米を継走する千米リレー)での坂根の快走は際立っていた。東京国体でのスエーデンリレーで四走の坂根は三走からのバトンを受け取った時には一団となって走る他県チームから約二十米離されていた。坂根は残り百米で集団に追いつき、ホームストレートに入るやアウトコースから四人をごぼう抜き、先頭の福岡県とほぼ同時に飛び込んだ。綺麗なフォームで他県選手を抜く坂根に島根県人だけではなくスタンドが総立ちだった。(島根スポーツ百年史より)。私は大会名は失念したが、その頃昭和グランドでこのスエーデンリレーを観戦し坂根の快走ぶりを目の当たりにした。坂根は専修大を卒業した後、松江一中、益田高教員などを経て昭和52年51歳で死去。坂根が松江一中教員の頃に家内が生徒として教わったことから詳記した次第である。

我が松江高校陸上競技部も強かった。駅伝では吉岡、青戸、高内(旧姓生和)などの好ランナーを擁し昭和23年高校駅伝の県予選タイムは全国で第5位、優勝候補の一つと目されていたが、この年二度にわたる学校火災もあって時の松本校長から全国大会への出場を断念して欲しいと懇願され出場見送りとなった。高内君は今でも残念がっている。

競技部のランナーとしては同期の金野達男、奥原誉(二人共故人)、佐野幸子を思い浮かべる。

松江高校は昭和24年中国五県高校陸上では舟入(広島)、誠之館(広島)に次いで一点差の第3位を占め、又8月、堺中鳥舌競技場での全国高校陸上八百米リレー決勝で六位入賞を果

たしたが、松高新聞部記者として同行取材したことなども記憶に残る。

## ◇松江野球場のこと

昭和18年頃、昭和グラウンドと共にスタンドを取り払ってグライダー練習場になっていた松江球場は戦後の整備が殆ど行われず、昭和23年頃までの熱戦の記憶は全くない。昭和21年夏の中等学校野球山陰地区予選決勝戦も赤山の松江中学グラウンドで行われた。松江中学と鳥取一中が対戦し10対2で松江中学の快勝、西宮球場で開催された全国大会に出場している。松江球場が整備されるのは昭和23年頃からだっと思う。



千葉選手のホームラン(昭和25年8月・巨人阪神戦)

プロ野球が2リーグに分裂した昭和25年の8月、巨人対阪神という夢のような公式戦が松江球場で開催された。(平成5年近畿双松会会報に拙文寄稿)。当時の島根新聞社伊達社長が読売新聞社出身であったことからこの黄金カードがセットされたとも聞き及んでいるが、甲子園球場が高校野球で使えなかった為でもあろう。昭和25年8月、巨人は水原監督、川上、千葉等、一方阪神はそれまでの主力選手の別当、土井垣、本堂、長谷川等が毎日オリオンズに移籍したため、松木監督の下、藤村が孤軍奮闘していた。(この年の藤村は3割6分2厘の打率で首位打者)。巨人は選手交代をするうちに内野手のやりくりがつかなくなり、水原がセカンド、千葉をショートに廻すというハプニングもあった。千葉茂選手とは同姓の誼みと大ファンだったことから紹介されて試合の前日城山公園を散策、桜餅などを食べながらゆっくりと懇談し貴重な一刻を過ごせた。



城山公園にて…千葉茂選手(後列中)と筆者(前列左)

話を母校に戻そう。その頃の我が松江高校野球部は県内でも最強を誇り中国地方隣県高校との練習試合も盛んであった。昭和26年秋高松一高との試合をご披露して拙文を締め括りたい。10月13日、松江高校(4期生の新チーム)対高松一高の練習試合が行われた。高松の三塁手は西鉄ライオンズにあって豪打で鳴らした、あの中西 太。この試合を西鉄監督の三原 脩が松江を訪れて観戦している。中西は早大進学が略固まっていたが毎日オリオンズの若林(後に監督)の強引な勧誘で毎日入りが濃厚であった。松江球場で観戦する三原の前で中西の第一打席左前安打、第二打席左中間本塁打、第三打席中前安打、第四打席左翼場外本塁打…三原監督は体がふるえたそうである。(近藤唯之著のプロ野球監督列伝より)。私はこの本を読みすぐに松江北高野球部に電話した。試合のスコアブックの有無と当時の部員からの情報集めを依頼したが分からず仕舞いであった。山内以久士(松江出身、中40期・大9卒、プロ野球公式記録員、野球殿堂入りした人)式スコアを学んでいた私にとって調査が行き詰まり残念極まりない。

松江の競技場二題のご報告のできる機会を頂き感謝しています。

以上

## 『クラブ活動の思い出』

森岡敏眞(高6・昭30卒)

ユネスコ・写真・英研等3つのクラブに入った私。腰の落ち着かない人間と見るか、青春我が儘放題(多感性による)と見るかは、見る人によって違うであろう。

秋の文化祭では、割り当てられた教室に徹夜でそれぞれの部活の特徴ある展示会場造りに若き血、燃える精力を注ぎ込んだ。翌朝、運動場では個人持久縄跳び競争。私は自信をもって取り組んだが、前日の徹夜疲労が重なって短時間の負け組、残念だった。展示場当番(見張り番)の無い間に、演劇部発表の公会堂まで自転車で駆け付けた。二階の前の方から写したものが、右のものだ。かなり本格的な舞台作りを感じた。



演劇



一畑薬師でのユネスコ大会(昭和29年)

3階の先輩写真部員の屋根上での分も不思議な一枚です。今なら退学か、出席停止の処分ものですね。

写真クラブは、山形先生(化学)が顧問で、和室で年1回先生を中心に記念写真を撮ったり、理科室奥の暗室で自分の写した作品を引き伸ばしたり、液の調合も自分で作ったりするのが楽しみだった。



三角屋根

原料の足りない時には、天神町の太田度量衡店で「写真部のツケ」で買ったりしたものだ。



窓鈴なり

無線クラブに親友の木地君（現・寺本君）が居たので、時々3階の踊り場上に部室があって写真にあるように1～3年までの無線部員が集まっていた。

英研では1年先輩の武田さんが部長で居て、自由な題で一人ずつ英語で発表したり、島根大学から外人教師のアロンシュタイン氏が来られたりすると、通訳したりで、その実力にびっくりしたものだ。

その後、武田先輩は交通公社（現・JTB）に勤められ、海外勤務が多かったと聞く。

そんな、こんなの松江高校クラブ部員の恥じをこゝにサラシテ終わりとします。

編集委員の方々、写真を大きくしたり小さくしたりで大変でしょうが、お任せしますので、よろしくお願ひします。

## 『平家物語の平敦盛と平重衡』－その遺跡を尋ね歩いて－

坂本隆男(高9・昭33卒)

この新春よりNHKの新しい大河ドラマが始まったが、二年前は“平清盛”のタイトルであった。これは有名な平家物語の一部と重複しており、平家物語は清盛が天下を制してその権力を絶大にして栄えたピーク時より始められている。この平家一族の大スペクタクルには、その時代背景が浮かび上がる中で個性が強く印象に残る傑出した人物が登場して活躍している。今でも残されている彼らの史跡を辿って人物像を明らかにして、平家末期の彼らに遠く思いを馳せたい。

史跡の多い関西に住んでいる者にとっては、思いつくと直ぐにその地を訪れることができる地の利があり、その恵まれた環境はありがたいことである。今回はその内の二人、平敦盛と平重衡との従兄弟に焦点を合わせて、彼らが今に残している足跡を尋ねて当時を偲ぶこととしたい。



敦盛塚と著者

平敦盛の墓である“敦盛墓”は山陽電鉄・須磨浦公園駅に近い国道2号線の脇にある。そこには堂々とした巨大な五輪石塔が祀られており、新鮮な菊と白百合の生花が手向けられていた。その塚の傍らには江戸時代にも営まれていたと言われる“敦盛そば店”が今でも営業していた。当時は、「そばはあつもり(厚い盛り)、値段は敦盛の御歳十六文」などという売り文句であったという。小生が訪れた午前、女主人が暖簾を掛けて昼の開店の準備を始めたところであった。

この地帯には俳人松尾芭蕉を始めとして多くの敦盛ファンが足を運んでいる。ここでは公園として鉢伏山が海岸に岬状に迫り出していて、海との狭い平地にJRと山陽電鉄の二本の鉄道と国道が沿うように並んで通っている。その道は今では国道2号線であるが、当時は西国街道と呼ばれていた。わずかに西側に摂津と播磨の国の境界であった幅狭い“堺(境)川”があり、芭蕉はここに佇んでこう詠んだ。「蝸牛角ふりわけよ須磨明石」。両国の国境は蝸牛(かたつむり)の角の間隔しかないという彼の諧謔風味が冴え渡っている。

敦盛塚よりしばらく公園内を東方へ歩くと、西暦1184年に源義経による“鴨越の坂落(ひよどりごえのさかおとし)”で勝敗が決したという“一の谷合戦”の戦地としてのランドマークとなる“戦の浜碑”が無造作に建てられている。

この浜での戦で源氏武将の熊谷次郎直実は、華麗な装束で着飾った馬鞍に跨って海に乗り入れようとした平家の若武者を見つけた。この姿を平家物語ではこのように描写している。「練貫に鶴縫うたる直垂に、萌葱の匂の鎧着て、鍬形討つたる甲の緒をしめ、黄金作の太刀を帯き、二十四さいたる切斑の矢負ひ、滋藤の弓持ち、連銭蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍おいて、乗つたる者一騎」と。まるで贅を尽くして着飾った若武者人形の出で立ちである。

直実は馬上より大音声を発して、洋上にある平家軍の船団に逃げ込もうとしていた若武者を呼び戻し、一騎打ちとなった。そこは豪の者といわれた直実のこと、すぐに若武者を

馬から落し組み敷いて首を取ろうとした。その際に覗き見た顔はまだ少年の面影を宿しており、自分の息子小次郎直家と変わらない年嵩である。名を尋ねたところ、「名のらずとも誰かが見ればわかる。早く首を取られよ。」との応答。何という若者の健気な武士魂なのであろうか。殺すも不憫と感じて逃がそうとも思ったが背後より味方の手勢が迫るのに気付いて、同じことならば自分が手にかけて後世は供養することを約して頸を掻き切った。

後に源氏軍大将の義経の面前での首実検で、この若者は清盛の弟である平経盛の三男である平敦盛とすぐに判明した。敦盛は時に御歳16才であり、この戦は彼の初陣であった。また彼は笛の名手としても知れ渡っており、所持していた笛は祖父の忠盛が笛名人であったために後鳥羽上皇から賜わったものであり、“青葉の笛”として伝えられていたものであった。

この合戦では源氏軍が後白河法皇の命によって皇位継承として代々傳承されている三種の神器を奪還することが目的であったが、源氏軍は戦に勝利したものの目的は達成できなかった。

敦盛を打ち取った熊谷直実については後日談がある。この一件で人の世の無常観を深く感じた直実は、すぐに家督を嫡子直家に譲り、出家して仏門に帰依した。晩年には法然上人の弟子となり、蓮生法師と名のって余生を過ごしたと言われている。敦盛を厚く供養し続けたことは言うまでもない。

この話に対して私は若干の疑念を抱いている。実戦経験の豊かな直実は数多の殺戮を行ってきたはずである。それ故に敦盛一人を殺めたというだけの動機で出家したことは、何と理由付けされることなのであろうか。

須磨寺(福祥寺)を訪れたところ、“源平の庭”に馬上の敦盛と直実が波打ち際で対峙している銅像が設置されている。また“敦盛首塚”や“敦盛首洗い池”が遺跡として残されており、義経による首実検の時に腰掛けたと言われる“義経腰掛け松”という巨大な松の古木が保存されている。さらに宝物館には蓮生法師が刻んだといわれる敦盛の彫像の他に、敦盛の遺品として“青葉の笛”や鎧兜、小束、刀の鏢、矢筈なども展示されている。これらの真偽のほどは疑問に思えてならないが、今となっては確認の仕方がないことである。しかしながら義経の首実検の後で直実は、許しを得て遺品を敦盛の父経盛へ送ったという伝えが残されているという。

須磨寺では旧暦2月7日に平敦盛・源平戦士追悼法要が綿々と続けられているという。この寺を尋ねた芭蕉は、「須磨寺やふかぬ笛きく木下闇」と詠んだ。敦盛の伝え話は芭蕉の心の琴線に触れて、惜愛の情を強く抱いたところなのであろう。私はすでに秋日の傾きかけた夕暮にこの寺に一人佇めば、今でも何処からか笛の音色が颯々と聞こえてくるように思えてならなかった。

平家物語の“一の谷合戦”に突如登場して無官な身上で何の活躍は無いが、後世まで名を残した有名な悲劇の若き花形役者、それが敦盛である。

この寺の最寄りの山陽電鉄・須磨寺前の改札口を出たところに、“平重衡とらわれの松跡”と記された石碑が小さい祠の傍らにある。他の広告看板と混然としており、ややもすると見

落とされそうな風情である。平重衡は清盛の五男という毛並み良い貴公子で、それまでの幾多の戦で武勲をたてた実績を持つ勇猛果敢な武将であった。

“一の谷合戦”では平氏軍の副大将格として参戦していたが、敗戦での退却時に馬を射られて囚われの身となった。そしてこの地にあった松の木の下に引き連れられて来た時のこと、地元の民が憐れんで名産であった地産の濁り酒を献上した。戦に敗れて心身とも疲労困憊していた彼は大変喜んで飲み干し、このように歌った。「ささほろや波ここもとを打ちすぎて須磨で飲むこそ濁り酒なれ」。合戦で喉の渴きを癒やすことがなく渴ききった喉から、その美味さは敗戦の虚脱感に満ちた全身に沁み渡り、格別の味であったことだろう。

暮れやすい秋の陽は落ちて冷え始めてきており、私は地元の須磨商店街にある居酒屋の暖簾をくぐった。そこで濁り酒ならぬ熱燗を啜って身体を温めながら、今風に言えば平氏のイケメン公達を偲んだ。

平重衡といえば或る思い出を持っているが、京都の伏見を歩いている時であった。日野にある大きな団地の中に拓けた緑濃き公園があり、そこに鎮座した重衡の大きな墓石に遭遇した。何故に彼の墓がここにあるのか当時は理解できなかったという記憶である。

調べてみると重衡は“一の谷合戦”で捕虜となり、鎌倉幕府へ護送されて源頼朝に引見させられている。重衡は頼朝に対して、「囚人の身となったからにはあれこれ言うことはない。弓矢に携わる者が敵の捕虜になることは恥ではない。早く斬罪にされよ。」と、堂々と主張したという。頼朝を始めとして東国の鎌倉武士の面々は、武士らしい毅然とした態度と都で洗練された優雅で華麗な物腰の雅さを備えた気品高き若公達に感嘆させられた。頼朝は彼を慰安するために饗宴を設けたという厚遇を与えたほどであった。武骨者揃いの関東武士にとってはカルチャーショックであったのであろう。このとき重衡は御歳30歳の男盛りであった。

“一の谷合戦”の四年前にまだ平清盛が存命の時であったが、重衡が大将となり平氏と対立した南都を攻めたことがあった。南都とは奈良のことであり、この時に東大寺や興福寺の堂塔伽藍は大仏殿を含めて一字残らず灰塵と帰している。この事件で重衡は仏敵と呼ばれ、後世に平氏の最大の悪行と言われていた。この史実からして重衡は宗教的には非難されるべき人物ではあったが、明日の命とも知れぬ乱世を生き抜く武士の所業として、やむを得ない側面があったのではないだろうか。

恨みを抱く南都衆徒の要求により重衡の身柄は引き渡されて、鎌倉より奈良へ向けて護送されることとなった。その途中、奈良街道沿いの京都伏見の日野を通ったとき、重衡はせめて一目妻に会いたいと願って許可された。妻の藤原輔子は日野の出身であり、当時はその地に身を寄せていた。早速妻が駆けつけて涙ながらの今生の別れを惜しんだが、こんな場面でも重衡の厚遇ぶりが伺われる。その後重衡は木津川畔で斬首されて、近くの安福寺に葬られた。彼の遺体か遺品の一部であろうか、輔子が譲り受けて祀ったのが日野の墓なのであろう。

敦盛と重衡。武士魂を持って気骨があり、気品あふれる華麗な平家の若き従兄弟同志のエリート公達たち。時代の波に翻弄されて、儂くも若き命を“一の谷合戦”で露と消えていった。私は彼等より遥かに長い命を永らえている今、彼らの伝え残されている逸話があまりに哀れで美しく感じられ、胸底の深みから惜愛の情がこみ上げてくる。これこそが男のロマンである。

(完)

## 『ライセンス契約書と共に』

山岡裕明(高9・昭33卒)



「特許部(技術契約課)勤務」という辞令を受け取ったのは昭和47年(1972年)3月のことであった。大阪に本社のある金属系メーカーに勤務して7年、それまで、主に事業部での営業の現場にいた自分にとっては、この新しい仕事が何をするのかについて詳しくはなかった。

当時我が国業界では、アメリカ、ヨーロッパなどの先進国から先進技術を導入することが盛んであった。「技術契約課」とはこの導入に際し、技術の使用を権利者が許諾(license)するその契約書の検討(チェック)をする部署であった。会社上層部による契約交渉は常時何件かが同時進行しており、相手方から提案のあったA4・20ページ位の英文の契約書案が随時持ち込まれ、それを当社にとって問題点が含まれていないかどうか、もっと有利な条件に書き替えることはできないか等を検討し、修正契約書案を作るのが仕事であった。

英語の読み書きには多少自信があったので翻訳をしたり、工業所有権については、隣の特許課に相談するなど進めたが、問題は英文契約書各条項の配置と、特殊な条項の知識、そして契約書全体中に埋め込まれている相手方の事業戦略は何か、その含まれた意味を解説することにあった。

契約書の知識を得るために、東京まで何回も講習会の受講に出掛けるはもとより、業界の研修会等にも参加し、更には、自らも自主的に関連知識を得なければ、到底相手方と対等に修正交渉は出来ないことを悟らされた。何しろ相手方は、弁護士でこの筋30年というベテランが起案した契約書案である。何が隠されているのかわからない。それを解説・修正するのだから並大抵ではない。毎日夜の11時ごろまで、会社で英文とにらめっこをして、最終の急行電車に乗り遅れないように、難波の路上を走ったものであった。

オイルショックを比較的うまく乗り切った我国業界では、次第に、技術導入から技術輸出へとトーンが変化してきた。つまり、先進国の技術を買うのと同時に、我が国の技術を先進国や、特にアジアNIES(中進国)へ売る(輸出する)という動きも行われ出した。「技術契約課」には、技術導入契約と同時に、各事業部からの技術輸出契約の相談が増えてきた。

買う場合の技術導入契約書は、技術を売る立場の相手方が起案して買う立場の当社に提案してくるのであるから、我々はそれをチェックすればよかった。ところが、我が国側から技術を売る(輸出する)となると、当社の方で英文技術輸出契約書を起案(drafting)しなければならないのである。そのためには、そもそも契約書とは何か、どういう精神で出来ており、いかなる技法が必要であるかなど法律的な知見が必要となる。経済学部出身の自分には、業

界研修会の知識では不十分であり、紹介のあった大阪市立大学・夜間の法律講座を2年間聴講しましたが、十分とは思えず、とうとう、試験を受けて法学部2部(夜間部)に学士入学をすることになった。

2年間で卒業できるのだが、早く卒業してしまうのが惜しくなって、留年を続けて、都合6年間在籍し法学士も頂いた。お蔭で、技術輸出契約書の起案も比較的楽になり、事業部の要望を取り入れて、何件か技術輸出のDraftingをこなし得た。

某鉄鋼会社のブラジルでの製鉄所建設にかかわるエンジニアリング契約の一部として起案した技術輸出契約書原案を、鉄鋼会社からほめて頂いたという、事業部・営業マンからの連絡は大変うれしかった。

この頃は、朝7時には会社に入り、新聞3紙に目を通してから、仕事の準備を始め、夜の11時まで会社で頑張ったものであった。家族には多大な迷惑をかけたが、この頃が結構充実していたように思う。約12年後、再び辞令が出て東京勤務となり、この部署からは離れることとなった。

以上

## 『国立民族学博物館と実家』

佐和田 丸(高10・昭34卒)



中国地方のへそともいうべき、高原に、私の故郷、旧頓原町がある。国立公園三瓶山と、島根県民の森・大万木山、大国の命ゆかりの琴引山に抱かれた町といえばわかりやすいかもしれない。平成17年(2005)年1月1日、となりの旧赤来町と合併して、飯南町(飯石郡の南の意)となった。頓の字は珍しく、時おり、道頓堀界限を歩くと、なんとなく親しみをおぼえる。余談になるが、長らく出身者の会、関西頓原会の会長をつとめ、町長から表彰をうける栄に浴した。

その頓原で、親父は、しょうゆ、みそ、アミノ酸の製造販売を営んでいた。販路は、雲南、広島県備北地方であった。今と違い、当時、調味料といえば、しょうゆ、みそぐらいで、面白いように儲かったらしい。

文字通り、手前味噌になって口幅ったいが、あの当時、アミノ酸の旨み、効能に気付き、その製造に手を染めていたことは、注目に値する。20世紀はビタミンの時代、21世紀はアミノ酸の時代とは、とある調味料最大手のA社元社長の受け売りだが、今、盛んにアミノ酸の効用がマスコミでとりあげられている。数十年前に、高度の専門教育を受けたわけでもなく、先端情報を入手しがたい山間の地で、アミノ酸の効用に着目し、大半独学で、少し大げさになるが、研究・製造していたことは、父にもすこしは偉いところがあったかなと、認識を新たにし、ちよっぴり尊敬の念を禁じえないでいる。

父が亡きあとは、兄が継いでいたが、ある日、醤油瓶をつめた箱をかかえあげようとして、へたへたとそのまま座り込んで意識を失ってしまった。あわてて医者を呼び、手当てをしたが、再び蘇ることはなかった。心不全であった。そのあと、兄弟だれも継ぐものがなく、結局廃業することになった。

しょうゆ、みそ等醸造用具は、多種多様、数多くあり、廃棄処分するにはもったいない、それなりの文化遺産である。なんとか民俗資料として保存できないか、と考えた。

できれば、地元へと、町へ保存をお願いした。町は、施設・費用の面で無理なので、県へお願いしてみると代わりに頼んでくれた。県からは、県立の民俗資料館がなく、担当の学芸員もいないことを理由によい回答をもらえなかった。

やむなく、小生の住んでいる大阪にある国立民族学博物館(略称民博、平成16年4月、法人化により、大学共同利用機関法人、人間文化研究機構が正式名称となった。)にお伺いしたところ、たまたま資料がなかったのか、ぜひ、当館で研究・展示用として一式一括保存させてほしい、との意想外の嬉しいご返事をいただいた。怪我の功名である。なんでもダメモトでやってみるものだ。

受け入れ時、国際館の民博よりも、日本専門館の日本歴史民俗博物館(千葉県佐原市)に入れたほうが、全館日本ゾーンでスペースが広く、早く展示されるだろう、ということで逡巡したが、島根から地理的に近い、兄弟も関西に多いことなどもあって、ここに入れることになった。昭和62年(1987)1月25日のことである。大きな声で言えないが、町や県に断ら

## 自由投稿『国立民族学博物館と実家』

れてよかったとは、後日の兄弟の述懐である。一括一式保存という話にはならなかっただろう。話がそれるが、民俗関係三番手として、アジア専門館の九州国立博物館が福岡県太宰府に、2005年秋に開館した。

機会があれば、兄弟さんに收藏状態をお見せしたいと、民博から申し出を受けていた。

2015年秋、身内の結婚式で兄弟が大阪に集まる機会があり、いいチャンスと見学させてもらった。

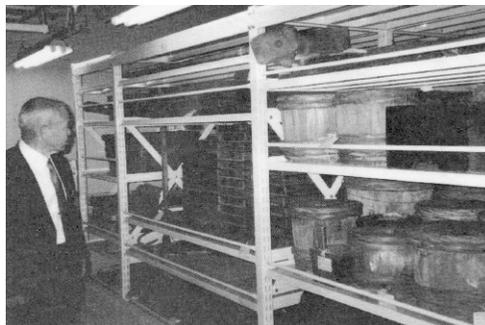
まだ、展示前ということで、すべて收藏庫に分散して保存されていた。同館の拡張は、地上は本館に加えて、新館のみであるが、收藏品が年々増加しているのであろう。一階の收藏庫が地下へ地下へと増築されているのには驚いた。3、4階のビルがそのまますっぽりはいりそうな巨大な收藏庫が、地下4、5階と拡張されているのである。今後も拡張されつづけるであろう。地下利用ならだれからも苦情をいわれなくてすむ。收藏庫だけでなく、展示場も地下にどんどん拡張していったよいのではないか。そういえば、安藤忠雄さん設計の「地中博物館」が香川・直島に開館して話題になった。

館員の案内で、私ども兄弟は、久しぶりに懐かしい用具に再会した。実に、16年ぶりの再会である。展示に備えて、きれいに塩抜きされ保存されているのには、感動的で感謝の言葉以外にない。ことに、しょうゆの仕込みで、赤茶けていた2個の20石樽(直径2m、高さ2.2m)はすっかり色白となっていたのには驚いた。まるで、出雲そばが信州そばに華麗に変身したかのようなのである。この塩抜きは、奈良市の元興寺(がんごうじ)文化財研究所に依頼してもらったとは、館員の説明である。後日、正倉院展を家内と観に行ったとき、ついでに立ち寄り、お礼参りをしてきた。なお、同所は、全国の文化財修理・保存を引き受ける最大級の施設とのことである。

思えば、仕込み蔵の端まで、ころで移動し、屋根に直径約3mの穴をあけ、クレーン車で吊り上げて、トラックにのせここへ運んできた。兄弟は、樽に繰り返しさわり、早速、これをバックに記念写真をとった。また、工場に付着する麴室の移転は、半ば建物自体を壊しながら大規模な作業になった。

同館では、いずれは、これらの用具を並べ、日本人になじみの深い、しょうゆ・みそのできるまでのコーナーをつくり、広く内外のひとびとの閲覧に供したいとの趣である。うれしくありがたいことである。早期に実現するのを祈るや切。

それにしても、生家の用具が、兄弟のあとを追って、大阪にくるとは夢想だにできなかった。20石樽2本ほか、大小500点余、日通松江支店の6トントラック2台が、頓原・吹田を2往復した。今、枚方に住んでいるが、実家の用具が、指呼の間にある



寄贈收藏品を見る長兄丕土司(民博にて)



寄贈した20石樽2本の前で…右から長兄丕土司(松中68期卒)、筆者、義弟、妹(民博にて)

のは、なんとなく心強くうれしいことである。

広島県三次市小田幸町に広島県立歴史民俗資料館がある。広島県立であるが、中国地方一帯の民俗資料を収集している。その心意気やよし。民博が収集したあとでよろしいから、収集させてもらえないか、との申し出があった。頓原から車で40分と近く、地元の方にもみてもらえる機会もあるかもしれない。私どもは喜んで応じた。ここでもかなりの量が保存されることになった。このお礼の意味もあり、近畿島根県人会に加えて、近畿広島県人会にも入会させて貰っている。島根県には、県立の民俗資料館はなく、小規模な市町村立がいくつかあるのみである。残念なことである。

その他、出身地の飯南町立民俗資料館、キッコーマン醤油資料館(千葉県野田市)、ヒガシマルうすくち醤油資料館(兵庫県竜野市)、にもそれぞれ記念として、数点づつおさめさせていただき、各館からそれだけ充実しますと感謝の言葉をいただいた。

在職中、出張で上京したとき、キッコーマン資料館をたずねた。寄贈品の一部がすでに展示されていた。よろこびがこみあがるのを覚えた。展示品をバックに記念写真をとらせていただいた。館長の話では、同じ用具でも東日本と西日本では微妙に違い、当館は場所柄、西日本の資料がすくないので、西日本からの資料寄贈はたいそうありがたいと感謝された。鉄筋の醤油工場の一角に、場違いな和風の建物があった。あれは何ですか、とたずねると、皇室向けの専用醤油工場とのものであった。例の皇室御用達である。宮内庁職員も含むかどうかはききそびれた。



寄贈した展示品の前で館長と筆者の記念写真  
(キッコーマン醤油資料館)

平成25年春、家内と万博公園へ花見にでかけた。ついでにと、近くの民博へ寄ってみた。東アジア(日本の文化)ゾーンに、寄贈品の一部が展示されていた。ここでも展示がはじまつたらしい。喜ばしいことである。

飯南町は、松江道の開通で松江・飯南・広島の直行バスがなくなり、兄弟の墓参に不便ということで、墓を頓原から、松江、大阪、京都(西大谷)等へ分骨移転した。親父らはそこで永久の眠りにについている。

みずから手塩にかけ、考案した、自分の分身ともいうべき醸造用具が、日本を代表する博物館や、しょうゆメーカーの資料館等で、展示・研究用として多くの人々の目にとまり、これからも永久に役立っていくことは、たいそう名誉なことであり、望外の幸せなことといってよい。親父らも近くにあるなじみの用具を懐かしみ、以って瞑すべしと思いながら眠っているのではなかろうか。

(注：本稿は、平成16年度版に寄稿したものに、新しい情報を加え、加筆補訂したものです)

## 『松江城とその絵』についての思い

村尾俊治(高11・昭35卒)



### 松江城と私

城を中心に松江市がある。子供の頃の松江城との係わりから何時しか城好きとなり、定年退職後に海外の城も含め少々お城の研究を始めた。

『人は城』という言葉がある。『城もまた人である』、歴代の殿様を中心にその土地の文化が発信されてきた。お茶会であり、その和菓子、そして茶懐石の出雲そば…などである。築城は歴史的に戦いのためから、政治のためへと変貌してきた。山城から平山城、そして平城である。松江城は平山城であると思う。

小学校時代の『ガキ大将』をやっていたころ、竹の棒を腰にさして、チャンバラごっこをよくした松江城である。今思うと恐ろしくなるが、高い石垣を登ったものである。松江城の石垣は古い方式の野面(のづら)積みであり、あるがままの石を加工せずに隙間に栗石といわれる小さな石を上手く使って積んでゆく。私はこの積み方が好きである。この自然な粗い石積みと千鳥(城)の調和は実に味わい深い。

### 絵と私

雑賀小学校時代は絵ばかり画いていたように思う。放課後に校庭で一人絵を画いている自分の姿が思い浮かぶ。何のためにかは分からないが、多分何かのコンクールへ出展する為、先生に言われてやったのだろう。

絵ばかりの生活の反動から、四中時代は絵から離れた。しかし、コンクールになるとメンバーに駆り出されていた。

高校時代は再び絵に回帰しクラブに所属した。放課後にメンバー(皆、上手かった)数人で錦織先生(故人)の指導のもと、毎日のように画いていた。

思い起こす事は(1)お前に大きい画用紙を渡すのは惜しくないと先生が言っていた。(2)教員室の廊下の前には、画いた絵がいつも展示されていた。(3)校舎の南側沿いに川があったが、この川に架かる橋に腰掛けて薄暗い中、絵を画いていた。

高校時代の私は絵画の道を進みたかった。

### 松江城を画く(72歳)

大学時代・社会人時代は絵とは無関係な道を歩み、退職後の60歳代は仕事の延長のような人生であった。

そして2011年7月17日に70歳の誕生日を迎えた。今後も同じような人生でよいのか？と問うてみた。変えよう！ではどのように…？

偶々、ある先輩からの刺激もあり、もっと世の中を細かく観察しようと思った。いつも漠然と見ているではないか！そのための目を養うには絵を画くことが良いのではと気がついた。そして、53年ぶりに水彩画を再開したのである。

私の絵を評して、同期の押田君はユトリロの絵に似ていると言ってくれた。この画家は超一流の画家であり、風景画が多い。構図が良い、几帳面に画く、上手く省く、そして、ご婦人をいれる。

私の絵はまだまだである。しかし、人物を入れることだけは除き、頑張りたい。

## 72歳の誕生日に展示会

72歳の誕生日に二人展(師匠と私)を大阪天満の古い土蔵の2階でやった。100作品完成記念の展示会である。多くの同窓生が来てくれ、会社・町内会の方々も含め95名の来場者があり、至福の時であった。

現在110作品を完成しているが、今はスローテンポで今まで以上に気持を込めて画く事している。その最近作として、松江城と武家屋敷風景の2作品を紹介したい。



松江城



武家屋敷風景

(村尾さんは、近畿双松会HPの会員作品ギャラリーメンバーです。HPで作品をご覧ください)

## 『近畿双松会に寄せる思い』

小泉勝是(高14・1年時山口高校へ転校)

私は「高14期」卒業(相当)ですが、2012年11月の近畿双松会総会にてデビューしましたほやほやのニューフェイス(?)です。

“相当”としたのは、昭和35年に「松江高校」に入学して間もなく、父親の転勤によって、一年生の一学期を在籍しただけで山口高校<山口県>に転校したためです。

以来毎年、盆正月に故郷の松江に帰省するものの今日まで高校はおろか小学校、中学校の仲間とのお付き合いは疎遠になってしまいました。

「近畿双松会」と巡り合ったのは思いがけないきっかけからです。

私が所属する水彩画同好会は、2012年9月30日に大阪市中央公会堂で恒例の展覧会を開催しました。この展覧会に出品した私の絵を、来場された高20期の山寄麻里子さんがご覧になり、私が松江高校、松江一中に関わりあると知るや「近畿双松会」へ入会してはと熱心に勧めて下さいました。

松高には僅かな期間だけの在籍なので入会は有り得ないだろうと思っていたら、情報が松本事務局長にバトンタッチされ、松本さんから「十分(?)な入会資格をお持ちです」と早々にお墨付きを頂いてしまいました。

入会すぐに案内を貰った総会(2012年/中央電気倶楽部)へは、松本さんや山寄さん以外には面識もなく、欠席にすれば良かったと思いながらの参加でした。指定された14期のテーブルに座ったものの周りは見慣れない方々ばかり。最初は何処かで見たような方だと思いつつも気付きませんでした。松本さんのお気遣いもあり、話をしている内に次第に記憶が甦ってきた方が、何と同期の懐かしい加藤巡一さん。まさか関西に在住されているなんて思いもしませんでした。

初の総会はいろいろと面食らっているだけで閉会となりましたが、最後に皆で斉唱した校歌「山脈浮かびて・・・」は胸に迫るものがありました。最近は何事もないのに、ほぼ半世紀振りながら一番目の歌詞は譜面を見ずとも歌うことができたんです。当時歌い慣れた校歌がそのまま変わらないのは感無量でした。

「近畿双松会」への入会をきっかけに、2013年度は「文楽鑑賞」、「歴史ウォーキング」、「55周年記念総会」などの行事に、自分としても意外なほど積極的に参加し楽しませていただきました。これは松本事務局長やスタッフの皆様の並々ならぬご尽力があってこそと感謝をし

ております。

昨年末には私の拙い作品のいくつかを、押田会長さんのお手を煩わし、「近畿双松会」のホームページに掲載をしていただきました。恥ずかしながら加えてお礼を申し上げます。

シニアとなった現在、「近畿双松会」を通じて故郷とのご縁が復活し、会員の皆様との新たなお付き合いの機会を得たことを大変喜んでいきます。微力ながら私も多少なりとも「近畿双松会」や故郷へのお役に立てることがあればと考えているところです。



松江市・大橋川 “矢田の渡し” 付近

(小泉さんは、近畿双松会HPの会員作品ギャラリーメンバーです。HPで作品をご覧ください)

## 『松江の春は、、、』

池田喜美代(高19・昭43卒)

松江の春は、月遅れの雛まつりと共にやってきた。小学生の私は、弟妹と毎日のように家の裏のたんぼにれんげを摘みに行き、一番下の雛壇に置いた。

一面に広がるピンクのじゅうたん。小川を跳びっこしたり、れんげの上に寝そべったり。見上げるといつも青い空があった。川のほとりには山吹の黄色い花、川向こうの麦の穂の緑から、ひばりが鋭く鳴いて垂直に上下する。私たちは競って白いれんげの花を見つけては歓声をあげた。今でも色鮮やかに思い出され、胸を熱くする。

城山の一角にあった県立図書館。木立の間、夏の蝉しぐれをくぐって足を踏み入れると、一瞬、時間が止まったかの様な静寂。歩を進めるたびに木の床のきしむ音も憚られた。文学少女を気取った中学生の私は、いつも足早に図書館に向かう道が好きだった。

放課後の考古学部の部室、秋の夕暮れ、高校生の私は、いつも暗くなるまで友人と話し込んだ。何を話したかはとうに忘れてたが、とにかく部室に集まっては、皆でわいわいとだべった。荒島での遺跡発掘の手伝い、出雲市への古墳めぐりや川津での方墳の測量など、毎日曜日に理由をつけて出かけるので、母はいつも少し不機嫌になった。また、学園祭の展示で、稲わらをもって皆で運び、登呂遺跡を模して造ったりもしたが、部室で過ごしたことの方がいつも思い出される。

決して裕福ではなかったが、家族や友人、町やなにより自然が心豊かに育ててくれた。

今、都会の喧騒の中で生活し、松江で過ごした2倍以上の時が経った。帰郷のつど、松江の変貌ぶりに目を見張ったことも、ずいぶん前の出来事になりつつある。あの、れんげ畑も県立図書館も西川津の学び舎も今は無い。しかし私の心の中にはいつもある。ふとした時に広がっていく原風景、ふるさと。

この冬 お正月に、家族11人全員が我が家に集まった。息子たちにはここがふるさとだ。孫たちも、すぐにれんげを取り合いした私の年齢になる。忙しさに翻弄されながら、ふと、思った。彼、彼女たちは、何を心に留めていくのだろうか。ただ、心豊かに成長してほしいと切に願っている。

## 『私の歩んできた道』 — 「私は合唱歌手!？」

三好資子(高20・昭44卒)

小さい頃から歌うことが大好きな女の子でした。昔、そう、半世紀以上も昔、NHK主催の子供ののど自慢大会があったのをご存じの方もいることと思います。のど自慢大会といっても、今のように流行歌を歌ったりするのではなく、唱歌や童謡などを歌うものでした。定かではないのですが、「声くらべ、のどくらべ、こども音楽会」というような名称だった気がします。小学校低学年の時と高学年の時、それぞれ1回ずつ出場し、2回とも合格の鐘を鳴らしたのを覚えています。北堀小学校では、4年生から学校の合唱団に入れてもらい、コンクールなどにも出ていました。でもそれ以後は、中学、高校、大学、そして社会に出ても、合唱とは全く無縁な生活を送っていました。

そんな私が、合唱の面白さ・楽しさに再び目覚めたのは37歳の時でした。友人に誘われて始めたママさんコーラス。引っ越したこともあって、今はその合唱団とは違うのですが、コーラス歴は26年にもなります。しかもここ10年は、目指すものが異なる2つの団に籍を置き、合唱コンクールに出場したり、コンサートを開催したりと、コーラス三昧の日々を送っています。練習を録音したICレコーダーを聴いたり、暗譜したり、起きている時間の3分の1はコーラスのために費やしていると言っても過言ではないでしょう。

合唱を続けている限り、いつまでも若々しく、ボケることもなく、長生きできそうな気がしています。80歳のおばあさんになっても、合唱歌手として、どこかの合唱団できっと歌い続けていることでしょう。

## 『55周年総会懇親会に参加して』 — 「94歳より劣りショック！」

浜見良樹(高20・昭44卒)

昨年の7月子会社に転じ某社に挨拶に伺ったところ、北高3年時に同じクラスだった近畿双松会副会長の渡辺氏がその会社にいることが判明。後日、20数年振りに杯を交わし、55周年記念総会への参加を勧められた。

開催前、渡辺氏より「私の小学生時と高3時に同じクラスだった某女性が私の名前を聞いて懐かしがっていた」との連絡を受けるも、私の記憶からは彼女の顔はもとより名前すら抜けていて不安と期待を胸に初参加となった。

当日、ご対面となるも確かにどこかで会ったような気もするが、「わあ！久しぶり」と言えるような記憶も蘇らないまま話をするようになった。私の父は公務員で彼女のお父さんは警察官だったということでお互いに転校を経験。私は小学5年の二学期に隠岐・西郷から浜田に転校。彼女はその時同じクラスに居て、中学1年の6月に松江に転校したとのこと。

「浜田では家も近所で一緒に卓球をしたり、海水浴にも行った」と言われるも本当に思い出せない。以下若干かみ合わない会話の一部「私、学級委員をして活発だったけど…」「同級生で誰を覚えている？」「M君とか」「M君な、お父さんが中電に勤めてた」「背の高かったF君は？」「私覚えてない」「担任は山藤先生だったよな。俺は今でも年賀状のやりとりをするけど」「そう。書道家で読みにくい字書いてた」「二中で担任は誰？」「一年の6月で転校したから思い出せない」「お互いの妹同士仲が良かったから妹さんに聞いてみて。私の妹の名前は潤子」「高3年時には話をしたことがあった？」「私、その頃思春期で恥ずかしがり屋だったから男の人と話をしなかった」「……………」

結局、鮮明に記憶が蘇ることなく首をかしげながらの散会。早速松江に電話。まず妹「潤子ちゃん覚えてるよ」次に94歳になる母親「Kさん？知ってるよ。確か坂の上の方に家があって、お父さん警察に勤めてたんじゃないかな」。ピンゴ！ガ〜ン。俺の記憶力は94歳よりも劣るのか…（涙）

当時可愛かったであろう（失礼、今もです）Kさんを忘れるなんて、人間の記憶なんて当てにならないな、と投げやり気味の小生。特定の人やある時期の記憶がすっかり抜け落ちることがあるのか、脳科学者にでも聞いてみたい心境。この場を借りてK女史にお詫びする次第である。でも楽しいひと時を過ごさせていただいて感謝。

## 「運命の許す限りに 美しい花を咲かせば 私満足」

山嵯麻里子(高20・昭44卒)

離婚なんて自分には無縁と思っていたのに、そのよもやの出来事が我が身に降りかかって3年経った。所謂熟年離婚である。でも、悩んでいた10年の歳月が嘘だったかのように、今は平和で穏やかな日々をおくっている。

私には1男2女の3人の子供がいる。長女の主人は長男で結婚して長岡京に在住、次女は一人っ子と結婚して西宮に在住。末っ子の長男は愛知県の大学に在籍して4月から関東で就職、「お母さん、僕は大阪には戻らないからね。」と宣うた。

全くの一人暮らしである。が、これが意外と心地良い。リタイアして思い切って家を全面リフォームしたが、これが又快適そのもの。女の一人暮らしで不安だったが、信頼出来る会社に頼んで待つこと4か月半。(その間、心優しき次女宅に居候)古ぼけた我が家が、新築同様に蘇った。リフォームとは家(物)を大事にすることだと改めて思い知った次第である。

そして、興味のあった英語を勉強すべくNPO法人の「大阪府高齢者大学校」に入学。週一回の授業やクラスミーティング、仲間との交流(飲み会?)が楽しく、この4月には3年目に入る。私の生活には、なくてはならないものになった。

もう一つ、私の生活に大きな位置を占めているのが「書道」。これは働きながら始めて19年。あまり練習しないので上達しないが、素晴らしい先生とそのお弟子さん達に囲まれて、少しでもうまくなりたいと続けている。

65歳まで働きたかったが、松江で一人暮らしをしている父が気になって61歳で仕事を辞めた。お蔭で、松江にはちよくちよく帰られるようになったし、働きながら子育てをしている娘達をサポートすることも出来るようになった。

人間、いつ死ぬかわからない。そのときに後悔しないよう、一日一日を丁寧に生きていきたいと思っている。そして、常に感謝の気持ちをもって、日々を過ごしていきたいと思っている。

最後に私の好きな言葉を。

『運命の許す限り』

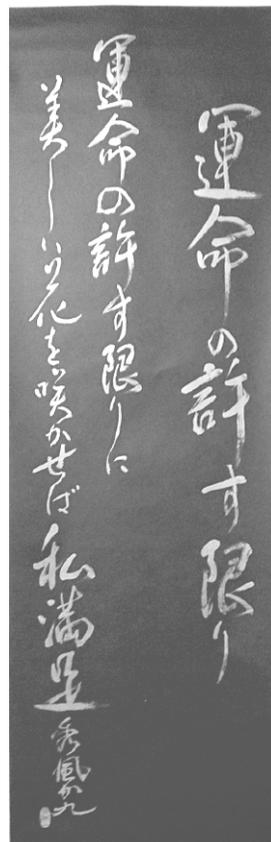
— 運命の許す限りに 美しい花を咲かせば 私満足 —

この詩は誰が書いたかわかりますか？

意外や意外！武者小路実篤です。

私はこの詩を縦150センチメートル、横50センチメートルの真っ赤な大きな紙に、金色で書きました(写真右)

格好いいですよ！



## 『近畿双松会への思い』

村田 貢(高22・昭46卒)

私が近畿双松会の総会に初めて出席したのは、松江北高校野球部が21世紀枠で55年ぶりに甲子園に出場した2002年だったと思います。

入会のきっかけは、応援団席のアルプススタンドを見上げた時「OBの人たちがこんなに沢山近畿地方にいて、後輩達を応援に来ている！」と母校とのつながりを実感したからです。

バスを連ねてやって来た松江在住の皆さんが懐かしい松江弁を聞かせてくれるので、近畿在住のOBからは思わずにんまり笑いがこぼれます。普段の生活から離れ、束の間のほっこり気分浸ったひとときでした。またユニフォーム姿の選手達の姿とエンジ色の応援団旗を見た時、高校時代の運動部の応援を思い出して万感胸に迫るものがありました。あらためて後輩達に「よく来てくれた、ありがとう！」という思いを持ったものです。

それからしばらくして、私は、大阪市内の近畿双松会事務局があるトーヨーコーポレーションを訪ねました。当時同じ西区に勤務先があった関係で、歩いて入会届と総会の出席届を持っていったのです。

その年の11月、初めて出席した総会は梅田の阪神百貨店内の会議室でした。開始前からドキドキです。「しまった！場違いだ、俺が来るところではない！」いきなり、社長さん達の集まりに若造の営業マンが放り込まれたような孤立感を感じました。当然です。高校の先輩と言う存在は2歳年上までしか知らないのですから・・・。そのうえ同期生など一人もいないものですから、その時は6期も先輩の席におまけのように同席させられました。こんな大先輩、見たことも会ったこともない！リラックスなど出来ようはずがありません。お酒が入るまでは・・・。

そうこうしているうちに、乾杯があり、宴会が始まって自己紹介があり、現・副会長兼事務局長の松本耕司さん達の16期のお席だということがわかりました。先輩っていいもんですね、僕らより先に社会で苦労されてますから後輩にすごく優しいのです。高校生時代に同じ時間を過ごしたわけではないのに可愛がってくれる。これが同窓の絆です。

大先輩達のお席に座らせていただきお酒を酌み交わし、何とか当初の落胆から脱出して気分よく終えた第一回目の総会参加でした。

そして約10年、毎年参加するも同期生はほぼ私一人か二人、という年月が過ぎました。そうこうするうちに私も還暦を迎え、一昨年の夏、記念の同窓会が松江であり気分一新したあたりから状況が変わってきました。その年の総会で、初めて同期の参加者が3人になったのです！それもあと二人は女子です。舞い上がりました…。そして女子が二人いると話の決まるのが早いのです！関西同期会発起人会の開催、設立総会の開催等の日程がその日のうち

に決まっていました。

この時の女子、鶴羽孝子さんと大浦綾子さんに東京会メンバーだった石橋善和君を加え、まず4人で発起人会を開きました。そして3月に総会、その後の女子会、納涼会、と続き12月の55周年総会には14名出席という規模になりました。今後、更にひとりでも多くのメンバーが参加してくれることを期待しています。

記憶というものは年月とともに薄れていきます。ひとりでいればほとんどのシーンがセピア色です。しかしひとり友が増えればあちこちに色彩の灯がともってきます。それが十何人にもなるともう話は尽きません。あれやこれやの記憶が甦り賑やかなものです。

最後に、同期生を含めこれから近畿双松会に参加される皆さんに私からひとこと申し上げたいことがあります。それは、あくまで私の個人的な思いですが…、確かに「同期会は楽しい」でももうひとつの意義、それは「先輩たちの姿」を見てほしいということです。そこには在学中には出会えなかった我々の先輩がいます、会えるのです。

基調講演で先輩の人生を知り、声を聴き、また長年にわたり近畿双松会を運営し発展に寄与してきた役員や会を支えてきた先輩方と杯を交わし語ろうではありませんか。それこそが松中、松高、北高へと引き継がれてきた我々の誇りなのですから。

## 『校歌・山脈浮かびて』

達山 暢(高29・昭53卒)

長女の大学の卒業式に参列した時のことですが、校歌斉唱の段になって卒業生の中からどよめきが起こりました。あとで長女に聞くと、入学式以来歌ったことも聴いたこともないからだとのこと。どうやら最近はどこかの大学でも、そんな状況のようです。

一方で私の通った関西学院大学は、学校職員が「うちは日本で一番」と笑うくらい、校歌をよく歌う学校で、私自身も体育会系でも応援団でもない軽音楽サークルに所属していましたが、コンパの締めは必ず全員で「空の翼」を歌ったものです。それはいまでも、どこのサークルでも変わらないようで、各地の同窓会は必ず校歌斉唱で始まりますし、甲子園ボウルや出雲駅伝の応援では全員が声を枯らして歌います。

いくつになっても校歌を歌えば当時の出来事やキャンパスの景色が蘇り、素直な気持ちに戻ることができます。そして年齢を重ねることで、当時は気づかなかった、歌詞に込められたスクール・モットーの意味が理解できるようになってきました。いまではMastery for service (奉仕のための練達…関西学院のモットー)の実践が、まるで自分自身のミッションのように感じられます。

双松会とは関係のない話ばかり書きましたが、毎年近畿双松会に参加して「山脈浮かびて」を歌うたびに、同じことを感じています。

真理のひかりを求めゆくとき 知性の空は高く広く

希望も新た かくて常に自由の道を進むべし

世界の人たる誇りに立たん

在学中は深く意味を考えたこともありませんでしたが、歌うたびに気持ちがしゃんと改まるような素晴らしい歌詞ではありませんか。

おかげさまで、最近では「赤山健児の歌」まで歌えるようになりました…こちらの歌詞は難解過ぎますが。また三年前の総会には27期の宇田川妙さんをお迎えして、新しい解釈による「空の翼」の、素晴らしい演奏もありました。

同窓会は過去を懐かしむだけの場ではありません。当時は交流のなかった同窓と知りあい親交を深めることで、未来が始まる場所でもあります。近畿双松会におかれましては、役員の皆さんがそのための仕掛けを毎年一生懸命考えて、キメの細かいサポートを続けていらっしゃいます。だからこそ、私がどこにしようが、近畿双松会には参加したいと考えるのです。そして大声で「山脈浮かびて」を歌いたいと思うのです。

## 『演劇部の思い出』

廣瀬弘美(高29・昭53卒)



なつかしの部室”掘立小屋”前で

川津校舎の女子トイレと礼法室の間に、おそらく素人の手で建てられたと思われる掘立小屋が演劇部の部室でした。お世辞にもきれいとは言えない部室だったけれど、居心地がよくて、いつもそこにたむろしていたことを覚えています。友人の記憶によると、しょっちゅう学食のラーメンの丼が積まれていたらしいです。おそらくそれは二つ上の先輩の仕業だったと思います。なぜか部員よりも部外者の方が多くいて、みんなで歌い、語らい、そして恋もして、しっかりと青春を謳歌していました。

演劇部の活動は、学園祭と高文連での年二回の公演が主で、演目を決める際、部員数が少ないため配役の少ない台本を探すのに苦労しました。学園祭の公演は、高一までは県民会館の中ホールで行われましたが、ある時、U先生に悪事が見つかり「おまえやちゃ、ちゃんことす一ならもう県民会館は借りちゃらん、来年から学校の体育館でやれ」とお叱りをうけ、翌年は体育館での公演となりました。そのときの演目は「春雷」という受験をテーマにしたものでしたので評判はよかったと思います。また全校生徒の前で演じられたこともいい思い出です。私は受験に失敗した兄の妹役でした。ちなみにU先生に見つかった悪事は皆さんのご想像におまかせします。あれかあれですが…。



体育館での公演”春雷”

部室の話に戻りますが、校舎の見取り図にも載っていないあの小屋は、いつだれが建てたのだらうと今頃になって気になってきました。ほかの文化部の部室は校舎の中にあり、正統派だったのに、なぜ演劇部の部室だけとってつけたような場所にあったのでしょうか？

もし先輩方の中に、そのあたりの事情をご存知の方がいらっしゃいましたら、ぜひとも教えていただきたいところです。よろしくお願ひします。



## 『大阪市中央公会堂のこと』

宍道 弘志(高31・昭55卒)

昨年12月の55周年記念総会の会場となった大阪市中央公会堂について、もう10年以上前ですが、この建物の保存・再生に関わらせていただいたご縁がありますので、簡単にご紹介したいと思います。

この建物は当時北浜で株の仲買で財を成した岩本栄之助が、日本の将来の発展には大人数が集まれる施設が必要と、大阪市に寄付した100万円建てられたもので、大正2年(1913年)に着工され、大正7年(1918年)に完成しました。着工後に勃発した第一次世界大戦の影響を受けた相場の中で、岩本栄之助は株取引で失敗し、公会堂完成前の大正5年に自殺しています。これらの経緯は岩本栄之助の遺品と共に、公会堂地下1階の岩本記念室で紹介されています。

完成当時は大きな集会施設が他になかったこともあり、1階の大集会室は1年間で215回の利用があったそうです。第二次世界大戦では大阪市中心部も空襲で大きな被害を受けましたが、幸い公会堂は被災せず、戦後も占領軍の接收を受けずに、公会堂として役割を果たしてきました。

高度成長期を経て、新しいホールが幾つも建設されるようになると、公会堂は機能面で見劣りするようになり、そんな中で昭和47年(1972年)に公会堂を含む中之島東部地区の再開発構想がもちあがります。大地震に耐えられない公会堂も建替えられるところでしたが、これをきっかけに建築関係者や市民の間で保存運動が大きく盛り上がり、最終的には昭和63年(1988年)に保存が決定しました。その後、大阪で保存のための具体的な方針づくりが進められ、それが固まってから平成7年(1995年)に公会堂保存・再生事業の設計者を選ぶための公募型プロポーザルが実施されました。

わたくしが公会堂に関わるようになったのは、このプロポーザルで私たちの事務所(坂倉建築研究所)が特定されてからですが、設計作業に約2年、着工後は毎日現場に通って工事監理を行い、平成14年(2002年)秋の竣工後も翌年まで工事報告書のまとめをしましたので、約7年間公会堂の仕事をしたことになります。

保存・再生工事の目的は、この歴史的な建築物を保存すると同時に、集会施設としての機能を向上させることですが、その前に耐震性を確保する必要があります。公会堂は鉄骨で骨組みを造り、壁にレンガを積んだ建物で、大地震には耐えられないという診断結果が出ていました。

免震構法がこの問題を解決してくれたのですが、現在はかなり普及している免震も、その

頃は僅かな事例しかない構法でした。これは地盤と建物の間にゴムなどを入れて縁を切ることで、地盤を伝わる地震の震動を建物に伝えない構法です。耐震性を上げるにはもう一つ、建物自体を壁や筋違いのようなもので補強する方法もあり、こちらの方が一般的です。しかし、公会堂は内部がガラんとした集会施設で地震に弱いつくりのため、補強もたくさん必要となり、そうすると集会施設として非常に使いにくいものになります。そのため補強ではなく免震構法が採用されました。実際には免震化だけでは少し足りなかったため、目立たない場所で建物も補強していますが、普段分からない箇所での補強だけで済んだのは、免震化のおかげといえます。



双松会総会の会場となった3階の中集会室は、工事前は寄木の床がすり減って隙間ができ、壁や天井も薄汚れて、ペンキも所々剥げ落ちた状態でした。工事では床の寄木を張り替え、ペンキを塗り替え、カーテンを取替え、照明器具も取替え、……と目に見える部分の改修と同時に、空調設備や音響設備のような見えない所の改修も実施しています。工事によって中集会室は見違えるほど良い雰囲気になりましたが、実際には工事で形を変えた箇所はほとんどないので、それだけ元の空間が良かったということになります。



この中集会室の下には、これと同じ大きさの大集会室が1階～2階にあります。公会堂のメインの部屋なのですが、こちらの方は昭和初期の改修で部屋の形がかなり変わっており、改修工事で創建時の形に戻しました。蛍光灯に変えられていた照明も撤去して、当初のシャンデリアを復原しています。機会がありましたら、この部屋もぜひご覧いただきたいと思います。

(完)

## 「そうしょう」とのご縁ー

安達宏昭(高43・平4卒)

近畿双松会の設立55周年、おめでとうございます。私は「そうしょう」との不思議なご縁を感じる人生を歩んできました。これからも生涯にわたり、このご縁を大切にしていきたいと思っていますので、この場を借りて、ご紹介したいと思います。

さて、皆さんにとって「そうしょう」と言えば、もちろん「双松」を思い浮かべるとと思いますが、私にとっては「創晶」(商標登録済)です。私は大阪大学の研究で、結晶と出会い、その研究成果で2005年に大学発ベンチャーとして起業しました。社名は結晶を創るという造語を思いつき「株式会社創晶」にしました。正直、この瞬間は双松とリンクするとは全く考えていませんでしたが、新しい言葉であるにも関わらず、とてもフィットしたネーミングであると感じたのは、高校生の時から、双松という響きに慣れ親しんでいたことがあると思います。

実は、結晶の分野で「そうしょう」と言えば「双晶」が有名ですが、産業利用する立場からすれば悪いイメージの結晶です。そのため、創晶が良いイメージの「そうしょう」を作っていければと夢見ています。独自の革新的な結晶化技術により、これまで結晶作製が困難であったタンパク質や医薬候補化合物などを結晶化することで、創薬や生命科学研究をこれからも支援し、社会貢献できれば幸いです。

また、ビジネスや研究において異分野の方々との連携は大切です。その時、仲良くなれるかどうかは、コミュニケーション次第ですが、まずは目指すべき目標や成功体験などの良いイメージを共有し、行動することです。その合言葉が「そうしょう(そうしましょう)」で、これまで実践してきました。お互いの意見を話し合い、最後には「そうしょう」と言って実行することで、必ず何かが得られます。それを生かす努力を重ねることで、きっと最初に思い描いた良いイメージに近づいていくことでしょう。

同窓会組織も異分野の集まりです。お互いに仲良くなり、豊かな人生を過ごす一助とするには「そうしょう」の概念が役に立つと思います。「双松」を思い浮かべる共通の集まりですから、一緒に行動することも簡単にできるでしょう。新しい繋がりにより、同窓会が活性化していくと思います。

最後に、創晶が目指すべきことは「継営」(継続して経営する)です。ベンチャーと言えば、リスクが高いとか不安定であるとか、負のイメージが強いですが、長く続けることで正のイメージを増やしていきたいです。「双松」が長きにわたり愛され、受け継がれてきたように、「創晶」も発展していければと思います。

## 『知られざる偉大な先人の面影を尋ねて』

川端康成の恩師と楽山焼元祖 一茨木中学教師倉崎仁一郎について—

押田良樹(高11・昭35卒)

母校は今年で創立138年を数え、4万人を超える卒業生を世に送り出している。それだけに、各界で活躍し名を挙げた数多くの人物を輩出していることは、週刊エコノミスト誌「名門高校の校風と人脈11 松江北高校」(2012年9月18日号)に見るとおりである。そして、そこに名が挙がっていないが、そのほかにも立派な業績を上げた人たちが数多くおり、私は、おそらくは夢に終わるであろうが、いつの日かそれらの人々も加えた「私家版双松人名事典」を編んでみたいものとひそかに思い、書物・ネットなどで先輩の事績に触れるたびにメモを取っている。

以下大先輩に対して礼を欠くことになるが敬称略で記させていただきます。

昨年来、「サクラ読本」で有名な近代児童教育の先駆者井上赴(松江中29期・明治42年卒)の事績を安来市の加納美術館の特別展で詳しく見ることができた。また「収容所からきた遺書」(辺見じゅん:文春文庫)で故郷の土を踏むことなくシベリアの土となった山本幡男(松江中46期・大正15年卒)の感動的な生の記録に肅然とさせられ、また私の趣味の一つである野球記録の世界では神様と言われている山内以九士(松江中40期・大正9年卒)が公式記録員としては初めて野球の殿堂入りをしていることを知り、若い頃に知っていれば弟子入りしたものを、などと思ったりした。これらの先輩たちは上記雑誌に名が挙がっていないのだが、その存在は後世に語り継ぐべきものがあると思う。

そういった卒業生の中に最近また一人、今まで全く名を知らなかった偉大な先輩を知ることになった。その名は倉崎仁一郎(松江中7期・明治19年卒)である。

### ●探索は「福引」と「熊本からの電話」から始まった

それは昨年夏、まったく偶然なことから始まった。55周年を迎える近畿双松会の総会の特別イベントとして、郷土の特産品がもれなく当たる大福引大会を催すことになり、どのような品を選ぶか、相談の会を開いた日のことである。世話人の一人梅木隆志氏(高16期)の提案で、賞品の中に楽山焼の湯呑を入れることが決まった。私は焼き物については全く疎いので、いつも持ち歩いているi-PADで楽山焼はどのような歴史を持ち、今の陶工はどういう人なのかをその場で検索し調べてみた。そして、松江藩主の所望で萩から呼ばれた倉崎権兵衛という人が元祖であり、現在は弟子の系譜につながる長岡空郷氏が12代目を継いでいる



倉崎仁一郎

ことを知った。さらに郷土史資料として「楽山焼元祖倉崎権兵衛の子孫」という本があるのが目に留まり頭に入れた。商品選びが大体決まった後、別件として松本耕司事務局長(高16期)から次のような報告があった。

それは、先日近畿双松会の事務局があるトーヨーコーポレーション(大阪市西区)に熊本県の尚綱大学助教の宮崎尚子氏という方から照会の電話があったということである。内容は「自分は川端康成の研究をしている者だが、川端が茨木中学の生徒であった頃の恩師である倉崎仁一郎について知りたいことがある。倉崎は松江中学の出身であり同窓会に氏に関する資料等があればお知らせ願いたい」という趣旨だったようである。

「(楽山焼) 倉崎… (川端康成の恩師) 倉崎??」、いくら記憶力の減退に悩む年齢になったとは言え割と珍しい姓でもありほんの数分前に目にしたばかりである。

その一致に不思議な予感を覚え、たちまち私の生来もつ探偵的本能が刺激された。

その後倉崎仁一郎の調査にのめりこむこととなったが、その結果は紆余曲折があったもののやはり予感は当たっていた。

### ●若き日の文豪を魅了した大先輩

宮崎氏が倉崎仁一郎に関心を持ったのは次のような事情による。

大正6年1月、川端康成が大阪府立茨木中学(現在の茨木高校)五年生の時に、全校生徒の尊敬を集めていた担任で英語教師の倉崎仁一郎が脳溢血のため急死し、それを悼む五年生全員の発意によって一種の学生葬のような形で茨木の本願寺別院(茨木御坊)で盛大な葬儀が行われた。

その時のことを題材にした中学生川端康成の文章が大阪の雑誌「団欒」に「師の棺を肩に」として掲載されたことが広く知られていた。しかし、その雑誌の所在が不明であり、作品も川端康成全集に収録されていなかった。川端は後年同じ題材で「倉木先生の葬式」(キング昭和2年)、「師の棺を肩に」(東光少年昭和24年6月)の2作品を書いている。

(この2作品は川端康成全集第19巻新潮社1981年に収録されている)

宮崎氏は、過去幾多の研究者が関心を持ちながらも発見できなかったその作品が載った雑誌が愛知県のある古書店にあるのを見つけ出し、そのニュースは平成24年2月に「川端康成：初掲載の雑誌発見 旧制中時代の幻の文書」などの見出しで全国の各紙で大きく報じられたのである。

宮崎氏は川端をはじめ全校生徒の尊敬を集め、また川端の人格形成に大きな影響を与えたに違いない倉崎について関心を持った。倉崎の死後1年後に発行された久敬会(茨木中学同窓会)の会報「故倉崎仁一郎先生追悼號」により、倉崎が松江中学の出身であることを知り、ネットで存在を知った近畿双松会に上記の照会をされたというのが経緯である。

私も双松の大先輩にそのような人がいたことを初めて知り、川端康成研究者の宮崎氏に協

力するとともに、この双松先輩のことをぜひ会員に紹介したいと思い、調査活動に取り組んだ。

松本氏は母校に連絡をとって、なにか資料がないか調べてもらったが、残念ながら倉崎仁一郎に関する履歴書などは双松会の資料としては見つからず、「松江北高等学校百年史」の開校当初の記事の中に、まだ少なかった卒業生のことが個別に書かれている中に倉崎仁一郎に関する記述があったのでその部分をコピーして宮崎氏に送った。

その中には倉崎が首席で卒業したこと、倉崎たち高等科2年生4名が中心になって、のちの同窓会のもととなる「同窓学生会」を設立したことなどが書かれている。

倉崎仁一郎の経歴は次の通りである。(上記追悼號より)

明治元年2月1日松江で出生

明治12年9月松江中学に入学(注1)

明治19年7月高等科を卒業(注2)

明治19年9月島根県尋常中学校校雇

明治20年10月松江高等小学校訓導

明治23年3月佐賀県尋常中学校教員雇(注3)

明治26年4月尋常中学校尋常師範学校歴史家免許状を取得

明治26年5月尋常中学校尋常師範学校英語免許状を取得

明治26年9月佐賀県尋常中学校助教諭兼舎監

明治28年4月大阪府第四尋常中学校(のち茨木中学校)教諭(注4)

大正6年1月29日死去49歳。

(注：松江北高等学校百年史より)

(注1)：この年には岸清一、若槻礼次郎なども入学している。また仁一郎の兄金之助もこの年の入学である。

金之助は明治16年卒業、明治40年から母校松江中学の英語教師を勤め昭和2年在職中に死去

(注2)：高等科の卒業者はこの年のみで卒業者は4人、倉崎は首席で卒業

(注3)：松江中学の第5代校長(明治16年1月～19年5月)で明治23年初めに佐賀中学校長に転じた田所貢に招かれた。なお、田所は明治23年11月佐賀中学在職中に死去

(注4)：元松江中学教師(?～明治19年8月)で明治28年に創立された大阪府第四尋常中学校(のち茨木中学校)の初代校長となった加藤逢吉に招かれた。

## ●全校生徒がその死を悼み、棺を担った

追悼号を読んでもみると、倉崎が生徒や同僚教師、友人たちから如何に尊敬を受け慕われていたか、その突然の死が如何に惜しまれたかが良く分かる。大宅壮一は川端康成の3年後輩であったが、倉崎の授業は直接受けたことがなかったにもかかわらず、その死を嘆き悲しんでいる。(大宅壮一日記)

葬儀は卒業生、在校生など4～500人が参列し5年生全員で棺を担ったという。

## 特別寄稿『知られざる偉大な先人の面影を尋ねて』

寄稿者の文章を読むと、自然と倉崎の人間像が浮かび上がってくる。

生徒からは「クラっさん」という愛称で呼ばれており、少しも威圧的に生徒に接するわけでもないのに、「クラっさんが来た」と誰かが言えば、皆自然と居住まいを正し静粛になるという不思議な威厳、それでいて慕わしく思わせる親しみやすさも併せ持つ、厳父であり慈父でもあった。

体躯は肥満体で服装には全く頓着せず、いつもよれよれの服に何年も使ったメガネは曲がっていても気にしない。

生徒一人一人のことを家族のことも含めてすべてよく知っていて、病気がちの生徒には対処法を伝授し、不登校の問題生徒には自分の家から通わないかと提案するなど親身になって生徒のことを心配した。

担当の英語は欧米学者にも一目置かれるほど深い学識を持ち、歴史、文学にも詳しく博覧強記、職員室では談論風発でいつも話の輪の中心にいた。研究熱心で給料はほとんど本に費やしていたようだ。

そして名利には全く関心がなく、広島高校などの上級学校の教授にとの話もいくつかあったがすべて固辞し、自分を呼んでくれた加藤逢吉校長の恩義に報いるためにも茨木中学に一身を捧げる覚悟であった。

まさに名の通り「仁」の人であったというべきであろう。

なお加藤逢吉校長は茨木中学の明治28年の創立時から大正10年65歳で退職するまで実に27年の長きにわたって茨木中学の校長を務めた。余談であるが、松江中学ではこの間の校長は8人を数える。当時の教育行政は府県によってずいぶん違ったようである。

川端康成がどれだけ倉崎を敬愛していたかは、一周忌を前にした頃の日記に窺われる。そこには倉崎を懐かしみ、「追悼会を自分が主唱して開きたい、残された幼い娘さんをどこかに遊びに連れて行ってやりたい、そして娘さん二人のうちどちらかを結婚相手にしよう」などと夢想したりしている。(大正7年当用日記)

この時川端は一高の1年生であり、この年の秋には伊豆へ旅行し、8年後、この時の実体験をもとに代表作である「伊豆の踊子」を発表している。

川端は幼児期に両親を亡くし、中学時代は祖父と暮らしたが、祖父は盲目で寝たきりの病人であり、その介護をしながら孤独な毎日を送っていた。(一六歳の日記)

そのようなこともあって、川端にとって倉崎は父のような存在だったのかもしれない。

茨木中学の同窓会である久敬会では倉崎の徳を後世に残すため、茨木の法源禅寺に「倉崎仁一郎先生の墓」を建立した。隣には奥様と夭折した3人の子女の名を刻した墓も建っている。これも久敬会によって建てられたもののようである。いずれも、お骨は埋葬されておらず記念碑的なものと聞いている。倉崎の本家(兄金之助)の墓は松江市奥谷町の禅宗寺院であることは分かったが仁一郎家の菩提寺はいまだ不明である。

昨秋のある日、私は隣町の茨木へ赴き、葬儀の行われた本願寺別院、川端康成記念館のあと本源禅寺を訪ね倉崎の墓を見つけた。墓前で今まで先生が存在を知らなかった不明を心の中で詫びた。1世紀近くの年月を経て、今は先生のことを知る人もいないのか訪れる人もないということであった。本源禅寺は阪急茨木市駅からすぐ近くで、本願寺別院前の道路南側を少し入ったところ、大手町12にある。

さて、倉崎仁一郎に関する調査であるが、何分没後100年近く経った人物のことであり、菩提寺、松江時代の住所、子孫の消息など簡単には解明できず、現在も不明な点が多い。実は調査の過程について種々の偶然や意外なつながりなどが判明し、ドラマのような展開もあって詳細を披露したいのだが、どうしても個人名にかかわってくるのでプライバシーの問題もありここでは控えたい。

しかし冒頭予告した楽山焼元祖倉崎権兵衛とのかかわりだけは記しておきたい。

## ●倉崎家 vs 倉崎家… つながった！ミッシングリンク

当初は電話番号帳などで倉崎家のことを調べたがなかなか手掛かりは見つからなかった。そこで件の「楽山焼元祖倉崎権兵衛の子孫」に望みを託した。松江の川津小学校教師であった内田兼四郎という郷土史研究家書いた本（昭和52年刊行）であり、松江の同期生石倉昭子さんに頼んで市立図書館から借り出してもらい45ページの全文をコピーして送ってもらった。

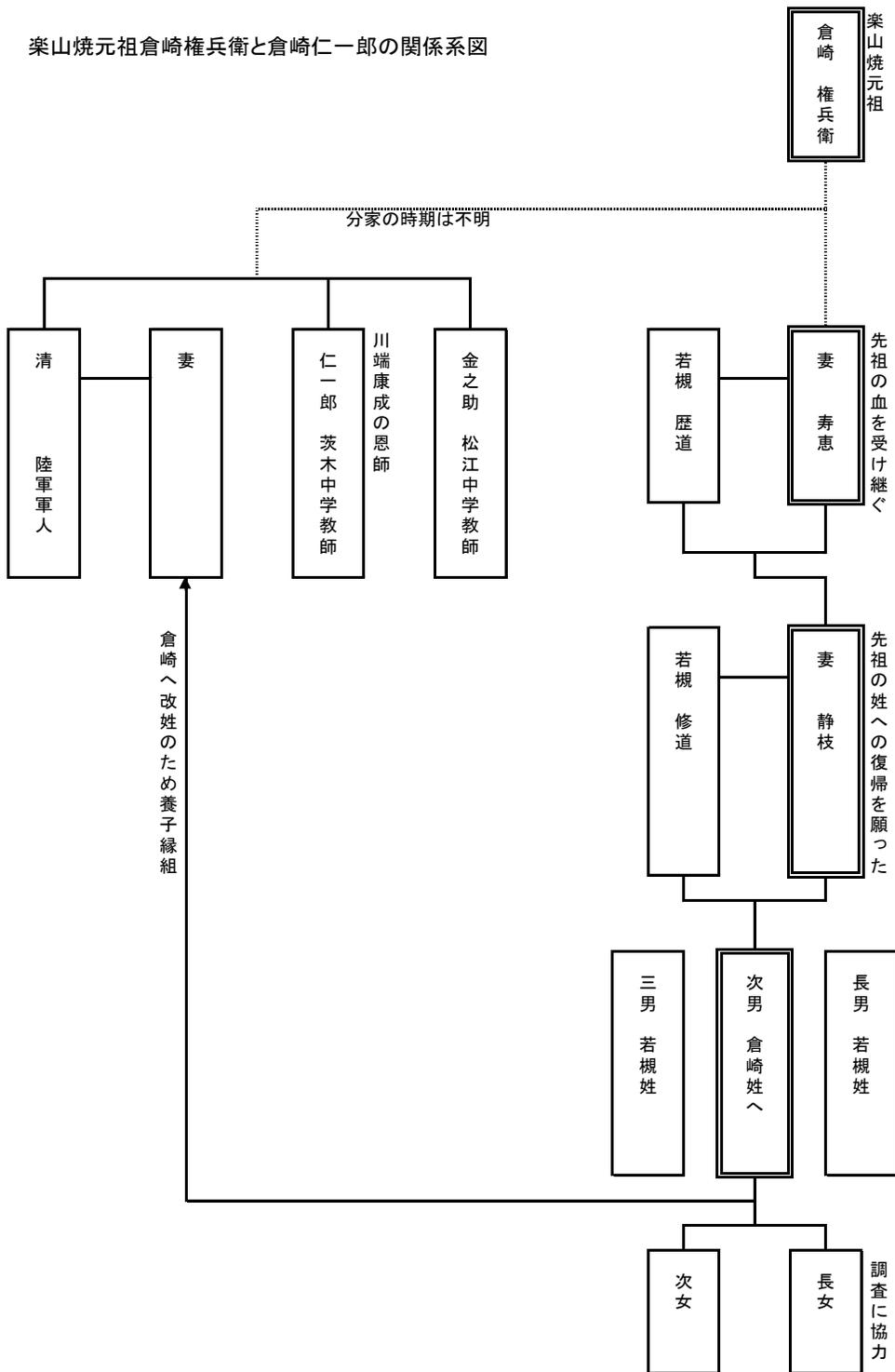
そこには楽山焼の元祖倉崎権兵衛から当代の第11代倉崎氏までの家系図が詳しく記載されていた。しかしながら倉崎仁一郎家系との接点は見当たらず、残念ながら両倉崎家は別系統であり、この線からの調査も行き詰まりかと諦めかけた。

ところが、この本のあとがきに次のようなことが書いてあって気になった。そこには権兵衛の子孫は明治期前から女系が続いたこともあり倉崎姓ではなくなり、「若槻姓」に変わっていたが、当代の母堂が息子に名誉ある先祖の倉崎姓を名乗らせることに強い願望を持ち、苦労して倉崎姓の方を探しだし、その方と次男の方とが養子縁組をしたということであった。

私の心強い松江の協力者石倉昭子さんは行動力抜群であり、まず権兵衛の墓もある若槻家本家（安来市の寺院）に伝手を頼って電話し、仁一郎家との関係や、本にある養子縁組の経緯を聞いてみた。その結果、仁一郎・金之助兄弟家のことは知らないこと、養子縁組は倉崎姓で軍人の未亡人のところの養子に入ったということが分かった。私は「軍人の未亡人」と聞いて即座に確信したことがあった。

仁一郎には兄金之助のほか同じく松江中学を出た（明治33年）弟清がいた。陸士を経て軍人となり大佐（死後少将に昇進）として関東軍兵器部長となったが昭和7年に旅順で病死した。これらは国立公文書館の資料をネットで調べ分かっていった。

楽山焼元祖倉崎権兵衛と倉崎仁一郎の関係系図



「軍人の未亡人」で「倉崎姓」、未亡人の夫は倉崎清に間違いないと私は確信した。

そこで、そのことを安来の当代倉崎家に確認したいと思っていたところ、実に幸運な事態が起こった。宮崎さんが「島根」、「倉崎」をキーワードにしてネット検索しているとき、県の教育関係人事異動記事の中に「倉崎」姓の女性の名を見つけ知らせてきたのだ。早速調べてみると何とそれは倉崎姓となった次男の方の娘さんであり、しかも偶然にも石倉さんの夫君の高校時代の教え子であった。石倉さんは早速この娘さんと面談し、養子縁組の相手先のことを調べてもらった。果たせるかな、未亡人の夫は倉崎清であった。

全く別系統と思われた両倉崎家は思わぬ糸でつながっていたのである。

しかし、驚くのはそれだけではなかった。後日、倉崎家の先代の若槻修道氏の「回顧録」の中に養子縁組の経緯が書かれており、その未亡人は夫の家が倉崎権兵衛の子孫につながる家であることを知っていたと書かれているのを娘さんが見つけたのである。

また、これも全く偶然のことから見つかった兄金之助の孫に当たる方から、「自分の家の祖先は倉崎権兵衛と聞いており、焼き物が伝わっていた」という証言をもらった。安来在住の倉崎家と倉崎三兄弟の家系は先祖を同じくする一族だったのである。

この養子縁組は後世の人間が偶然と思っただけで、当時は当事者間でお互いそれが前提で成立したものと思わざるを得ない。

仁一郎たちが住んでいた家は、明治初期の住宅地図（これも石倉さんが市立図書館で見つけ出した）を拡大鏡で調べ、北堀町の新橋のたもとあたりの堀端にあったことが判明した。志賀直哉の堀端の住まいとも近い。

仁一郎の子孫の消息などまだ調査は終わっていないが、双松の偉大な大先輩倉崎仁一郎については、いろいろなことを知ることができた。調査に関連して「松江北高等学校百年史」を精読する機会を与えられ、「西田千太郎日記」も読むことができた。40kgに満たない体で病苦と闘いながら教育に身を捧げ35歳の生涯を終えた西田の人生には、まさに「坂の上の雲」の明治青年群像の一人を見る思いがして感動させられた。

仁一郎は千太郎日記の十数か所に名前が出ており交友が深かったことが分かる。

小泉八雲が松江に来た時、仁一郎はすでに佐賀に行っていたので直接の交流はなかったが、おそらく西田を通じて何らかの交流があったのではないかと思われる。

## ●調査の報酬が楽山焼の湯呑？

思えば昨年夏のある日、近畿双松会の集まりで「楽山焼元祖の倉崎権兵衛」と「川端康成の恩師倉崎仁一郎」の名を同時に知り不思議な縁を感じて調査を始めたのだった。そして、両家の思わぬ関係を発見したのだが、昨年12月の近畿双松会55周年総会では、更に決定的な

縁を感じるようになった。

なんと30倍の難関を突破して私が手にした福引3等賞は楽山焼湯呑だったのである。数か月の間一生懸命調査に没頭した私に神様がご褒美として与えてくれたのだろうか。その湯呑でお茶をいただくたびにそんなことを考えている。

# 川端康成生涯の恩師 倉崎先生は松江出身

日本人初のノーベル文学賞受賞者、川端康成が旧制中学時代に執筆し、初めて雑誌に載った文章「生徒の肩に柩をのせて」の中で追悼した学校教師、倉崎仁一郎が松江市出身であることが研究者の調べで分かった。文章は川端文学の原点とも言え、倉崎の葬儀を題材にした作品は後年にも2回発表するなど、大作家になっても恩師は大きな存在だった。川端と松江をつなぐ新たな発見として、郷土文学研究の発展も期待される。

(23面に関連記事)

掲載雑誌の「団楽」を3年前に見つけた、熊本市の尚絅大学の宮崎尚子助教(38)は「日本近代文学」が確認した。

文章は大阪府立茨木中学(現・茨木高校)5年生の川端が、英語教師だった倉崎(1868~1917年)の急死を悼み、学年全員で葬儀を挙げた時の体験を記述。同助教は倉崎の死後1年後に発行された同校同窓会の会報追悼号で、倉崎が松江市出身で旧制松江中学(現・松江

北高校)の卒業生であることを知り、松江北高同窓会・双松会のメンバーと調査を進めた。

倉崎の死を受けた川端は文章冒頭で「エッ！ほんとうか？信ずるにはあまりの驚愕であった」とし、涙に暮れる友人や、棺を生徒が肩に載せて運んだ様子を描写。この時の体験は、後に「雪国」などの名作を発表してからも作品名を変えて執筆した。また、1918年の日記では倉崎を「倉っさん」と呼び、「先生の娘2人のどちらかを結婚相手にしよう」とまで書き、強く慕っていたことが分かる。

倉崎仁一郎(左)と娘とみられる人物(宮崎尚子助教の論文から引用)



## 「親のような存在」 同窓会報で研究者確認

追悼号は110頁あり、職員や卒業生、在校生らが執筆し、倉崎は病氣や不登校の生徒と親身になって付き合ひ、英語の学識も豊富だったことなどを紹介。このほか、川端の同校の後輩で評論家の大宅壮一(1900~70年)も日記で倉崎の死を悼んだことが分かっており、人望の厚さがうかがえる。

川端は国語より英語の成績が良く、後に東京帝国大(現・東京大)の英文科に進学したのも倉崎の影響が強いと推測される。

宮崎助教は「父、母、祖母、姉、祖父を続けて亡くした川端にとっては親のような存在で、生涯にわたって恩師と言いつつたのは倉崎先生だけだったのではないか」と話した。

クリック

川端康成「代表作に『伊豆の踊子』『雪国』などがある。1899年、大阪市生まれ。幼少期に両親らと死別した。1917年刊行の雑誌「団楽」は長らく所在が不明で、3年前に名古屋市内の古書店で見つかった。脳溢血で急死した英語教師、倉崎仁一郎の葬儀を書いた作品は1927年の「倉木先生の葬式」と、49年の「師の柩を肩にのみ、後に国文科に転じた。08年にノーベル文学賞を受賞。72年に死去。ガス自殺と報じられた。

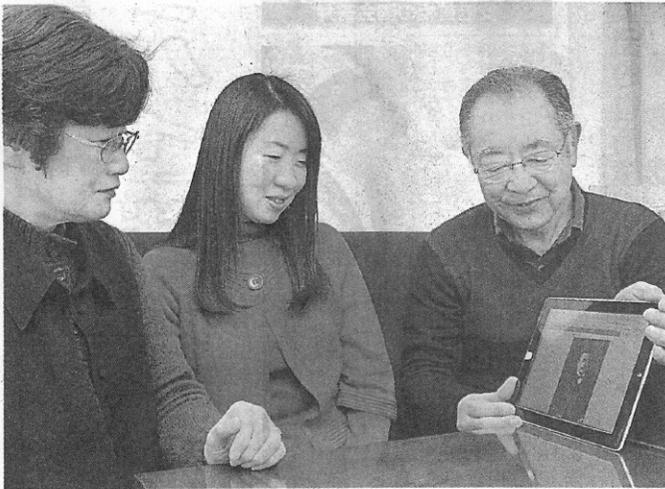
# 調査協力 新事実裏付け

## 母校・松江北高卒業生会

### 川端康成恩師・倉崎先生

川端康成の恩師は松江市の出身。尚絅大学（熊本市）の宮崎尚子助教は、倉崎仁一郎が旧制松江中学（現・松江北高）の先輩にあたる松江北高の卒業生が、郷土文学研究の発展も期待される中、倉崎助教の調査に協力した。

## 発見した宮崎助教「感謝」



倉崎仁一郎について調査した左から石倉昭子さん、宮崎尚子助教、押田良樹さん、松江市内

校の出身であることを旧制茨木中学（現・茨木高校）の資料で突き止めた。郷土文学研究の発展も期待される中、倉崎助教の調査に協力した。

茨木中の資料によれば倉崎は1868（明治元）年生まれで、79年に松江中に入學し高等科を卒業。島根県尋常中学校や松江高等小学校、佐賀県尋常中学校を経て、1895（同28）年から1917（大正6）年に亡くなるまでの22年間、茨木中で勤務した。宮崎助教はこれを知り、近畿在住の松江北高卒業生でつくる「近畿双松会」に「何か分かることはないか」と連絡。同会長で11期卒業生の押田良樹さん（72）大阪府吹田市在住と、同期生の石倉昭子さん（72）松江市在住が連携しながら調査を始めた。松江北高の百年史でも詳細な人物紹介がなく、押田

さんは、小泉八雲と親しかった松江中教頭の西田千太郎（1862〜97）と交流があったのではないかと推測。西田の日記を宮崎助教、石倉さんとひもといたところ倉崎と酒食を共にし、勤務先の佐賀県から毎年お盆の時期に帰省した際には会うなど、17カ所の記述で倉崎との交流が確認できた。また石倉さんは、広島大学所蔵の明治初期の松江市住宅地図を参照し、倉崎が同市北堀町に住んでいたことなどを明らかにした。宮崎助教は「双松会の方がいなければこんなに早く研究が進まなかった。『人を放っておけない』という倉崎先生の精神が受け継がれている」と喜び、押田さんは「倉崎先生のすべてが知りたいし、先生のことを松江北高の卒業生に知ってほしい」と話した。

押田「探偵」チームの成果を大々的にスクープした、3月3日付山陰中央新報1面（前頁）と総合面

## 『私が走る理由』

荒井 悦加(高51・平12卒)



2009年4月、デオデオ(広島)に入社したとき、私の目標はあやふやなものだった。今年の日本選手権で引退しようと思っていた2009年の3月に、当時の監督から勧誘を受けた。駅伝に出ること以外は、練習拠点やメニュー、レースもすべて本人に任せるといふ条件にとっても驚いた。日本の実業団の長距離の現状では、指導者不在で個人活動のような形態を認めることは、とてもめづらしかったからだ。

私にとっては願ってもない条件だったが、この話にすぐにとびつくわけにもいかなかった。入るからには1年や2年で辞めるわけにもいかない。一度引退を決意したのに気持ちが追いつくだろうか。すべてを自由にさせてもらい、松江で一人で練習をして結果が出せるだろうか。女子チームに一人だけ違う拠点の選手が入ることで、チームを乱してしまうことになるか。色んなことが頭をよぎって葛藤したが、自分の中に課題を作り、入部を決断。すべて任せてもらう以上結果を出さなければ。チームのほかの誰よりも強くならなければ。駅伝はどんなときでも必ず戦力でいなければ。自分でやっていくことを誰にも文句を言わせたくなかった。

### ●新しいユニフォームが馴染まない

入社して、結果的にこの2009年は3000mSC(障害)で自己ベストを更新し、アジア選

#### ■荒井悦加さんのご紹介

荒井悦加(旧姓辰巳)さんは1982年福岡県生まれ、中3で松江一中転入、松江北高51期・島根大学の卒業。島大4年の日本インカレで7位に入賞したレースが実業団スタートの上野監督の目に留まったことから、就職内定を辞退して実業団の選手の道にすすむ。

2007年、スタートを離れて無職の不遇時に、8月の世界陸上大阪大会3000m障害の日本代表となり一躍脚光を浴びるが、近畿双松会との縁もこの時の応援から始まる。同年の総会では講演をお願いし、また正月の都道府県駅伝では彼女の数度の出場を沿道で応援するなど、謙虚で明るい人柄とひたむきな生きざまに、近畿双松会員の中にもファンが多い。

その後、一旦、神戸のノーリツに監督とともに入社するが、監督の辞任とともに退社。

2009年4月、広島に本拠を置くデオデオ(現エディオン)に乞われて入社。郷里のデオデオ松江店で勤務しながら一人練習をするという特異な競技生活をスタート。

この逆境とも言える状況を克服して、3000m障害では2009アジア大会優勝、2012・2013の日本選手権を連覇(自己ベストは9分53秒87(2009)は日本歴代2位)駅伝においてもチームの主力選手として活躍。

近畿双松会とのご縁から、この55周年記念会報への「特別寄稿」をお願いしたが、丁度、彼女が駅伝をメインとする実業団選手としてのキャリアを終える時期と重なったことから、ご寄稿はエディオンでのこの5年間の心の記録と言っているものとなっており、あらためて彼女の明るさの裏の努力や心の葛藤に接して肅然とさせられた次第である。

荒井さんのご協力に感謝するとともに、今後の人生におけるご活躍を会員の皆様と心から願い、ご一読をいただければ幸いである(現在はご結婚により境港市在住)

記：事務局長 松本耕司(高16)

手権で優勝、5000mで国体2位と、個人的にはとても良かった。けれどその一方で、チームに対しては一步引いて深くかかわらず、ユニフォームはまるで、よそのチームみたいに馴染まなかった。

入社して3年目の2011年、デオデオからエディオンに社名が変わったのと同時に監督も変わり、陸上部の体制が強化された。アメリカでの長期合宿や栄養管理など、会社やスタッフからのサポート体制がかなり大きくなり、チーム力がついていった。チーム体制が変わるとほぼ同時期、私はというと疲労骨折をしてしまった。この年大きな戦力を補強し、チームメイトはアメリカで高地トレーニング…。出遅れたと思った。焦りと不安しかでてこなかった。

足が治らないまま無理に出場したその年の日本選手権は、結局人生初の途中棄権。屈辱だった。チームメイトの良い結果も心から喜んであげられず、どんどん自己嫌悪におちいっていった。ただ、気持ちは落ちるところまで落ちていったけれど、もう一度ゆっくり立て直そうと思った。まず足を治す、そして少しずつ走ろう。そのために毎日、あえて日本選手権のことを思い出した。いくら私が出遅れようと、どれだけチームメイトがアメリカで合宿をしようと、必ず駅伝のメンバーには入る。私にはできる。それだけを考えて一人で黙々と練習に打ち込んだ2011年の夏だった。

その夏の終わり頃から徐々に走れるようになってきて、チームの長期合宿にも合流できるようになった。故障明けで練習についていくのは必死だったけれど、これまでより多くの時間をチームとともに過ごし、初めてみんなとの一体感を感じていたと思う。そして2011年の西日本予選会、思いがけない好タイムの5位で全日本出場を決めることができた。前年11位で22年連続全日本実業団駅伝出場が途絶え、切羽詰っていた中での結果。駅伝で泣いたのはこれが初めてだった。この頃から自分とみんなとの距離もグッと近くなっていき、チームに合流することが楽しくなっていたと思う。

エディオン4年目（2012年）、この年が一番競技的には充実していたかもしれない。この年はロンドンオリンピック。標準記録は厳しいけれど、去年悔しい思いをした分、しっかり練習して臨もうと思っていた。実はこの年の日本選手権4ヶ月前、心臓のカテーテル手術を受けていた。激しい動悸と目の前が真っ暗になる症状が続き、心室性頻拍症と診断されたからだ。けれど精神的にさほど影響はなかったし、術後のダメージも少なく、練習も無事にこなせた。



2009.11.12 アジア選手権 優勝（中国広東）

## ●近畿双松会応援団の前で日本選手権初優勝

そして迎えた2012年6月の日本選手権、出場9回目(他種目含む)30歳にして初優勝。サポートして頂いた会社やチーム、支えてくれた家族に喜んでもらえてとても嬉しかった。さらにこの年は、エディオンと近畿双松会の応援団が偶然にも長居のスタンドで合体していて、皆さんに初優勝の瞬間を見てもらったこともとても嬉しかった。2007年日本選手権にて初の世界選手権参加標準記録突破、同年8月大阪での世界陸上選手権初出場、そしてこの2012年日本選手権初優勝、これらは全て長居陸上競技場が舞台。私はとことん長居との相性がいいんだと思う。



2007.8.25 世界選手権(大阪長居)

この日本選手権後、私は良い状態を維持し、駅伝に向けてこの夏が一番走り込んだ。チームの状態はなかなか上がり苦戦したが、西日本予選は残り2秒のところギリギリ予選を突破することができた。この年もやっぱりみんなで泣いて喜んだ。でもこの駅伝2日前から右足踵が痛み出す…。西日本予選会后、アメリカのアルバカーキで合宿するが踵痛が悪化。駅伝2週間前には歩くのも困難になってしまった。

自分が走らなければ大きな区間変更になってしまう。仙台の全日本1区は難コース、誰でも走れるコースではない。去年1区で出遅れた分、今年は必ず良い流れをつくりたい。「無



近畿双松会応援団の皆さんの前で… 2012.6.10 日本選手権初優勝(大阪長居)

理しないで休んで」とみんな心配してくれる。でも今練習しなきゃ、中途半端にでるなら意味がない。戦力として出場か、外れるかのどちらかだ。意欲は強くもっていたけれど、不安との葛藤もかなりあった。

1区は7km、ただでさえ自分には長い距離の上に激しいアップダウン、痛みのある私に走りきれるのか？最悪途中棄権もあり得る、駅伝でそれだけは絶対に許されない…。練習で追い込んだ次の日は歩くのも痛い。練習、走れない、練習、走れないの繰り返し。毎日痛みを気に遣い、葛藤と責任で心身ともにギリギリの状態だった。そして、駅伝直前まで悩みに悩んだが、最後には出場を決意。決めてしまえばあとは気持ちを整えるだけ、不安のある自分を頼りにしてくれたみんなのために、足が壊れても必ずいい流れをつくろうと思った。結果は前年区間19位に対して、区間7位でタイムも25秒良かった。足は大きなダメージだったけど、チーム15位という目標通りの結果に貢献できて、心底安堵した。でもこの踵の痛みにより、このあとずっと苦しむことになってしまった…。

## ●踵の激痛、のしかかる責任、心刺す一言

この2012年の全日本駅伝以降、休みたくても出場しなければならないレース、頭から離れない踵痛、様子を見つつの中途半端な練習内容、来シーズンのレース、色んなことにとっても頭を悩ませていた。次の年2013年をエディオン最後の年にしたいというのが自分の中にあっただので、できるだけ長期休養は避けたかった。けれど、この頃ある人から言われた「個人種目を優先して駅伝を軽視している」の一言。このときまでなんとか保っていた私の心を壊すには十分だった。この後足を治すため約一ヶ月の完全休養をとったが、この間、私の心はどんどん崩れていった。

来シーズンに響いても駅伝ははずせない。駅伝で足りない分は個人種目で頑張りたい。3000m障害をやらせてもらう以上、日本選手権は絶対に結果を残したい。この私の思いは通じていなかったのか？最後の年だからと無理してきたけど、チームとしては無理して個人が日本選手権に出る必要などないのだろうか。怒り、不安、葛藤、これらを繰り返し、そのうち無気力に…。

これまで自分がやってきたことを否定された気持ちになった。このときの私の思考は正常ではなかったと思うけど、認めてもらえないのに、やっていることや考えてることがすべてバカバカしく思えた。もう今辞めたっていいや。どうでもいい。でもふとチームメイトのことを考える。このまま辞めたらみんな悲しむだろうな、がっかりするだろうな。もう一回みんなと駅伝走りたいな。頭の片隅にそんなことを思いながらも、なかなかやる気も元気も出ない。落ち込むことは今までたくさんあったけど、無気力になったのは初めてだった。まずこの自分を何とかしなきゃ…。

## ●すべてを忘れよう

そのために最初にやらなければならないことは、すべて忘れることだと思った。今日でき

ることだけ考える。レース、合宿、練習メニューなど、先の目標をつくらない。先のことを考えると焦りしか出てこない、もう間に合わないからとやる気をなくしてしまう。その代わり、今日できることは全部やろう。矛盾してるけれど、日本選手権に出るために、日本選手権のことを考えるのをやめよう、と。でもこれらを実行しようとしても、怒りや失望がときどきぶり返して、それを抑えるのが大変だった。ストレスで体調を崩したり、夫に八つ当たりしたこともあった。それでもなんとか少しずつ精神状態は回復。足は痛み止めの注射を打ちながらの練習だったが、それでもだんだんと練習ができるようになっていった。

そして迎えた2013年6月9日、東京味の素スタジアムでの日本選手権当日、出場まで状態を回復できたことに自信をもち、集中して臨むだけだ。遷宮を終えた出雲大社にもお参りに行った。短期間でもできることはすべてやった。その結果、優勝して2連覇。記録は平凡だったが、ゴール後感極まった。乗り越えたものがあったから、初優勝のときよりも何倍も嬉しかった。



2013.6.9 日本選手権二連覇（東京調布）

けれどこの日本選手権後、長期休養をとる

も足は完治せず、なんとか10月の駅伝、西日本予選に向けて立て直そうとしたけれど、結果は個人的にもチームも惨敗。一年間痛みを抱えたまま無理してきた足も限界で、結局これがエディオン所属で最後のレースとなった。

チームを去ることを決めてから、自分の気持ちを整理してきた。入社したときは、チームの誰よりも強くなければ認めてもらえないし、それがチームのためになると…。でもそれはそのうち疑問に変わった。個人で練習している選手のほうが強いというのは、チームにとって良いことなんでしょうか。スタッフのやり方や考え方に対して、若い選手に疑問を持たせてしまうのではないかと。慕ってもらって相談にのって、何を言ってあげたらいいんでしょうか。私の意見や主張が、チームづくりの妨げになりはしないでしょうか。それともこんなことを思うことは私の思い上がりでしょうか…。

### ●これからは走ることに自由でありたい

一緒に過ごしながらも言葉を選び、葛藤した日々。けれどメンバーとの距離が近づき、一緒に走ることがとても楽しくなって、いつの間にかユニフォームも馴染んだ。私を受け入れてくれたみんなのために力になりたいと、いろんなことを考えながら走ってきた。

会社に認めてほしい、スタッフに迷惑をかけたくない、メンバーに受け入れてほしい、これがきっとエディオンでやってきた私の一番の目的だったんだと思う。チームでの存在意義を求めて…。そして、違う拠点でやっていたからこそ、チームワークを大事にしたいと考えてやってくることができた。不器用で未熟で、何を成し遂げたわけでもないけれど、エディ

オンで走ってきてよかったと思う。このチームで充実した実業団生活を送ることができた。

今後は市民ランナーとして走ることを楽しみたい。変かもしれないけれど、引退とかいつまでという言葉で縛りつけず、走りたくなったら走るし、休みたくなったら休む。私は、走ることに自由でありたいと思う。

今回の執筆は、ありのままを書くことに戸惑いもありましたが、ぐちゃぐちゃだった自分の気持ちを整理することができるとても良い機会となりました。このような機会を与えていただいた近畿双松会の皆さんに、この場を借りてお礼申し上げたいと思います。最後まで長文にお付き合い頂き、ありがとうございました。

#### 「荒井 悦加選手 3,000m 障害 主要大会記録」

作成：押田良樹

年月日	所属	大会名/会場	順位	記録	備考
2007年 6月29日	和光アスリートクラブ	第91回日本陸上選手権	2位	9分57秒02	世界陸上B標準突破 優勝 早狩 実紀
		大阪市 長居陸上競技場			
2007年 8月25日	和光アスリートクラブ	第11回世界陸上選手権	予選18位	10分32秒67	優勝 クリスティナ カサンドラ(ルーマニア)
		大阪市 長居陸上競技場			
2008年 6月28日	ノーリツ	第92回日本陸上選手権	3位	10分01秒59	優勝 早狩 実紀
		川崎市 等々力陸上競技場			
2009年 6月26日	デオデオ	第93回日本陸上選手権	2位	9分58秒64	優勝 早狩 実紀
		広島市広島広域公園陸上競技場			
2009年 11月12日	デオデオ	第18回アジア陸上選手権	1位	10分05秒94	
		中国 広東オリンピックスタジアム			
2010年 6月5日	デオデオ	第94回日本陸上選手権	2位	10分04秒37	優勝 早狩 実紀
		丸亀市 丸亀競技場			
2011年 6月11日	エディオン	第95回日本陸上選手権	途中棄権		優勝 早狩 実紀
		熊谷市熊谷スポーツ文化公園			
2012年 6月10日	エディオン	第96回日本陸上選手権	1位	9分55秒93	
		大阪市 長居陸上競技場			
2013年 6月9日	エディオン	第97回日本陸上選手権	1位	9分58秒22	
		調布市 味の素スタジアム			
2013年 7月5日	エディオン	第19回アジア陸上選手権	4位	10分11秒36	優勝 RUTH JEBET (ブルネイ)
		インド シヴ・チャトラパティ・スタジアム			

#### 自己ベスト

3,000mSC 2009年6月6日 ホクレンディスタンスチャレンジ 9分53秒87 (日本歴代2位)  
 800m 2005年 2分10秒53  
 1,500m 2006年 4分18秒01  
 5,000m 2006年 15分49秒45

第27回産経国際書展文部科学大臣賞

田村廸子(高11・昭35卒)



(田村さんは近畿双松会の会員作品ギャラリーメンバーで、HPで作品をご覧いただけます)

組写真『夏の日』（撮影：鶴見緑地）  
平成25年10月 吹田市展・教育委員会賞  
三吉 孜(高16・昭40卒)



(三吉さんは近畿双松会の会員作品ギャラリーメンバーで、HPで作品をご覧いただけます)

## 近畿双松会 55年の足跡～母校(双松会)と近畿双松会の歩み

年	西暦	母校(双松会)	近畿双松会
明治9年	1876	教員伝習校(殿町)に変則中学科創設	<p>大正以前から、大阪に現在の近畿島根県人会の前身である(社)島根県友会があり、第二代の理事長に四方田保氏(中20)が就任、(中略)その県友会に松江中学出身者が多かったことから四方田氏が結成を主唱…(米村又男氏(中34)の「回顧茫茫」より)</p> <p>(伝・大正末～昭和初期)近畿双松会設立(第一次) ・会長:四方田 保(中20)</p> <p style="text-align: center;">&lt;戦争による活動の中断&gt;</p> <p>昭和33年活動再開、近畿双松会設立(第二次) ・初代会長永岡孝二(中42) 昭和33年～昭和53年</p> <p>★昭和42年近畿松江高校・松江北高校同窓会発足 ・会長 和田亮介(高1)</p> <p>昭和43年、10周年記念総会举行</p>
明治10年	1877	松江中学として独立	
明治12年	1879	殿町(現在の市町村振興センター)に松江師範学校と共用の新校舎竣工	
明治17年	1884	島根県第一中学校と改称	
明治19年	1886	島根県尋常中学校と改称	
明治20年	1887	独立校舎竣工(現在の殿町県警本部付近)	
明治22年	1889	松江州市制施行、人口35,804人(全国22位)	
明治23年	1890	ラフカディオ・ヘルン、英語教師として着任	
明治26年	1893	島根県第一尋常中学校と改称	
明治30年	1897	赤山校舎の新築・移転 通信教育部、県立松江工業高校より移管 ★松江市立高等女学校創設	
明治34年	1901	島根県立第一中学校と改称	
明治40年	1906	島根県立松江中学校と改称 校旗の制定 ★島根県立松江高等女学校に昇格	
明治44年	1910	●松江市立女子技芸学校創設	
大正3年	1914	起雲館竣工	
大正12年	1923	◆松操高等女学校創設	
昭和2年	1927	●松江市立家政高等女学校に改称	
昭和15年	1940	校舎改築・落成	
昭和16年	1941	●松江市立高等女学校に昇格	
昭和23年	1948	学制改革により島根県立松江第一高等学校と改称 5月火災により校舎全焼、12月新校舎落成 ★島根県立松江第二高等学校開校 (◆松操高等女学校を統合) ●松江市立高等学校開校	
昭和24年	1949	松江一高、二高(旧県立高女・松操高女)、市立高校(旧市立高女)の三校統合し、島根県立松江高等学校として発足 旧松江一高を北校舎、旧松江二高を南校舎とす	
昭和25年	1950	赤山の北校舎を廃し、西川津町の南校舎を大増築して実質統合	
昭和28年	1953	校歌制定(作詞 土岐善麿、作曲 高田三郎)	
昭和29年	1954	定時制宍道分校を設置	
昭和30年	1955	通信教育部、県立松江工業高校より移管	
昭和33年	1958		
昭和36年	1961	島根県立松江高等学校の二分化により島根県立松江北高等学校と改称 島根県立松江南高等学校創設 被服科を廃止し、定時制宍道分校を南高に移管 通信教育部を島根県立松江北高等学校通信制課程と改称	
昭和41年	1966	創立90周年記念式典を举行	
昭和42年	1967		
昭和43年	1968	理数科設置 校舎移転改築期成同盟会結成	
昭和50年	1975	新校舎地鎮祭(赤山)	
昭和51年	1976	「松江北高等学校百年史」を刊行	

年	西暦	母校(双松会)	近畿双松会
昭和 53 年	1978	赤山新校舎に移転 創立 100 周年並びに校舎・起雲館竣工記念 式典を挙(100 周年記念会館を起雲館と命 名)	・二代会長 山根誠(中 46) 昭和 53 年～昭和 59 年
昭和 54 年	1979	双松会、松高北高同窓会が合併し、「双松会」 を創立	
昭和 58 年	1983	市内校区再編成により島根県立松江東高等学 校創設(市内に北・南・東の 3 普通高校鼎立)	昭和 58 年、25 周年記念総会挙(推定) 会則を変更し、旧中・松高・北高の三校大合同 の組織基盤を確定
昭和 59 年	1984		・三代会長 横山春樹(中 55) 昭和 59 年～昭和 63 年
昭和 61 年	1986	創立 110 周年記念式典を挙	この頃から行楽会(バスツアー)を開催
昭和 62 年	1987	双松(二本のうちの一本)訣別・新生式典を 挙	
昭和 63 年	1988		・四代会長 児玉治利(中 61) 昭和 63 年～平成 8 年
平成 3 年	1991	創立 115 周年記念式典を挙	★平成 3 年頃、三校同窓会大合同完了 (近畿松江高校・松江北高校同窓会は発展的解消)
平成 4 年	1992		第一回ゴルフコンペを開催(以降継続)
平成 5 年	1993		35 周年記念会報発行
平成 8 年	1996	創立 120 周年記念式典を挙	・五代会長 和田亮介(高 1) 平成 8 年～平成 14 年
平成 10 年	1998		平成 10 年 10 月 25 日設立 40 周年記念総会
平成 13 年	2001	双松(残る一本)訣別式典を挙 創立 125 周年記念式典を挙	
平成 14 年	2002		3 月 選抜高校野球 21 世紀枠出場を応援 ・六代会長 山本雅昭(高 7) 平成 14 年～平成 19 年 北高世代会員の入会促進運動開始
平成 15 年	2003		45 周年記念会報発行
平成 17 年	2005		ホームページを本格リニューアル(以降継続) 行楽会(バスツアー)を終了(天川村)
平成 18 年	2006	創立 130 周年記念式典を挙	第一回歴史ウォーキング開催(以降継続) 第一回文楽鑑賞会開催(以降継続)
平成 19 年	2007		8 月辰巳悦加(高 51)の世界陸上大阪大会出場を応援 ・七代会長 永江幹雄(高 13) 平成 19 年～21 年
平成 20 年	2008		11 月 30 日 設立 50 周年記念総会(於:太閤園) 50 周年記念会報発行 慶弔規定を廃止 第一回落語鑑賞会開催(以降継続)
平成 21 年	2009		・八代会長 押田良樹(高 11) 平成 21 年～ 運営方針の明確化(5 年に一度の周年行事を"核"に) 東京双松会との交流を開始
平成 22 年	2010		総会を初めて大阪市中央公会堂で開催 世代を超えた交流推進の強化(情報提供要請)
平成 23 年	2011	創立 135 周年記念式典を挙	第一回里山歩くぞ!ハイキング開催(以降継続)
平成 24 年	2012	松江北高校通信制課程の閉課程式を挙	11 月総会で会則改訂を承認(卒業生全員が会員) 会員名簿の発行の廃止
平成 25 年	2013		4 月 新会則の運用(会費を「運営費」支援に変更) 12 月 8 日 設立 55 周年記念総会(於:大阪市中央 公会堂) 55 周年謝恩大福引き大会実施 55 周年記念会報発行

(参考) 平成 14 年 3 月 29 日、第 74 回全国選抜高校野球大会に 21 世紀枠で出場(55 年ぶり 2 度目)

## 1. はじめに

「50周年号」では3名の大先輩の方々の投稿を復刻し、草創の頃の足跡に思いを馳せたが、この「55周年号」では現代史を記録に残すべきであると考え、不十分ではあると思うが急遽この稿を書かせていただいた。

総じて、この10年余の期間は、現在の第二次近畿双松会に北高世代の方々の参加を願い続け、様々な新しい試みを加えながら、その試行錯誤を経て、やがて昨年4月の会則改訂に至ったと言える。この会則改訂は近畿に在住する卒業生全員が本来会員であることを明記し、会費という呼称も変更するなどの基本的な改訂で、これにより昨年4月からは新たに第三次近畿双松会がスタートしていると言ってもいいのかもしれない。

## 2. ご縁の始まり

私は16期で北高単独の入学2年目、大橋の南には高校時代の友人はいないという年代である。そんな私が確か50歳を過ぎた頃、職場に石橋直之氏(22期)の訪問を受けたことから近畿双松会とのご縁が始まり、2000年(平12)には正式入会し16期幹事となった。

2002(平14)年には選抜21世紀枠での甲子園出場が決まり、その前の高揚感一杯の役員会に参加してすごい組織だなと感じたのを覚えている。

その熱狂の甲子園が終わった某日、阪神百貨店・中華「黄老」に当時の和田亮介会長(1期)、山本雅昭副会長(7期)から若手の役員に招集がかけられ、一言で言えば「これからの近畿双松会を、とりわけ北高世代の会員の拡大を」とのご指示があった。こうなれば逃げられるものではないと覚悟を決めたことを昨日のように思い出す。

## 3. 北高世代の会員拡大

この2002年の総会で和田会長が退かれ、新しく山本会長が就任。事務局長は永江幹雄副会長(13期)の兼務、私は「会員増強担当」という役目をいただき、その後ひたすら北高の後輩世代の方々に参加を呼びかける日々が始まった。

活動は、登録会員が400名を割るところまでに減っていたことから、未登録の沢山の皆さん(特に北高世代の)への案内をどう増やしていくかから始め、若い期の役員の方々と善後策の協議を重ねていったが、これが簡単な話ではないことをすぐに思い知らされることになる。

第一に、北高は、南高・東高もある現在では松高時代の3分の1の規模である。第二に、昔日に比べ松江との距離が飛躍的に近くなり、大阪で集まる意味は?となる。第三に、同期会があれば十分で、同窓会までは?という永遠の課題がある。第四に、65歳程度までは働かざるをえなくなっている社会の変化、即ちお互いに余裕がなくなっているという問題。そして最後に決定的なことは、北高世代の人たちの大半は近畿双松会の存在を余り詳しくは知らず・・・、つまり大きな空白ができていたという事実であった。

そういった課題に、後述する「この間の取り組み」で対応しながら、すすめてきた登録会員数の変遷は、毎年の入・退会を差し引きした後の数字で下記のとおりである。

2002年(372名)、2003年(402名)、2004年(417名)、2005年(432名)、  
2006年(432名)、2007年(471名)、2008年(480名)、2009年(479名)、  
2010年(489名)、2011年(481名)

#### 4. これまでの取り組みだけでは限界？も、そして「会則改訂」へ

前述の経緯のとおり、開始時より登録会員が差し引きしても100名以上も増え、北高世代の比率も年々高まってきたのは喜ばしいことであったが、後半の数字からもこれまでの取り組みだけでは頭打ちになってきていたことを感じていた。

また、入会・退会を毎年個別に管理していく方法が今後の時代も可能であろうかという問題も考え、2012年度に入ってから役員会での数次の協議の上、2012総会で承諾をいただき、冒頭の会員資格をオープンにするという抜本的な「会則の改訂」に踏み切った次第である。

#### 5. この間(2002～2013年)の取り組み、主な出来事

この間の主な取り組み、出来事を以下に列記して、将来への記録にとどめておきたいと考える。

##### 2002(平14)年

- ・北高が選抜甲子園「21世紀杯」に出場、アルプススタンドで大応援。
- ・会長に山本雅昭氏(7期)、副会長に門脇州美(12期)・永江幹雄(13期)・内田一三夫(14期)・松本耕司(16期)・千葉秀二(19期)・石橋直之(22期)の各氏、また事務局長に永江幹雄氏が就任。

##### 2003(平15)年

- ・伝統行事の「行楽会」(朝倉一乗谷バスツアー)で、山本律郎顧問(中57期)が最後となった名歴史解説。
- ・総会で児玉治利常任顧問(中61期)が「母校を離れて六十年」の歴史に残る名講演。
- ・この年から総会案内、入会案内の発送数を一気に拡大。

##### 2004(平16)年

- ・副会長に押田良樹氏(11期)が就任。
- ・長く会報発行を担当された竹内一郎氏(1期)、門脇州美氏(12期)が退任。
- ・この年から将来への布石として、北高新卒の近畿地区進路者に総会の案内を開始。

##### 2005(平17)年

- ・ホームページの本格リニューアル開始。(押田副会長担当)
- ・天川村行楽会をもって、近畿双松会の名物行事であった「バスツアー」を終了。
- ・会報発行担当に千葉潮副会長(30期)が就任。

## 近畿双松会 2002～2013年の活動報告

### 2006(平18)年

- ・監事に高本薫氏(13期)が就任。
- ・バスツアー中止に代わり、新しく「歴史ウォーキング」を開始(第1回は山の辺の道)。(押田副会長担当)
- ・新しく「文楽鑑賞会」を開始。(千葉潮副会長担当)
- ・本部「双松」名簿発刊による近畿在住者名簿の総点検。
- ・この頃から、総会、各行事の参加者の写真は予算の許す限りお届けすることを励行。

### 2007(平19)年

- ・陸上部OGの辰巳悦加さん(51期)(現荒井)が長居での世界陸上大阪大会に出場の快挙。松江と協力して応援団を編成。
- ・総会で辰巳さんが講演:「世界陸上女子3000m障害に日本代表として出場して」
- ・会長に永江幹雄氏、副会長に渡辺悟氏(20期)、また事務局長に松本耕司氏が就任。

### 2008(平20)年(設立50周年)

- ・年会費2千円を3千円に改訂。
- ・会則内規の「慶弔規定」を廃止。
- ・新しく「落語鑑賞会」を開始。(第1回天満天神繁昌亭)(渡辺副会長担当)
- ・設立50周年記念総会を太閤園迎賓館で開催(158名参加)  
＜記念講演はソニー株井原勝美副社長(20期)の「ソニーのグローバル成長戦略」。感謝状は特別会員八木幸治先生、児玉治利第四代会長、和田亮介第五代会長、山本雅昭第六代会長、松本幹彦双松会会長(1期)の五氏に贈呈。記念品は永年連続ご寄付者43名に贈呈。懇親会では美保関町から「正調関乃五本松節保存会」の公演＞
- ・設立50周年記念会報を発刊。  
＜過去の会報から米村又男(中34期)横山春樹(中55期)岩成哲男(9期)三氏の「復刻」版を掲載、また2003年の児玉常任顧問の総会講演内容をご本人の加筆を経て詳録を特別掲載、会員からの「近況紹介」を掲載＞
- ・会報の発行時期を総会時から年度末へと変更、年度と掲載内容のズレを修正。

### 2009(平21)年

- ・運営方針の明確化。  
＜50周年終了を期し、以降「5年に一度の周年事業を盛大に行い、間の4年の通常年は巡航運転」として、運営にメリハリをつけていくことを決定＞
- ・会長に押田良樹氏が就任。
- ・会報発行担当に渡辺悟副会長が就任。通常年の会報の簡素化、広告取り活動を抑制。会報発行は、総会に次ぐ伝統事業として将来に亘り継続。
- ・「会員名簿」の発行を中止、年度異動者のみを会報に掲載。
- ・東京双松会と総会相互表敬などの交流開始。

## 2010(平22)年

- ・副会長に松本潤氏(23期)、監事に梅木隆志氏(16期)、物種慶子氏(20期)が就任。
- ・総会を念願の「大阪市中央公会堂」で開催することに成功(参加132名)。(宍道弘志常任幹事(31期)のくじ運でゲット)
- ・世代を超えた交流促進のため、「小・中学校名・在校時クラブ名」の登録を推進。

## 2011(平23)年

- ・5年に一度の本部「双松」名簿発刊により、近畿在住者名簿を総点検。
- ・総会で初のミュージックライブを、宇田川妙さん(27期)を安来から迎えて開催。
- ・新しく「健脚ウォーキング」を開催。以降、「里山歩くぞ!ハイキング」に改称。

## 2012(平24)年

- ・総会で「会則」を抜本的に改訂。
- ・会員名簿の会報等への掲載を廃止。
- ・北高の協力により当年度「松江北高十大ニュース」を会報に掲載。

## 2013(平25)年(設立55周年)

- ・4月「新会則」の運用開始、会費に代わり「運営費」支援を要請。
- ・設立55周年記念総会を大阪市中央公会堂で開催(153名参加)。  
＜記念講演は山陰合同銀行株古瀬誠会長(16期)の「企業の社会貢献活動～私の経営理念～」、55周年記念事業は「謝恩大福引き大会」を実施＞
- ・設立55周年記念会報を発刊。

## 6. 振り返って

以上を振り返っても、当初に考えた北高世代の拡大はまだまだ真に不十分であるし、参加が不活発な期も多数あり、道半ばであることは認めざるをえない。しかし、折々のむつかしい状況に取り組みながらとにもかくにも55年の時を刻むことができたことは、なかなか他校では聞かない、誇ってもいいことではないかと思ひ、一面では安堵もしている状況である。

## 7. 今後への思い

旧制松江中学と新制の松江高校、ましてや2分割、3分割された松江北高では、138年の歴史を経て同じものを見つけることはなかなかむつかしい。

しかし、近畿双方会の今日があるのは、松中・松高・北高と時代と形は変われど、それぞれがそれぞれの母校に誇りと愛情を持ってきたからこそ、その総和が伝統となり、この近畿の地で歴史の糸を紡いできたと言って間違いないのではないかと考える。

この近畿双松会を自然な形で将来につないでいくことが、この10年の課題であったが、形の上では会則改訂により後世の皆さんへのメッセージは発信できたと思ひたい。しかし、結局のところは会則があろうがなかろうが、卒業生全員がこんなにも長く続いたこの会をお

互いの共有財産として、慈しむように守っていくことが大事ではなからうかと考えている。

### 8. 終わりに

「同期会をしているので双松会までは考えません」というお答えに反論することは殆ど不可能である。同期会は、人生の同じ時間を同輩として共有してきた、励まし合い慰め合うことのできる場で、いつの時代でもそれが“核”であり、言わば横の軸である。一方、時代をつなぐ言わば縦の軸は歴史や伝統を伝えていく上で欠かせないもので、先輩を尊敬し後輩を慈しむことのできる近畿双松会のような場合は、縦糸横糸綾なして初めて織物ができるように、人生においても大変有意義な存在ではないかと考える。

母校が存在する限り、毎年前途有為な若者が輩出されてくるが、それを楽しみとし、いついつまでも慈しむ気持ちで迎えることができる近畿双松会でありたいと願っている。

55周年懇親会の締めのご挨拶で、和田亮介第五代会長からは後の世の語り草となるようなお褒めの言葉をいただき、役員一同有難く感激をもって拝聴した。しかし、まだまだ「道半ば」であることは前述のとおりで、引き続きこの会を将来につないでいくためには、新しい若い力の参加を得ながら卒業生全員の皆様のご協力をいただくことが基本中の基本であると考えている。皆様の今後とものご理解ご支援を切にお願い申しあげる次第である。

### 9. 最後になりましたが…

この間の取り組みは、歴代会長をはじめ多くの会員の皆様、役員の皆様、特に事務局会議の皆様のご協力の賜物でありました。お名前をすべて挙げることはできませんが、厚く御礼申し上げます。

特に、押田良樹会長にはその温厚なお人柄で近畿双松会をリードいただくとともに、すべての行事にご参加いただき、同時に今もホームページをお一人で運営いただいています。土田和男常任幹事(16期)にはあらゆる行事に「従軍カメラマン」を任じて同行いただきました。また、ウォーキング、ハイキングでは古川幸孝氏(14期)、田中由美子氏(16期)の格別のご協力をいただきました。厚く御礼を申し上げます。

悔やまれるのは、平成22年11月に高本薫監事(13期)のご逝去の報に接したことで、私の年代以下の役員には大変なお心遣いをいただいていたと思います。あらためて感謝の念を捧げさせていただきます。

また、山本雅昭常任顧問の特別のご配慮で、事務局をおかさせていただいている㈱トーヨーコーポレーションの皆様、特に、郵便・電話收受の大事な役をお願いしている近田様にはこの間も大変なご協力をいただきました。ここに紙面を借りて心から御礼を申し上げます。

最後になりましたが、総会や諸行事にご参加いただいて近畿双松会を盛り上げていただきましたすべての会員の皆様に重ねて厚く御礼を申し上げ、この報告を終わらせていただきます。

以上

番傘川柳本社 同人

**竹 森 雀 舎 (英二)**

(高2期)

〒 565-0823 大阪府吹田市山田南 44-9

TEL : 06-6877-3639

佐和田登記測量事務所 (松江市) 顧問  
近畿飯南会顧問 縁結び相談

**佐和田 丸 (松高10期)**

〒573-1182 大阪府枚方市御殿山町 11-33-610

電話・FAX 072-848-7417

以下縁結びコーナー

- ・本人 昭和54年生 男性  
大学院専修科終了 茨木市内神社跡取 結婚後別居
- ・本人 昭和40年生 男性  
阪大薬卒業薬剤師 土地家屋調査士

弁護士 **新 谷 勇 人**

(松高11期)

事務所

〒 530-0041 大阪市北区天神橋 2-3-10 の 201

tel: 06-6882-0891 fax: 06-6882-0892

e-mail: arayaisahito@gmail.com

◆ご贈答・お歳暮・お中元・日々の食卓に◆

日本海の荒波で育ったヘルシーで、美味しい魚だけを  
ひと塩、ふっくらな食感に仕上げました

# こだわりの 一夜干し

創業天保年間

# 泉屋商店

島根県松江市鹿島町恵曇港<sup>えとも</sup>

TEL.0852-82-0015/0056 FAX.0852-82-2700

URL : <http://etomo-izumiya.com/>

株式会社トーヨーコーポレーション

山本雅昭

## 編 集 後 記

福引あり、「学生時代」の大合唱あり、期を超えた交流の中で総会は盛り上がりました。その感想が自画自賛ではないことを、和田亮介元会長の講評で確認することが出来ました。「今までに感じたことのない感動」「先輩と後輩が一体となった心に残る記念の会」。大先輩にお褒めいただき、うれしい限りです。

そうした会場の雰囲気の再現に努めるとともに、皆さんからの投稿を大幅に増やした本号。もっと掲載したい記録類があったのですが、端折らざるを得ませんでした。それでもこのボリュームです。



記念総会当日早朝、中央公会堂前の路上で、鳥根ナンバーのトラックから福引用商品を受け取る事務局メンバー

長編力作から近況報告の数行の短文に至るまで、いずれも多様多彩かつ多才。母校の底力を心底痛感したことでした。個別にわたって紹介宣伝をしたいのをこらえてお願いいたします。と・に・か・く・お読みください。

いつものことながら、この冊子は1から10まで松本事務局長のデスクワークで完成にこぎ着けました。ありがとうございました。

(渡辺 悟=高 20 副会長)

### 近畿双松会報

2013(平成 25)年度版 通巻 55 号

発効日/平成 26 年(2014 年) 3 月 31 日

編集兼発行者/近畿双松会

発行所/近畿双松会事務局

所在地/〒 550-0002

大阪市西区江戸堀 1-21-35

(株)トーヨーコーポレーション内

TEL 06-6443-2062

FAX 06-6443-9736

郵便振替口座/ 00910-0-103665

近畿双松会